

788.5

N73

788.5-N73ウ



1200500752900



始



788.5
N73



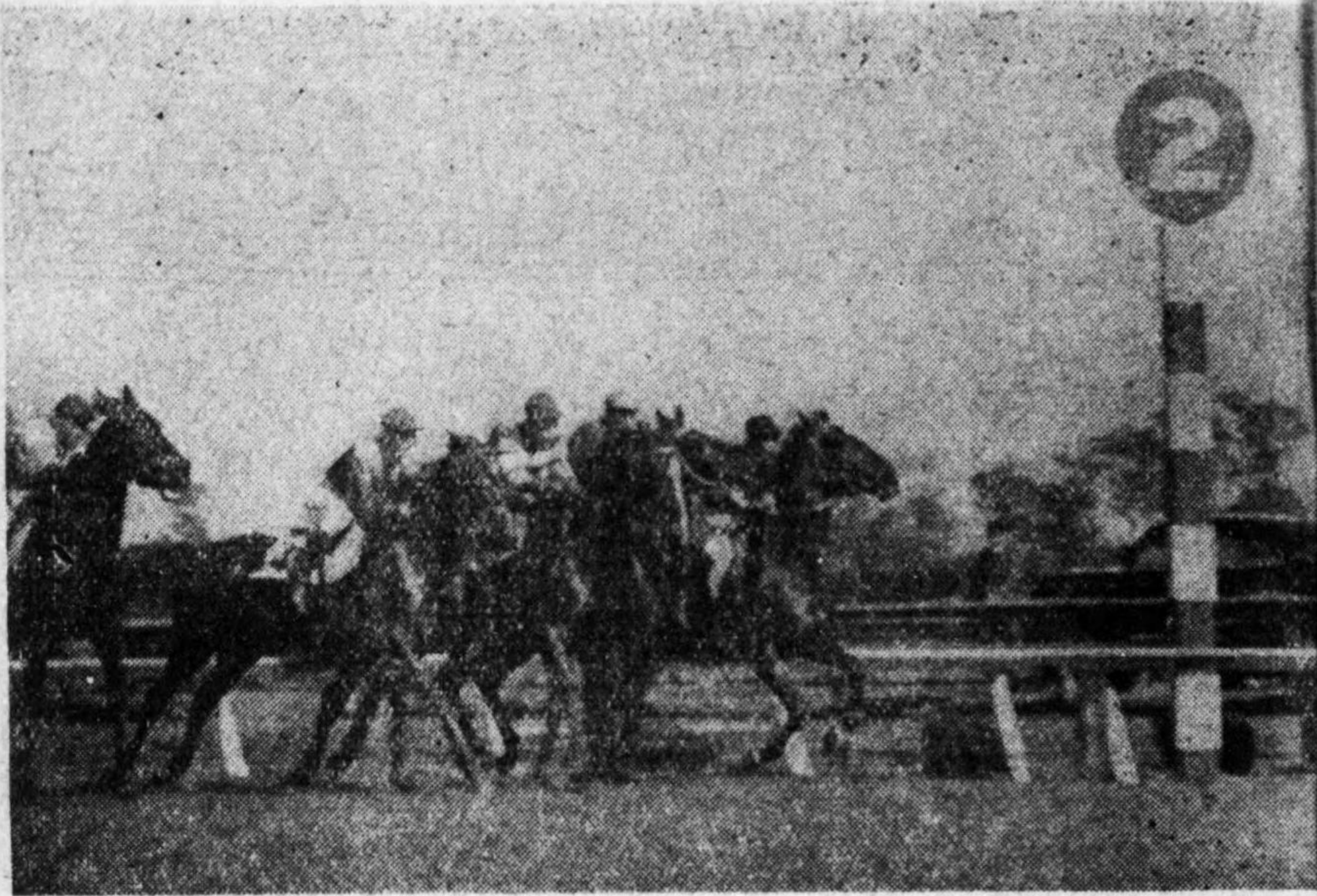
競馬新讀本

日刊ボス





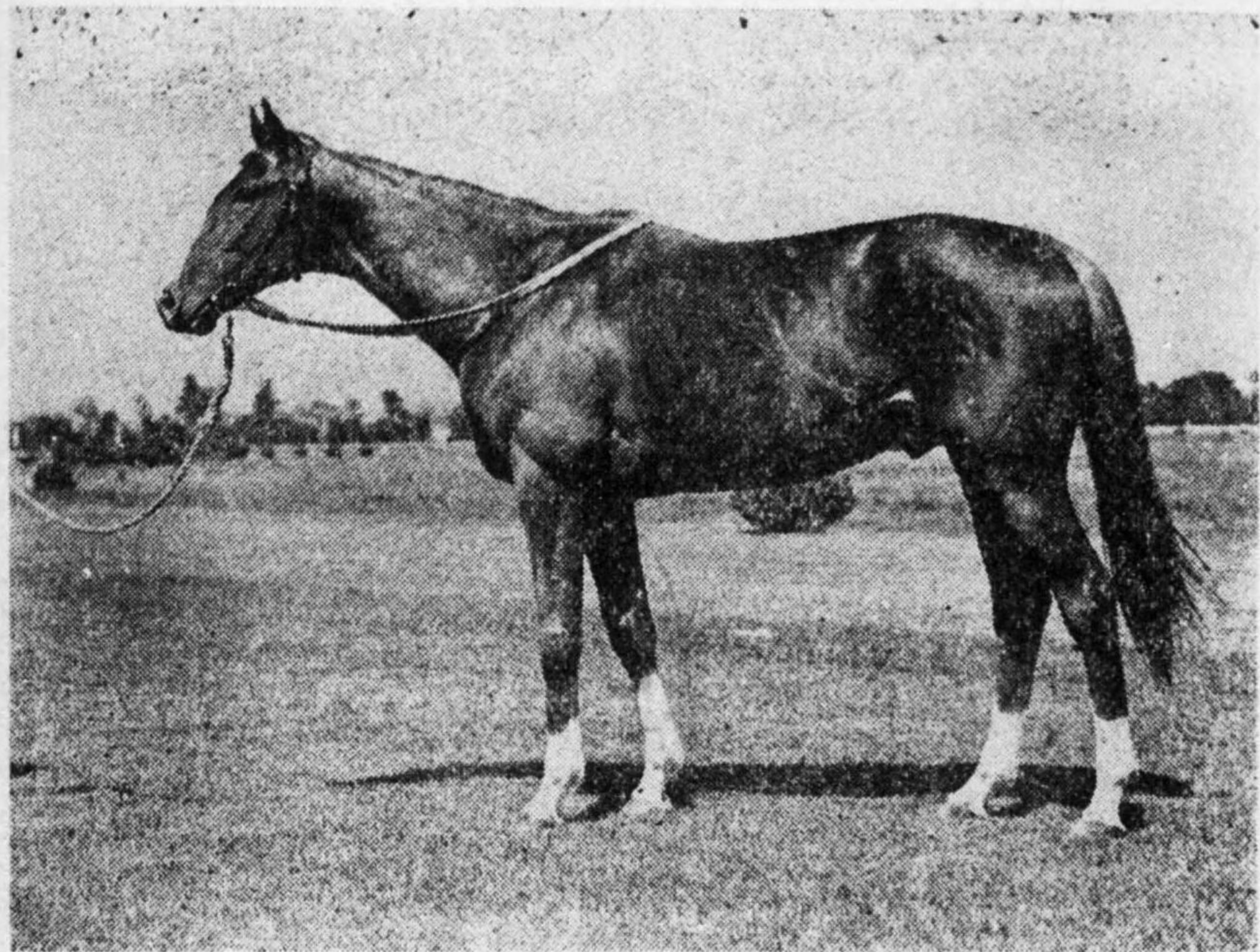
ラスト・スパート (最後の力走)



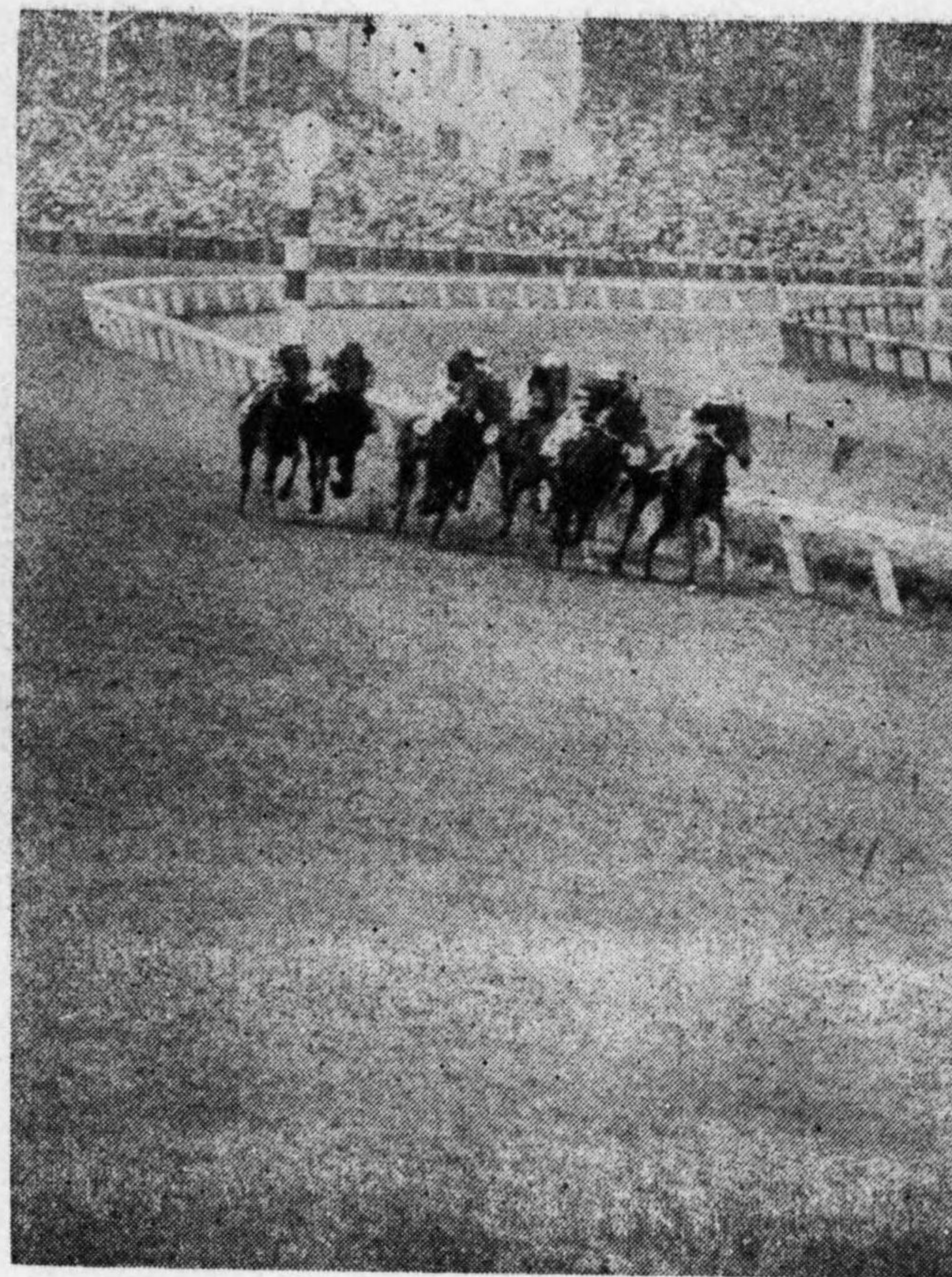
GO! (スタートの刹那)



障碍飛越



名馬の體型 (クモハタ號)



インコース、アウトコース

競馬新讀本・目次

二、勝馬を選ぶ秘訣……………九

一、競馬はスポーツ……………九

二、競馬は儲かるか……………一三

三、調教師と騎手は儲かるか……………一五

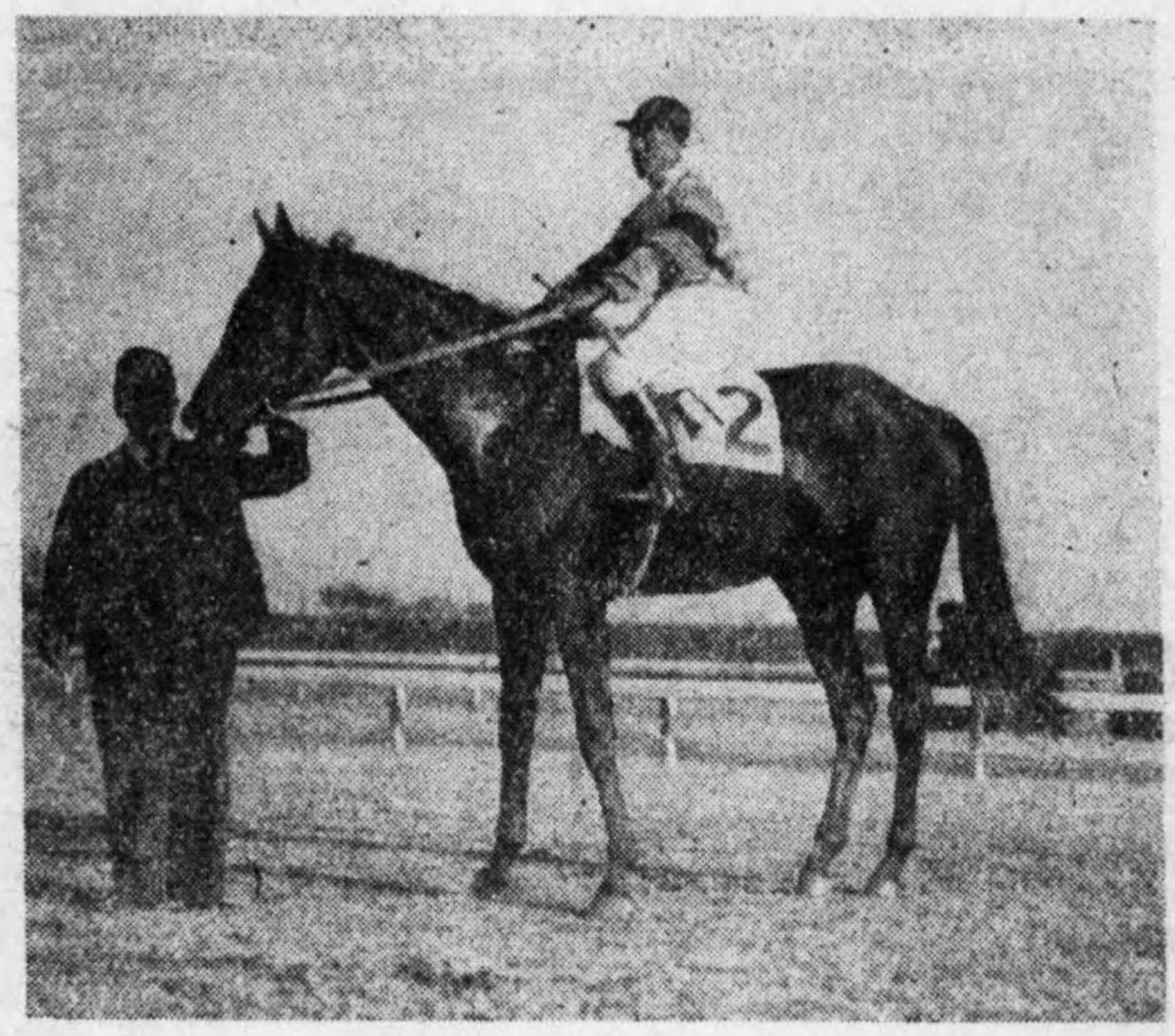
四、ファンは儲かるか……………一八

五、競馬の用語解説……………二二

六、血統の研究……………二四

七、父系と母系……………二七

八、父系の研究……………三〇



三冠馬 セントライト號
 (騎手は小西、馬主は加藤雄策氏)

九、無事は名馬……………	三
十、調教の苦心……………	三
十一、呼馬の標準タイム……………	三七
十二、一〇三秒の検討……………	四〇
十三、調教を見る秘訣……………	四三
十四、粹順の有利不利……………	五〇
十五、レース距離の適否……………	五三
十六、雨に強い馬、弱い馬……………	五五
十七、負擔重量の問題……………	六〇
十八、牝馬牡馬の何れが強いか……………	六三
十九、馬券を買ふ條件……………	六六
二十、馬券必勝の三原則……………	六九
廿一、ダテヤマト事件……………	七三
廿二、大穴發見の興味……………	七四

廿三、穴は何故出来る……………	七七
廿四、人氣に左右されるな……………	八三
廿五、騎手の優劣の觀察……………	八六

二、競馬禁止後二年間…………… 九

三、名馬物語…………… 九

一、現在の種牡馬……………	九
二、どんな種馬がよいか……………	一〇〇
三、ダービーの勝馬とタイム……………	一〇二
四、誘導馬タツクモ……………	一〇五
五、クモハタと惜しむべき加藤氏の死……………	一〇八
六、幸運のトキノチカラ……………	一一

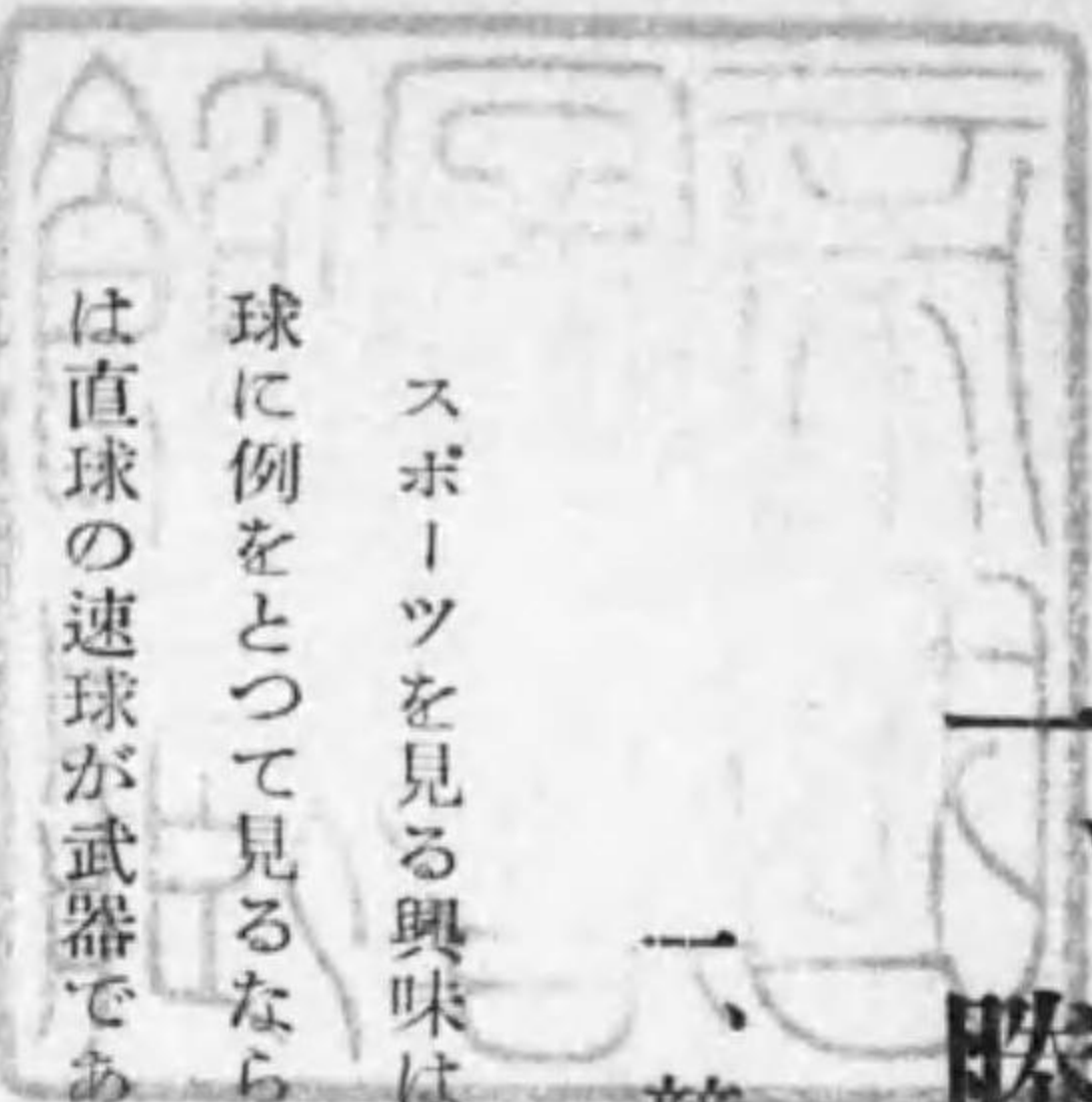
七、	ファインモア號……………	一四
八、	血統馬ダツシング……………	一五
九、	母系と優秀な産駒……………	一七
十、	何れ劣らぬアラブの五頭……………	二〇
十一、	無名のカイソウ……………	二三
十二、	三冠馬セントライト號……………	三五
十三、	長距離に強いクレタケ……………	三九
十四、	名馬ハクコウ、アカインダケ……………	三三
十五、	連戦連勝の大記録……………	三四
十六、	惜敗をつづけたタエ……………	三七
十七、	最高馬イサオハル……………	四〇
十八、	名馬の賞金獲得高……………	四一
十九、	トクマサ快勝の因……………	四六
二十、	快速馬ハクリユウ……………	四九

廿一、	獲得賞金最高のヒサトモ……………	一五
廿二、	善戦したマルタケ……………	一五三
廿三、	草競馬に出たカンロ……………	一五六
廿四、	女王クレオパトラトマス……………	一五八

競馬新讀本

一、勝馬を選ぶ秘訣

一、競馬はスポーツ



スポーツを見る興味は、そのスポーツのすべての點に通ずることが最も大きな條件である。野球に例をとつて見るならば、その投手がドロップを得意とするとか、カーブを得意とするとか、或は直球の速球が武器であるとか、更にプレートの左端に寄つて左足を構へた時にはインカーブを出すとか、中央に足をかけた時にはアウトコーナーを衝いてくるとか、そんな外見的なことで判断されるやうな癖は（事實かういふ動作に現はれる投手がゐるが）出さないであらうが、例へて云へばそんなところにもその投手に對する觀察があつての上で見れば興味は實に深いものとなる。或は打順とか、その打者の得意な球とかを知つてゐれば、今度は打つとか、待球するとか、第一球をいきなりバンドに出るとか、知つてゐれば知つてゐるほど興味がある。あまり野球のこととを、或はその競技のよさを知らない者に限つて實に無暴な非難や罵言をもつたりする。一體に

さういふファンが多い。ファンといふのはその對照に親愛でなければならぬのに、反つてその反對な場合が多い。何んのためにそれを愛好するのかわからないファンが多い。例へば野球で投手が一壘の走者に牽制球を何回も投げると、「くどいぞ」とか、甚だしいのになると「きたないぞ」などと怒鳴る。

競馬もそのやうに單に幾頭かの馬が走る、自分が馬券を買つた馬ならどんなのでもたゞ勝てばいい、のでは何の興味もない。出走する馬の個々の血統、調教狀況、健康状態、能力、騎手の優劣、馬場の状態、距離、天候、組合せの適否など、あらゆる條件を出来るだけ詳細に調べての上で、そのうちから最も傑れた馬を選び出し、その馬券を買ふと興味は實に大きいものとなる。馬券は決して偶然に當る籤引きではなく、賽の目でもなく、最も科學的な研究を基礎とする合理的なものである。

これまでもさうであつたが、今後行はれる競馬も、競走そのものはスポーツである。競馬の場合は他の競技と違つて、公然と賣り出される勝馬投票券すなはち馬券があるので、その興味がともすれば馬券の方に集中されがちであるが、競走そのものを見るだけで壯快な愉しさがあつた。これから競馬を見て楽しむ人、或は競馬が好きであつた人々のために、競馬を見るにはどれだ

けのを知つてゐれば興味があるか、馬券を買ふにはどれだけの智識をもち研究することが必要であるか、思ひつくままに書いてみよう。

スポーツとしての競馬を見る楽しみ、そしてその出走馬のうちから一頭の優秀馬を選んで馬券を買ふ楽しみ、その二重の興味と愉樂は、一枚十圓の寶籤で、どの番號が轉がり出すかわからないが、運がよければ何萬人のうちの幸運者の一人になつて十萬圓とれるといふ、そんな頼りないものではない。

競馬は研究すればするほど面白く、その上で一枚の馬券を買つてその馬が勝てば、これほど愉快なことはない。ただこの馬が勝てさうだと聞いて、それではと馬券を買つて、その馬が勝つて配當を貰つたところで、それは馬券が當つて儲かつたといふ喜び以外にはなく、それでは寶くじと大同小異である。それが種々の研究をしての上でやつてみると、興味は二重になり、たとへその馬が勝たなかつたとしてもさして不愉快にはならない。レースをよくみもせず、どうして負けたのかといふこともわからず、自分が馬券を買つた馬が負けると、すぐあのレースはいんちきだなどといふファンをみるが、それは眞のファンではない。

馬主も調教師も騎手もこのレースにはぜひ勝たなければと思つてだす場合、或は一度はコンデ

イシヨンを整へるために出す場合などがあるから、さういふことも知る必要があり、レースがどのやうに進行して苦戦して負けたか、果して實力がないのか、騎手が拙劣で負けたのか、その位のことを見なければ競馬は楽しめないし、馬券もとれない。馬主も自分の馬が勝てば何千圓何萬圓かの賞金を貰へるのである。一分何秒かで、鼻の微差でも二萬圓の賞金を得ることがある。調教師は進上金を一割五分貰ふ。騎手も馬丁もその進上金を配分される。ただ負けられるわけではなく、勝たなければ生活にも差支へるのであるから、全力を盡して調教し競走するのである。

二、競馬は儲かるか

いつたい競馬は儲かるものか、馬主、生産者、調教師、騎手、フアンのうち誰が儲かるか、これは先づ知つておなければならぬ問題である。

筆者の知る限りでは、一言で云へばその誰も儲からないものであると云つていいと思ふ。

先づ馬主の場合を云ふと、一頭の馬を購入して調教師（所謂厩舎）に預託する。これは多くは三歳の秋牧場の驪で買ふのであるが、三萬圓或ひは四萬圓、高いのになると五、六萬圓で買つた

馬を調教師に預けて調教して貰ふ。牧場から引取つて、輸送の途中で風邪をひいても、ものに驚いて傷をしてもそれは馬主の損である。まづ無事に厩舎に入れたとして、三歳の秋（十月頃）から翌年の春の競馬に出すまで約半年間飼養料を拂ふ。飼養料はこれまで一ヶ月約百五十圓前後（百圓の時もあつたが、十八年頃は約二百圓、二十一年からは約千圓位になるといふことである）その馬が競馬に出ても出なくても預託した以上は拂はなければならぬ。競馬に勝つて、或ひは二、三着となつて賞金を得れば、調教師に賞金の一割五分を分配する。即ち進上金を拂つて、勝つたお祝（特別レースの場合など）をしたりすると多くの場合馬主には大した金が残らない。ここに三萬圓で買つた馬が三歳の秋から五歳の秋まで順調に競馬に出たとして、約二年餘りで飼養料が約五千圓ばかり（二十一年からは一年に約一萬二千圓ばかり）それに治療費だとか、蹄鐵料、勝負鐵（競走用の蹄鐵）だとかの雜費が出る。さうして無事に競走に出て五萬圓の賞金を得たとする。（五萬圓の賞金を得るには少くともいいレースに七、八勝しなければならぬし、相當の馬でなければならぬ）さうして一割五分の進上金を調教師に配分すると七千五百圓を引くわけで飼養料と合して一萬二千五百圓、それに馬代金を入れると四萬二千五百圓になり、これが種馬にでもなつて買上げられればよいが、そうでなければ僅かに七千五百圓の利益であるに過

ぎない。これは然し故障にもならず、健全で毎シーズン競走して少くとも一シーズンに二勝しての計算で、多くの場合馬主は一頭ばかりでなく、抽籤馬も持つし、他に一頭や二頭呼馬をもつと飼養料もかなりかかるし、抽籤馬（千五百圓から二千圓であつたが、昭和二十一年は四千五百圓であつた）も競走に出られないやうなのが當る場合もあり、一頭が二年間に一萬圓足らずの利益を得たとしても他の馬の飼養料や雑費にかかつて結局その利益も相殺されてしまふ場合が多い。イサオーバルのやうに七萬五千圓の馬が一年半三シーズン競走に出て僅かに九千三百五十圓の賞金を得たに過ぎないが、これなどは飼養料と進上金と、それに三シーズンで一萬圓に足りない賞金しか得られないやうでは必ず治療費その他の雑費がかかるから、賞金などは無くなり七萬五千圓の馬代金は丸々損になつたと思ふ。競走馬の獲得賞金高を見ればわかるがあれは何千頭か、何萬頭のうちの名馬と云はれる二十頭餘りの特例に過ぎない。馬主は先づ馬産事業に投資する位の氣持と、競馬の楽しみ料を拂ふ位の氣持がなければ、利益づくでは競走馬は持てないと云ふのが實情である。競走馬をもつて賞金や馬券で儲けやうと思ふ馬主などは一人もゐないが、馬主は儲かるだらうと思つたら大きな見當違ひである。自分の馬が勝てるだらうと思つて馬主が馬券を買つても相手の馬が強くて惜敗慘敗することもある。（こんな事の方が多い）自分の馬はとても勝て

ないと思つて、相手の馬の馬券を買つてゐて、自分の馬が勝つたが、馬券はかへつてとられたといふ例もある。馬主といふものはさういふものであり、馬主は先づ競馬で損をする筆頭ではないかと思ふ。然し又極めて計画的に馬を買つて、相當の金利を見てゐる者も萬更ないでもないのである。

三、調教師と騎手は儲かるか

それでは飼養料は馬主から貰ひ、進上金を一割五分貰ふ調教師は儲かるか、これも計算の上では一番よささうであるが、そうばかりうまくゆかない。

先づ飼養料は燕麥、人參、牧草（乾草）寢藁、その他フスマとか鹽とかの飼糧と馬丁の給料を出して残りが毎日の調教料である。もと／＼二百圓位であつたから（昭和十八年頃）馬丁の給料を拂へば、一頭に對する調教料は多くて四、五十圓でこれが生活費となるのである。進上金の一割五分は、五分を馬丁に、五分を騎手に分けるから調教師に入るのは五分であるが、これも勝つての上の話で、馬が勝たなければ入らないから、何んでも収入になるといふのではない。

十頭預かつても十頭が十頭勝ちつゞけたり、或は一シーズンに勝てればいいが、故障だつたり相手に強いのがゐる仲々勝てない方が多い。まして大レースの五千圓、一萬圓の賞金に勝てば良いが、普通のレースでは三千圓位であるから、五分にしても百五十圓にしかならない。この五分の進上金が一年の生活費に加はるのである。競馬のよい時には勿論進上金がよいから、その間は飼養料の残りの生活費に入るべきものでやつてゆくわけである。進上金が幾らでも入ればよいが、入らなければそれまでであり、強い優れた馬ばかり預かればよいが、負けてばかりゐるやうな馬がゐるは進上金の望みはない。

騎手も同様に、先生のところへ所屬してゐれば月々幾らかの給料を貰ふことが出来るが、別に所屬してゐないで單に騎手として生活してゐるのでは、勝つてからでなければ金が入る當てはない。即ち進上金の配分に預からなければ生活費の入りどころがないわけである。一シーズンに何十頭か乗つて幾らか勝てばよし、勝つ馬に乗れなければ、或は馬が強くて勝たなければ金にならない。そこで負けてばかりゐる馬の馬主は負け馬手當といふものを出すのである。馬が負けてばかりゐる進上金も貰へないでは氣の毒だといふので馬は負けたが幾何かの手當を出すのである。

馬丁も騎手もこの負け馬手當を貰ふやうでは樂ではないし、馬主にして見ても、馬は賞金を稼

がないし、飼養料は月々出さなければならぬ、その上負け馬手當を出すのでは樂ではない。騎手も獨身ならば（獨身の時は先生持ちである）まだよいが、一家をもつてゐれば妻子を養はなければならぬのであるから、一生懸命に馬を調教して勝てるやうにしなければ生活費に追はれることになる。そして多くの騎手は又外見は華美で樂に金が入る、しかも多額の金が入るやうに思はれてゐるが、中に入つてみると決してさうではない。

それは多くの騎手の中には一シーズンに十回も十五回も勝つて五分にしても進上金を貰へば相當の収入があるやうなものゐるが、これは數へる程しかゐない、さう毎シーズン勝ちつゞけられないし、不振の時もあるから、或るシーズンには三千圓も五千圓も進上金を貰ふ時もあり、まるで無い時もある。

こういふ實例はすぐあげられるが、さしあたりがあるからそれは控へるが、實際例をあげなくても一人の騎手の成績を調べればすぐわかることである。それで春は朝六時頃から、夏は四時頃から朝の食事前に調教をし、風の日も雨の日も休むことがないのであるから、傍で見る程樂ではない。

四、ファンは儲かるか？

競馬ファンが儲かるか、損をするか、それはファン自身が知つてゐる。或る者は儲かると云ひ或る者は損をする云ふ。

第一に二十圓の馬券は一割五分の控除金（政府納金と賣得歩合金）を天引されるのであるから配當をうけるときには既に十七圓を土臺として計算される。が、配當は二十圓或はそれ以上であるから、二十五圓なり三十圓なり配當されると一見損をしてゐないやうに思はれる。然し若し控除金がなければ、それが二十八圓なり三十三圓になるべきである。これは拂戻を受ける場合の損であるが、更に馬券を買つてそれが全部適中するといふことは稀であり、十回買つて五回適中し、五回は外れたとすれば、その損の方は百圓であり、五回適中した方の配當が全部倍でなければ、損の方の埋合せにならない。單にしても複にしても倍の配當のつく馬を選んで買ふのは相當調子のよい時でなければならず、五回もとるとすれば、精々配當は十圓か十五圓位つく馬であるから百圓の損は埋め合せがつかない事になる。これは一例であるから、五回とれて五回外れるとは限

らず、五回とつて二回位しか外れないとすれば利益になり、まるで外れなければ儲けになるわけである。稀には非常に手堅くやつて複勝で比較的確實性の多いのばかり買つて、例へ三圓でも五圓でも配當をうけて、損をしない様な人も見受けるが、損をする人がなければ配當がないのであり、配當がいくらからでもある以上は損をしてゐる人があるわけであり、うまくゆけば拂戻をうける側に入り、失敗すれば損の方に廻るわけである。

例へば五頭立のレースで、單勝の賣上げが三千百六十七票（金額六萬三千三百四十圓）、複勝の賣上が四千百六十六票（金額八萬三千三百二十圓）であつたとして、一著の馬の票數が單が五百九十八枚、複が六百十八枚、二著の複が九百〇五枚とすると、合計二千百二十一枚（一人一枚として二千百二十一入、單複を買ふ人もあらうがそれは別として）拂戻しをうけるわけであり、單複合計七千三百三十三人のうち二千百二十一入當つたわけであり、五千二百十二人が損をするわけである。（寶くじより率はいいかも知れない）そしてこの拂戻しは單が九十圓、一著の複が五十三圓五十錢、二著の複が四十一圓五十錢である。これは昭和十二年春競馬東京の五歳馬特別でマルヌマが勝つたときの配當であり、二著はトクライトであつた。この時の人氣はマツミチであつた。

この例を見てもわかるやうに、いつも配當にあづかればよいが、三度に一度しかとれない場合があり、買へば必ず當るとは限らないから、まづ損をすると思なければならぬ。又或る日は五回やつて五回適中したが、次の日は五回やつて三回外れることもあり、五回外れることもありさうして何日か何十日か、何シーズンか、何年かやつてゐるうちには、或る時は損をし、或る時は利益となるが、結局通算すれば損をするのが先づ普通である。又入場料とか辨當代とか電車賃とかを入れるとそれだけ餘計損をした勘定になる。これはたゞ出した金が戻つてくることを計算しての上であるが、芝居を見ても、旅行しても、野球を見ても、それに使つた金は戻るわけがないし、娛しむための入費であるから、決して損をしたとも思はないのである。競馬もまたスポーツであるから、そのスポーツを見る高い入場料を拂つたのだと思へば損はないわけである。むしろ、いくらかの拂戻をうければそれだけ儲けたことになるのである。楽しんで配當をうける、こんなことは他にないことも知れない。

競馬で儲けやうといふことを考へるのが最初から蟲がよすぎるので、馬券を買ふのも、飯を食ふのに高い金を出すのと同じだと思へば損ではないし、研究を重ねて自重しながらやれば、拂戻をうける方にばかり廻ることも出来る。

五、競馬の用語解説

競馬を見るにも、調教を見るにも、所謂競馬用語を知つてゐる方がわかりがよい。調教の記事を読む上にも、その術語を知らなければわかりにくいことが度々ある。これから先この文をつけてゆく上にも、一應調教師や騎手が使つてゐる言葉を知つての上で見て貰ふ方がよいのでここで用語の解説をしておこう。

一哩——千六百米。

一分(いちぶ)——千八百米のこと。

二分(にぶ)——二千米のこと。

三分三厘——ゴール手前六百米の點。

上り——ゴール迄の最後の六百米のこと。

時計一つ——一秒のこと、單に一つとも云ふ。「一つ違ふ」とか「一つつまつた」とか云ふ。

ハロン——二百米のこと。

五ハ——千米のこと。

七分五厘——千二百米の地點、右廻り一哩馬場なら第二コーナーの邊、府中の馬場なら向ふの直線。

喰ひが細る——飼糧を攝るのが少くなること。

胴をとる——幾人かで話してゐるとき、一人が中心になつて饒舌ること。

カン／＼場——騎手の體重を計るところ、檢量室、レースの時の鞭と鞍などをもつて檢量する汗とり——風呂に長時間入つて體重を減らすこと、五十五キロの負擔重量の馬に乗る騎手が五十七キロあれば一キロ或は二キロの體重を減らさなければ騎乗できない。

追(ぼ)ろ——力いっぱいに力走させること。「追(ぼ)ひたくる」などと云ふ。

特ハン——特別ハンデークヤツプレースの略で、力量を平均させるために負重量を重くしたり軽くしたりする。

十二十二——十三十三とか十二十二とか云ふが、二百米を平均速度十二秒で走るとか十三秒で走るとかいふ意味で、サラブレッド種の馬では十二十二で走れば早い方である。

呼馬——サラブレッド種の馬を買主が自由に買ったものを云ふ。

抽せん馬——競馬會が購入した馬を馬主が抽せんで購入したもの、現在ではアラブ種の馬に限られてゐる。

新呼——未出走の新らしい呼馬。

新抽——未出走の新らしい抽せん馬。

おいでおいで——後から走つてくる馬がきてもぬかせず、力走してきても平氣で走ること。段違ひに強味のあること。

はな切り馬——スタートを切るや先頭に立つてゆく馬。ハナを切つてそのまま逃げ切る馬もあり、最後の追ひこみで後の馬にぬかれるとき力盡きてどんじりになる馬もある。

バテる——最後の力走の力がなくなること。

追込み——最後の力走。「追ひこみにかかる」とか「追込んで勝つ」とか云ふ。

番號ゼツケン——競走の時、調教の時、馬の胴に番號の書いた布をつけるその番號布を云ふ。

このほかまだまだいろいろあるが、この位の言葉が普通に使はれてゐるので、これだけ知つておけば一寸したことはわかると思ふ。

⑥ 六、血統の研究

競走馬の優劣を定める唯一の條件は血統である。勿論競走時における健康状態、調教状態その他種々の條件が、その競走において勝ち得るか否かを判断する確定的な結論を興へるのであるがその條件の上に立つて、さてその優劣の最後の判断を下すのは血統の良し悪しである。またこの血統の良し悪しが、先づ前提であるとも云へる。

現在の競走馬の父系における優秀なのは、ダイオライト、月友、セフト、カブトヤマ、ハクリユウ、トウルヌソル、シアンモア、ステーツマン、プリメロ、アスフォード、レイモンド、ハクコウ、その他最近種牡馬となつたセントライト、クモハタ、ダツシング、バプステツド等である。このうちアスフォードはゐないし、トウルヌソルは病氣で種付不能となつたから、今後この血統の馬は出てこないが、現在ではまだその産駒が多少出てゐる。これらのうち特に注目されるのはダイオライト、月友、ステーツマン、シアンモア、それに新種牡馬セントライトの産駒である。しかしもしダイオライトの産駒が二、三頭出たときはどう判断するか、それは母系を調べること

である。

例へば小岩井農場には蕃殖牝馬としてオーグメント（父ガロン、母第二アストニシメント）、アストラル（父チャベルブラムpton、母第二ビユーチフルドリーマー）、ウエツディングサーフ（父ダイヤモンドウエツディング、母第四ヘレンサーフ）、フローリスト（父ガロン、母第四フローリスカツプ）、アストラガル（父ガロン、母第五アストニシメント）、第二ウエツディングサーフ（父ガロン、母ウエツディングサーフ）等がゐるが、オーグメントからはデーモア（父シアンモア）、アストラルからはカブトヤマ（父シアンモア）、ガヴァナー（父同）、ファインモア（父同）、ウエツディングサーフからはデンコウ（父シアンモア）、フローリストからはハクリユウ（父ラシデヤ）、ハクセツ（父シアンモア）、スターカツプ（父同）、アカインダケ（父同）等が出てゐる。

勿論これは小岩井産馬であるからシアンモア系が多いが、同じシアンモア系でもフローリストを母として、ハクセツ、アカインダケのごとき名馬が出てゐるし、アストラルからカブトヤマ、ガヴァナーが出てゐる。この他下總馬にしても母馬種正からはヤマサ（父はチャベルブラムpton）トクマサ、ツキマサ、キンチャン（何れも父はトウルヌソル）等が出てゐるし、種秀から

はワカクサ、アスコット（何れも父はチャペルブルムプトン）等が出てゐる。これをもつてみても、優れた母系から優秀な産駒が出るし、これに種牡馬の交配が適合すれば、その産駒は血統的に申分なく、健康でありさへすれば、先づ十中八九までは相當の成績を示すものと見ていい。

ここで注意したいのは、下總牧場（宮内省御料牧場）は今年（二十一年）の三歳馬を育成してゐるが、今後牧場を廢止するので、下總の種牡馬種牝馬は共に他の牧場に移されてゐる。クレオパトラトマス、リプルス、クモハタ等の母星旗、サンダーランド、エレギヤラトマス等の母星若、ピアスアロートマス、アヅマダケ等の母の星濱等も今後どこかの牧場の蕃殖馬となるであらうが、何れも優秀な牝馬だけにその産駒は常に閉却出來ない。この他個人牧場の種馬はその産駒の成績によつて大體の判断はくだされると思ふ。

昭和十九年の日本ダービーの一著馬カイソウは第二ベパウの仔で月友系であるが、この第二ベパウはロンプと云ひ昭和五年頃走つた馬で十九勝してゐる。このロンプは父がペリオン、母はベパウで、ベパウの父はイボア母は豊橋であり、ロンプの父のペリオンもベパウの父のイボアも共に不良馬場に強い馬であつた。そしてカイソウも又不良馬場に強く斷然と他馬を離して不良馬場で快勝したのである。ベパウからはロンプの他にオトコヤマ（父はクラツクマンナン）等といふ

馬も出てゐる、この馬も十三勝してゐる。

七、父系と母系

名種牡馬ダイオライトの父はダイオフオン、母はニードルロツクであるが、ダイオライトは英國のエプソム・ダービーの三着馬であり、二千ギニー・ステークスの勝馬である。そして父のダイフオンは英國に於ける種牡馬として優秀な馬である。このダイオライトの血をひいたセントライト（セントライトの母はフリツパンシーで、兄弟にタイホウ——タイホウの父はシアンモア——がある）の産駒が今年の四歳馬にゐる。そのうちの一頭ニュージャパン（東奥）は第二オーグメント（競走名テームア）の仔で、これなどは血統的に見て相當の成績を示すものと思はれる。

競走馬の血統はその父系と共に母系を調べ、その母系の父と母を調べる必要がある。新馬として初めて出走する馬が不良馬場（雨馬場或は重馬場）に強いかわいいかといふことなど、父馬が雨を苦にせず、母馬もまた雨馬場を苦しめない馬であるかどうかを調べれば、大體その良否がわかるのである。シアンモア系の馬は殆んど雨馬場に弱いとされてゐるがトウルヌソルの仔は雨を比

較的苦にせず、不良馬場でよく勝つてゐるといふことなど、その父系、母系を調べると非常に興味がある。これからは昭和十年頃に競走に出た牝馬と最近種牡馬となつたものの産駒が出てくるから、その母の競走成績なども一應は調べる必要がある。

前にも書いたが同じダイオライト系でも、やはり母が優れてゐなければ、その産駒は優秀ではない。例へばダイオライト系でも、カミワカ、セントライトは好成績を収めたが、テツザクラ、ダイオメデア、ハツビーメード、ハイクレーン、シーラス、ミスコウア、ルフロン等はさしてめざましい成績はなかつた。ダイオライトがものを云ふのか、それぞれかなり走りはしたが、拔群の成績をあげたのはセントライト、カミワカ位のものである。セントライトはフリツパンシー、カミワカは星若の仔である。この父の血をひき、母の血をひくといふところにつきない研究の餘地があり、興味がある。

血統を調べるには、その母系の産駒の成績、母馬の過去等を調べ、更に父の成績等を調べることである。

血統と共に必要なはその産地である。その牧場である。小岩井の馬はよく雨に弱いといふことを云はれたが、小岩井馬必ずしも雨に弱いわけではない。然し個人小牧場では二歳、三歳時

に、本格的な運動、或は調教がしてないために脚が弱かつたり、故障を起し易かつたりすることがある。これは所謂おさすりで、せりに出すためになるべく無理をしないで育てるためである。そこへゆくと相當な頭数を出す大牧場では、かなりみつしり運動をさせ調教もするので、三歳から四歳にかけて相當強い調教をしても馬がこわれないのである。雨の多い所の馬、或は雨の少ない所の馬、暖國の産地、雪の多い寒地等、それらのことも馬自體の能力に相當影響があることも否めない。

八、父系の研究

現在我國の種牡馬の父系を辿つてみるとやはり名馬から名馬が出てゐることがよくわかつて興味は一段と高い。

その最も代表的なのはハンプトン系で、ハンプトンからゲンスポローが出、そのゲンスポローを父としてソラリオ、トウルヌソル、タラツプ、レイモンドが出てゐる。

ソラリオは日本には來ないが、ソラリオを父としてゐるジンガローは、我國の種牡馬となつて

ゐる。そうしてトウルヌソルからはワカタカ、ワカマサ、岩光（ロツクライト）雪時（スパーシ
ヨン）波藤（リヨウゴク）得正（トクマサ）アヅマダケ、ハツピーマイルト、クモハタ、トキノチ
カラ、クモキク等の名馬が出てゐて、これらは何れも現在種牡馬となつてゐる。

又スベキユラム系のサンスターからダークファイアとバツカンが出てゐるが、バツカンからシ
アンモアが出、シアンモアから第二シアンモア（ヨネカツ）チャレンジヤー、ハクセツ、第六シ
アンモア（セイウン前名オオツカヤマ）大鵬（タイホウ）カプトヤマ、第十四シアンモア（デン
コウ）ブラオンジャツク。（フレモア）アカインダケ、ファインモア、ガ
ンモア（ゼネラル）ダツシング、ロツキーモア等の名馬が出てゐる。ロツキーモアは早死し
たがその他の馬は何れも現在種牡馬となつてゐる。

ペンドア系にはセントユートピア、ペパーミント、ゼヤンク、サイクリスト、伯優（ジヨン
ブル）第一プレーゼン、ボネイビー等がをり何れも種牡馬として輸入されてゐる。このペンドア
系からダイフォンが出、ダイフォンからダイオライト、ダイオライトを父としてセントライトが
出てゐる。ダイフォンは英國の有名な種牡馬であり、ダイオライトの母のニードロツクも又名種
牡馬である。

スターリング系からはガロンが出てゐるが、そのガロンは我國に輸入され、このガロンを父と
して賀賛、ナスノ、ヒラデエナモールド（アラタマ）、アスパイヤリング等種牡馬となつてゐる
名馬が出た。又スターリング系のブランドフォードからはアスフォード、ステーツマン、プリメ
ロなどの名馬が出てゐる。

これらの種牡馬を更に母系から調べてみると、名牝馬アサシイからアスフォード、プリメロが
出てゐるし、アストニシメントを母として第二アストニシメント、第三アストニシメントが生
れ、第二アストニシメントからタマコイワキ、種光が生れ、種光から岩光、賢藤から波藤、ハツ
ピーマイルトが出てゐる。第三アストニシメントからはクラツクアスト、チャレンジヤーが出てゐ
るが、大體我國の蕃殖牝馬でアストニシメント系はかなり優秀な産駒を出してゐる。

牝馬として優秀なのはビュチフルドリーマー系とフロリースカツプ系、ヘレンサーフ系等であ
るが、ビュチフルドリーマーからは種義、第五ビュチフルドリーマーが出、種義からアスト
ラル、アストラルからカプトヤマ、ファインモア、ロツキーモアが生れてゐる。また第五ビュ
チフルドリーマーからは第二シアンモアが出てゐる。フロリースカツプは第四フロリースカツ
プ、第六フロリースカツプの母であるが、第四からはフロリスト、アスパイヤリングが生れ、フ

ロリストからはハクリユウ、ハクセツ、アカインダケが生れてゐる。第六からは賀榮、賀榮からブームが生れてゐる。

今後このフロリースカツプ系のフロリスト、ビューチフルドリーマー系のアストラル、ヘルンサーフ系、フリツパンシー系、ミラ系等の産駒は注目されるし、この外、星濱、星旗、星友、星谷、月城、朝櫻等の産駒は大いに期待がかけられるし、忘れてはならない血統である。

九、無事は名馬

小説家の菊池寛氏は「無事は名馬」といふ名言をもつたが、これは馬主でなければ實感がもてないし、馬主であるほどの者は實に名言であると感じ入る言葉である。馬主は自分の所有馬が、ただ無事であることを念じる。それは親が我子を無事で育つことを祈るのと同じ心理である。病身の子をもつた親は、元氣な逞しい子供を見ると羨ましく思ひ、どんな苦勞をしても我子を健康にし、無事に育ててやりたいと念願する。そのやうに又馬主は我愛馬の無事を祈るのである。

それほど馬には故障が起り易い。裂蹄だとか、突き上げだとか、肩が悪いとか、腰が悪いとか、

球節が悪いとか、殆んど治療室通ひをしない馬はない位である。菊池氏なども愛馬の不健康に苦勞してゐるのである。その苦勞のはてが「無事は名馬」といふ名言をもたせたのである。

トキノハナといふ菊池氏の愛馬は無事であつた。どこといつて難點のない健康な馬だつた。そして勝ちつづけた。氏より育ちといふが血統よりも健康に育つことが唯一の條件であるともいへる。血統が優れてゐても、病氣や故障では全能力を發揮して競走に勝つことが出来ない。如何に名門の生れであつても無事でなければいけない。少し位血統的に見て香しくなくても無事で調教がみつしりやれば自ら競走には走るものである。血統的に傑出してゐる馬も故障ではどうにもならないし、故障の、不健康な名馬も、健全な無名の馬に敗れることはありがちなことである。名門の出であり、健康體であつて、つねに調教が順調であれば、これは申分がない。そうして連戦連勝する馬は、この二つの条件を具備してゐる。従つて調教といふことが競走時においてその馬の力を十分出し得るかどうかを決定することになる。

調教が順調にやれない馬は、實力があつても、それを十分に出すことができない。如何なる名選手と云へども練習不足では競技に勝つことができないと同様に、競走馬も調教が肝心である。それでは調教はどのやうにして行はれるか、どのやうな調教をするのか、調教タイムによる判断

はどうすればよいのか、調教タイムと実際のレースタイムとどれほどの差があるか、調教について少し詳しく調べてみよう。

調教は殆んど朝のかいばをつける前に行はれるので、馬の状態によつて午後乗りをする時もあるが、大體は朝早くやるのが普通である。朝の調教は、春二三月頃は八時頃から九時頃までにやるが、四月となれば（春競馬はこれまで三月から四月頃始めたが）五時頃から始める。夏は四時半頃、秋は六時頃、冬は九時頃で、寒い時には午後乗りをやる。調教の進まない時は、速歩で一週し、それにつづいて速歩と緩駢（キャンター）とを一周づつやり、その調教が進むと、ダクで一週し、二週目からキャンターに移り、キャンターを半哩やつて、あとの半哩を駢歩（ギャロット）する。あるひは初めは軽く速歩で歩き、それからキャンターに移り、馬場（調教馬場）一周を一杯に駢歩するといふ順序で調教するのである。

十、調教の苦心

しかし調教を見るときに、先づ第一に目をつけなければならないのは、ダク（速歩）の脚の運

びが活潑であるか、馬場に出るまでの並足が力強く運ばれてゆくかどうかといふことである。脚部、或は腰に難點がある馬はトモ（後肢）の送り（運び）が悪いし、肩に難點があれば跛行してゆく。或は球節が悪いとか裂蹄であれば、必ず脚捌きが鮮やかでない。こういふ馬は軽くダクで廻つて引上げる。いつ見ても少しも速いところを走らず、軽いダクで引上げるやうな馬は、どこか不健全なところがあり、思ひ切つた調教をすることの出来ない缺點があると判断して大過はない。

しかし相當調教の仕上つた馬が、軽く乗つて引上げるときがあるが、これとてもダクだけといふことはなく、ダクをやつて少しキャンターをやるとか、或はダクだけで二日か三日乗つても、四日目とか或は五日目には必ずキャンターをやり、終りの二百米（一ハロン）或は半哩（八百米）を駢歩でやるとか順調な調教をやるものである。

調教が進めば進むに従つて、三日目或は四日目位に調教馬場を一周、駢歩で飛ばして大體どの程度のスピードが出てきたか、或はどの程度のスピードを出し得るまでに體が出来てきたかを試すものである。

従來は東京、中山、横濱、京都、阪神と、調教馬場の大きさ、坂の有無、砂地等いろいろの條

件によつて調教タイムの比較研究が難かしかつた。例へば、阪神の調教で、一周一二六秒で走つたといふニュースが、その調教タイムを出した翌日位に、早くも關東の調教師に知れ渡ると、その時には馬場のどの邊を走つたのが問題になる。ツバクロダケ、ゼネラル等が相當早い調教タイムを出したときには、筆者は阪神まで調教を見にゆき、騎手に馬場のどの邊を走つたか、どこから追ひ出したか（駈けだしたか）といふことをきいたものである。

調教馬場が一哩（千六百米）あるとして、そのインコース（内枠）と中央とアウトコースとは距離が非常に違ふ。内コースで千六百米なら中央を走れば千六百五十米位になり、外を一一杯に廻れば千七百米位になる。また一哩きつかりを走つたのと、初めダクで行つて次にキャンターに移り、半哩邊から追ひ出して（相當速い駈歩で走つてきて）一周一哩を走つたのとでは、強く走つた距離が違ふから同じ一周のタイムが一〇五秒かかつたとしても、一周だけ走つたのと半哩邊から走り出して一周を一一杯に追ひつけたのでは力が相當違ふわけである。また單走でなく二頭乃至は三頭併走したとき、内側の馬と、中の馬と、外側の馬とは同じタイムでも力において差があるわけである。

しかし、これも一概にはいへない。外側の馬はやつと走つてきて一杯の場合もあり、内側の馬

はあまり力を出さなかつたといふ場合もあり、その反對もある。また一周かつきり追つてもほんとの軽目であるときもあり、一杯の脚のときもあり、半哩から追つても約二千米はみつちり走つてゐると、一哩だけ追つて、一周した後の脚いろに餘力がない場合とか、いろいろその走り方の餘力のありなしをみなければならぬ。大體本馬場（競走馬場）の勝タイムを比較することも一方法である。

⑪ 呼馬の標準タイム

勝タイムといつてもレコードタイムもあり、呼馬（サラブレッド種）の普通の勝タイムもあり競馬場の條件（坂のあるなし、カーブの急であるのとそうでないのと、隋圓形の馬場と圓形の馬場、砂地と芝生等）によつて同じ一哩でも時計は違つてくる。然しここには大體普通の勝タイムをあげてみる。勿論、四歳馬と圓熟した五歳馬とはタイムも違つてくるのが當然である。馬場は良の場合。

一六〇〇米	一分四三秒
一八〇〇米	一分五六秒
二〇〇〇米	二分八秒
二二〇〇米	二分二一秒
二四〇〇米	二分三三秒

古呼

一八〇〇米	一分五五秒
二〇〇〇米	二分七秒
二二〇〇米	二分二〇秒
二四〇〇米	二分三三秒
二六〇〇米	二分四五秒
三二〇〇米	三分二六秒

アラブ(新抽)

一六〇〇米	一分四六秒
-------	-------

一八〇〇米	二分
二〇〇〇米	二分一五秒
二二〇〇米	二分二八秒

アラブ(古抽)

一八〇〇米	一分五九秒
二〇〇〇米	二分一二秒
二二〇〇米	二分二五秒
二四〇〇米	二分三八秒

種

以上は一流馬の勝タイムを参考としたものであり、こゝにあげたタイムより一秒或は五分の二位早いものもあり、これより二ツ三ツ(二秒或は三秒)時計がかゝつても(即ち遅くても)勝つてゐる馬がある。レースの時先頭の馬が逃げ足の非常に早い馬であれば、そのレースの勝タイムは比較的早く、先に立つた馬が實力のある馬で、後續馬のスピード如何によつてはいつでもその馬をぬかせないだけの餘力をもつて走り、力をセーブして走つてゐる時はタイムは案外かゝるものである。然しこゝにあげたタイムを出し得る馬であれば、いつでも勝ち得る力をもつてゐると

云へる。であるから調教タイムに新呼馬（四歳馬）が一哩の調教馬場を一〇三つで走つたと云へばまづ大體一勝確實の馬と云へるのである。然しこの一周一〇三つ（即ち一〇三秒）で走つたといふのにもいろいろの考察の仕方がある。

十二、一〇三秒の検討

調教馬場を一〇三秒で走つた馬のラップタイムがどうであつたかといふことが先づ考察の第一要點である。一〇三秒といふのは調教馬場一周を假りに一哩としたタイムであるが、調教馬場は實際の距離は千六百米はなく、千五百五十米位であり、府中の東京競馬場などの調教馬場は二千百米位あり、その一周の調教タイムは一三〇秒臺が一勝し得る馬の出せるタイムである。今年（昭和二十一年）からこの調教馬場は實距離が短くなつてゐる。

先づ一〇三秒といふタイムを出した馬が二頭ゐるとする。このうちのAの馬は、半哩標から決勝点までの八百米を五六秒で走り、上り三ハロン（六百米標から決勝点までの距離で、普通上りといつてゐる。或は終ひといつてゐる。上りの時計いくつで走つたといふのは、決勝点までの六

百米を何秒で走つてきたかといふことである）を四三秒で走つてきたとすると、この馬は半哩標から三分三厘（六百米標）までの二百米を十五秒で走り、三分三厘から決勝点までの六百米を一ハロン（二百米）約十四秒づつで走つてきたことになる。これを更に分解して、三分三厘からの二百米を一五秒で走り、あとの四百米を十四秒宛に走つてきたかどうか、実際にはその一ハロンの速度を計つてみる必要がある。

一〇三秒といふタイムの出し方もコースなどの説明と共に半哩幾秒上り何秒といふまでの説明をされた上でなければ、調教にいいタイムを出した馬だからと信頼するわけにはゆかない。これは調教タイムによる判断の仕方であると共に調教の見方の條件である。

更にBの馬は一〇三秒を、半哩五三秒、上り三ハロンを四〇秒に走つてきたとすると、半哩から三分三厘までの二百米を十三秒、三分三厘からの二百米を十四秒、あとの四百米を十三秒づつで走つてきたとすれば、Aの馬よりBの方が平均した速度を出してゐることがわかる。然しこの場合でもAは樂に走つての上り四三秒であつたか、Bは一杯に走つての四〇秒であつたか、その反対であるかといふこともよく見なければならぬ。それであるからよく新聞や雑誌で調教タイムを發表し、一周（實距離を示す）一〇三秒で走つたといふことを書く場合があるが、これは判

断を下すのに難しい。

千八百米の競走距離を一分五六秒で走り得れば勝るとすれば、この一一六秒といふタイムから、最初の二百米を十三秒で走つたとしてこれを引くと、千六百米を一〇三秒で走つたことになり、調教で一〇三秒のタイムを出し得れば千八百米のレースを一分五六秒で走り得ることになるといふ計算が成り立つ。然し實際のレースでは他の馬との関係から假にレースの勝タイムは一分五六秒でも、半哩五〇秒上り三七秒位で走らなければ勝てない。

この半哩五〇秒は半哩標から決勝点までの距離八百米を走つたタイムであるが、半哩から三分三厘までの二百米を十三秒次も十三秒、あとの四百米は(即ちゴールまでの力走)十二秒づつで走つたといふタイムになるわけである。この位のタイムを最後の半哩で出し得なければならぬ。

とすると調教の時の上り四〇秒のタイムから時計三つ(即ち三秒)位縮まらなければならぬ。であるから調教のタイムは餘力を十分もつてゐるタイムでなければならぬし、調教を見るにはこの餘力をもつてゐるか否かを見定めなければならぬ。調教の時、調教師或は騎乗してゐる騎手が一杯に追つたか、手綱を持つてゐる手が遊んでゐたか、その點までを見る必要がある。

十三、調教を見る秘訣

調教に出すタイムが優秀でなければならぬことは勿論であるが、また調教タイムにあまり頼りすぎることも出来ない。それは先に述べたやうに、同じ一〇三秒といふタイムにもいろいろの内容が含まれてゐるからである。要するに調教をよく見て、調教に出したタイムをよく吟味することが、優劣を決定する尺度になるが又同時に馬の健康状態とコンディションがどういふ状態にあるかといふことを判断することにもなる。

然し調教をよく見るいふことは中々難しいことであるし、普通ファンで一ヶ月餘も丹念に調教などを見ることは出来ないから、詳細な親切な調教記事を見る方が、かへつて判断し易い。が調教を見ることも又競争を見ると同じやうに楽しいものであるから、ストップ・ウォッチなしで調教を見るにはどういふ點に目をつけたらいいかといふ秘訣を書いておこう。

先づ五月頃の調教は朝五時頃から始まるから、調教場が開く前から行つて待つてゐなければならぬ。馬が馬場に入つてからの歩き工合、ダク、キャンターの脚いろを見ることが第一、それ

から馬に元氣があるかどうか、元氣がよく、調教が進んできて、いつでも競走が出来るやうな體になつてゐる馬は、馬場に入ると、實に颯爽としていかにも走りさうに見える。騎手が手綱を押へてゐても、馬自身が脚いろ（脚の運び工合）も鮮やかに歩いてゆくし、キャンターに移ると宙を飛ぶやうにさつさつと脚を捌いてゆく。それから駈歩に移ると、手綱を押へたままで、ひとりでに速度が出てゆくやうに、軽々と走つてゆく。走つてゐる馬であるから馬の脚の運びは相當活潑に、如何にも力走してゐる強い感じがするから、その脚の運びと、速度にひきこまれがちなが、そのとき騎手の手と顔をよく見ることである。

騎手の手が遊んでゐるやうに見えて、速度があるときには、その馬は六七分の力しか出してゐない。又騎手の手が手綱をぐつと引きつけて引張りきつて押へて速度が出てゐるときも、十分の力を出してはゐない。それから騎手が手綱を伸ばして、前後に動かしてゐるときには、その馬は殆んど十の力を出して走つてゐるときである。これを一杯に追はれてゐるといつてゐる。一杯に追ふ場合もあり、七八分のところで餘力をもたしてゐるときもある。それをよく見分けることである。

よく馬によつてぐんと頸を伸して下げてキャンターしてゐるのがあつたが、そつといふ時には手綱

が伸びて遊んでゐる。それで相當のスピードをもつてゐるのがある。こつといふ馬は實際のレースにかなり走る力をもつてゐる。それから相當力走してきて、その勢ひで、ゴールからなほ四百米位同じ位のスピードで走つてゆく馬がゐるが、これも餘力をもつてゐることを示してゐる。スゲヌマやタエヤマが絶好調にあつたときは、いつもゴールから半哩位先きまで走つていつたし、キャンターも頸を下げて伸しながらぐんぐん走つてゆくやうな感じであつた。

馬が走りたくて力を出さうとするのを騎手が手綱を締めて押へてゐる時など、タエヤマは實に走つた。その他の馬でも好調のときは脚いろも鮮やかで、走つてゐても苦しいところが見えず、樂に走つてそれでスピードがある。好調子の馬は案外よくわかるが、不調の馬は一寸わかりにくい、調教を見るには好調な速い馬を見ると同時に、不調の馬を見るといふことも重要である。不調の馬が競走に出てきても、それはすぐ除外することが出来るからである。

調教師や騎手によつて調教を人にみせたがらないのがあるし、調教タイムを教へてくれないのがある。また調教に祕術を盡してゐるのがある。

名前を書くのはひかへるが、大レースをめざして相當好調に達してゐる或る馬を調教してゐた騎手で、いつもまだ調教馬場に馬が一头も入つてゐないのに、こつそり入つて暗いうちに調教し

てしまふのがゐた。その馬はまだあたりが暗いのに、向ふの直線あたりから走り始めて、一周して向ふ直線でやめてしまふのであつた。

薄暗い朝もやのたれこめてゐる中を黒いものが相當のスピードで飛んでくる。ゼツケンの番號もわからない。どこから飛び出したのか時計もとれない。一ハロンを凡そ見當で計つてみると十二秒位を出してゐる。馬が戻つてくるのを見て番號を調べてやつとその馬が何馬であつたかを知つたのであるが、その馬は毎朝暗いうちに馬場に入り、四日目位に相當はやいところをやつてゐた。そうしてその馬は遂に特ハンに勝つた。こういう話はよくある。

又ある調教師は、三分三厘（六百米標の地點）から三分三厘まで追はせる。そうすると上りの三分三厘の時計が一寸とりにくいし、半哩位から早目のキャンターできて三分三厘から早くなつてきたのを見て、ゴールポストのところでは時計を入れて半哩からの時計も入れ、三分三厘の時計を入れると、そこでもうやめてしまふのである。これでは一周の時計はわからなくなるし、半哩も三分三厘もとれない。こういう調教師の馬が馬場に入つたとき、それが追ひ日（調教には追ひ日と云つて一周を速く走らせる日がある）であれば、半哩から一ハロンづつ時計を押す、さうしておけば三分三厘から三分三厘の一周の時計もわかるし、上りの半哩三ハロンの時計もわかる。

こういう調教をしてゐる時は餘程自信があるし、慎重にやつてゐてどこかのレースを狙つてゐる時であるから、その馬の狙つてゐるレース（それも初めて出るとき）を見出すのである。

また調教師によつては、普通一周してきて最後の四百米を追ひまくつてきたやうに手綱を前後に動してゐるやうに見せかけるものもある。そうしてゴールを過ぎるとすぐ馬をとめてしまふ。傍目には一生懸命に追つてきたやうに見えるし、ゴールを過ぎてからの餘力がないやうに見える。傍がこれはトリツクで、手だけ動かして、一杯に追つたやうに見せかけるのである。こんな小細工は一寸注意すればすぐ見破ることが出来る。又手と共に鞭を入れたやうに見せて、實は自分の靴を打つてゐるものもあり、鞭を入れたやうに見せて、手は動かすが、實は馬の腹にあたつてゐないといふものもある。始めのうちはこんなによく引つかかり、もう一杯の脚だ、一杯でこの位のタイムでは大したことはないと軽く見てしまふのである。ところがそれが大したスピードをもつてゐて、いきなり初日に出て勝つてしまふことがある。こういうのは新馬でも古い馬でも實によくやる手で、つひ欺されてしまふことがあるものである。

また軽いキャンターで敵馬のあとにつき、その馬が走るのにびつたりとついて、或は少しあとから行つて、それも十分餘力をもつて走つてゆくのもゐる。こういう馬は油断ならない馬で、

前の馬が相当力走してゐるのに氣をとられて、その馬の時計を計つてゐて、あとからゆく馬を見のがしてしまふ。然し實力はあとからつけてゆく馬の方が段違ひに強いといふことがある。こゝろいふやうにただ調教を見て時計を計るのではなく、その調教の癖やいろんな點を見ると、實に面白いし、楽しいし、適確な判断もつく。騎手によつては、調教の時でも負けてゐられなくて、先の馬を追ひかけてみたり、敵馬と併せて一杯に追つたりするのがゐる。それから追ひすぎてレース頃になると馬がすつかり疲れてしまひ、コンディションが悪くなつてしまふやうな調教の仕方をするのもゐる。中に順調に調教をやつて、調教のタイムに一周一〇秒を出すと、その次には一〇八秒、その次には一〇五秒と、順にピツチを上げてゆく人もある。そうして今日はどれだけの時計が出た、半哩どれ位で、上りはどれほどだつたとよく話してくれる調教師がゐる、田中和一郎、田村仁三郎などといふ調教師はそういふ正直さをもつてゐた、それでやつぱりその馬が勝つて大穴になるときもある。田村仁君がトカチカスガといふ速歩馬に乗つてゐるとき、今度はカスガはよく歩きますよ、一ハロン(二百米)十九を切りますよ。と嬉しさうに言つたことがあつた。實際時計をとつても十九(十九秒)を切つてゐる。これは一勝すると確信してさて出走の時を待つた。

ところが組合せに相当強敵がゐる。「勝てますか」ときくと、「なあに問題ぢやありませんよ」といふ。そう言はれても、まだ相手が強すぎるので、新馬ではあるし、危ないと思つてレースを見てしまつた。するとカスガは問題なく、凄いスピードで歩いて勝つてしまつた。こんな正直な騎手の馬でもやはり穴になるときはなる。よく調教タイムは隠したがるし、馬の調子を教へるのを嫌がるものがゐるが、これは愚かなことで、どんなに發表しても相手によつてやつぱり除外される時がある。あんまり勝つ勝つといはれても信じられなくなる時がある。石毛といふ騎手がさうであつた。「明日は勝つよ」といふので、「こんな強いのがゐても勝てるのか」ときくと「なあに勝てるよ」と云ふ。そう云はれてもどうも危ない氣がする。然しやつぱりその強敵を破つて見事に勝つのである。こゝろいふ騎手は調教もしつかりやるし、時計など隠さない。田中和調教師などは「今日はうちの馬を追ひますから一つ時計をとつて下さい」と云つて、どれとどれと併せるといふ併せ馬まで言つてくれる。何しろ調教馬場には一時に三十頭も五十頭も出て追ふので、一寸見失つてしまふことがあるが、そういはれてゐれば注意してみることが出来て非常に助かるのである。鈴木信調教師なども、家の馬をよく見ておいて下さいよ。と云つて、あとで時計を教へてくれたりした。そうして出来工合など、實によく話してくれた。

これからの競馬はこれ位の公明正大な調教師によつて調教された馬ばかりが走るやうでなければならぬと思ふ。やつぱり一家をなして大成してゆく調教師はこせこせしたところがなく、明朗で、どこまでもスポーツマンらしい純粹さがある、それでなければいけないと思ふ。そういう點で一流の調教師のところの馬は隠しもなくケレンもなく、つねに堂々とやつて勝つてゐる。三分三厘から追つてそこで止めるのも一つの策戦であるからいい。暗いうちにやるのもいい。然し時計を隠しても何んにもならない。いくら百秒のタイムで走つても、そしてそれがわかつてしまつても、實際の手應は乗つてゐるものだけがわかつてゐることで、これをほんとうに見破ることは難かしいからである。

△ 十四、枠順の有利不利

レースと枠順（コースの列順）とは非常に有利不利に關係がある。陸上競技のスタートを見ても、インコース、アウトコースのスタートには距離差がついてゐるが、競馬ではスタートラインは並列で、インコースもアウトコースも一列である。それも出走馬が少いときには甚だしい差も

ないが、十頭以上になればインコースと外では非常な差が出てくる。もし外枠の馬が内枠をとら得なければ、ゴールインするときは何馬身かの差がついてしまふことは説明するまでもない。

それであるからインコースの馬、アウトコースの馬をうまく選定しなければならない。然しアウトコースが絶対に不利だとも云へないし、同時にインコース必ずしも有利ではない。單に内枠だから有利、外に廻つてゐるから不利だと断定することは早計である。ずつと昔、目黒競馬時代では十五六頭の出走馬になると、十一頭目か十二頭目の馬は後列になつたことがあつた。こうなると明らかに不利で、相當の力量のある馬でないと、後列からのスタートでは勝つことが難かしい。これとて後列の馬が勝てないとは云ひ難く、後列で勝つた馬もあるが、それ程力もなく、前列の、しかも内枠に強い馬がゐたのではまづ、勝運に見離されたと判定してもいゝ位のものであつた。

枠順は重大な關係があるが、インコースが有利な馬であるか、アウトコースが反つて有利であるか、これをよく考へないといけない。インコースでスタートに出足がよく、そのまゝ先頭に立ち得る馬はいいが、インコースで出足の悪い馬だと、中のコース、外のコースの馬に包まれて、苦戦をすることがある。外の方に出足の早い力の強い馬がゐると、いきなり外からかぶせてきて

トツブに立つからである。

大體外枠の馬がインコースの馬と同じ有利なコースを走るのには五十米位は餘計に走らなければならぬ。つまりインコースの馬と同じ位置にゆくには馬場の中を斜めに走つてインコースの馬の先に立つか或は並ぶのであるから、それだけ餘分に走つて努力しなければならぬ。それだけの力がない馬が外枠にゐたら見捨てる外はない。出走馬が七八頭として枠順1234となつてゐて、2がよいか3がよいか或は4がよいかといふことは断定し難いが、先にも説明したやうな條件から考へて判断すれば大體の見當はつく。

昭和十八年の日本ダービーの出走馬は二十五頭であつたが、枠順十番のクリフジが二着馬を六馬身離して勝つてゐる。しかも二千四百米のタイムは二分三一秒四の新記録であつた。これなどは相當な力量であつたといふことが出来る。これはインコースの馬が丁度中央邊の馬或は外にゐる馬にかぶせられて苦戦をした結果である(クリフジの力が拔群ではあつたが)と云へる。この枠順の關係は統計をとつてみると、かなり實際的に證明が出来るのであるが、いま材料が手元にないので、實證することが出来ない。

然し出走馬の頭數によつて、スタートの位置によつて有利不利が出てくるといふことを注意したい。府中の馬場で、千六百、千八百、二千のスタートはさして問題にしなくてもいいが、これ以上の距離のスタートは大いに關係する。更にスタートの悪い馬、いい馬を見分けることも必要である。

十五、レース距離の適否

距離の問題も當然考へなくてはならない。千六百米なら一分四十五秒で走り得る馬も千八百、二千米となつてはあとの二百米、四百米といふところで力が盡きて負ける馬もあり、千八百か二千米なら最後の力走で勝てる馬もある。所謂末の脚のある馬で、距離が長い程強いといふ馬がある。然し千八百米のレースで一分五五秒に一馬身の差で二著となつた馬と、一分五六秒に一馬身の差で二著となつた馬とが次のレースに出たとして、前の馬が必ずしも強いとは云ひ難い。これは同じ距離を走つてゐる馬であるが、一分五五秒のタイムに二著の馬はそれだけ早いペースで走り、五六秒の馬はそれだけおそいペースで走り、最後の力走で及ばなかつたといふこともあるからである。これを同時に千六百米を走つて二著の馬と、二千米走つて二著の馬とが千八百米のレ-

スに出たとして、二千米を走つた馬が必しも強いと云ひ難い。尤もこの場合タイムにどの位差があるかといふことは當然に問題になるが、走つた距離の長短だけで推定することは出来ない。ただ二千四百米になれば断然強いが、千八百米位では短距離の快速馬に及ばないといふ馬があり、前に述べたやうに千八百米位では相當のタイムを出して勝ち得るが、それ以上になつては勝ち味がないと云ふ馬はある。ハナ切り馬、短距離馬によくあることである。然しまた長距離に強い馬で、短距離にも速い馬がある。

アスコットの走つた距離とタイムを参考にあげて見る。

一八〇〇米 一分五四秒一のサンダークラツプに鼻の差で二著(東京七年秋の五日目)、勝タイ

ムは一分五六秒二(根岸)

二〇〇〇米 二分七秒一のワカタカに頸の二著(馬場良)勝タイム二分十三秒二(重量五九キロ)

(馬場重)

二四〇〇米 二分四一秒(六四キロ) (馬場重)

三二〇〇米 三分三一秒一(七〇キロ) (馬場良)

四〇〇〇米 四分三三秒(六二キロ) (稍重)

この勝タイムでわかるやうに、千八百米を一分五六秒二で勝つてゐるのに、次のレースでは一分五四秒一で走つてゐる。(鼻の差では殆んど同タイムである)そしてこのやうな早いタイムを短距離で出してゐるのに、又長距離でも勝つてゐる。アスコットなどは追ひこみ馬であつたが、短ければ短いなりに、長ければ長いなりに最後に非常に速い脚を出して勝つてゐるのである。このやうな強い馬は別として、普通の馬は二千米位のレースでは大して差がなくとも、長くなるとまるで走れないのがある。ハナ切り馬に特にこの末の脚のないのが多い。

であるからレース距離がその馬に適してゐるか否かを判断することは忘れてはならない。短距離に強い馬、長距離に強い馬、その何れにも適する馬、そしてその馬がその距離で出し得るタイムの比較研究が大切である。

十六、雨に強い馬、弱い馬

馬場の状態が適してゐるか否かこれも勝馬を判定する上に於て重要である。血統のところでも述べたが、雨が降つては全然動けない馬があり、良馬場では、他の良馬場に速い馬に勝ち味がな

いと云ふ馬がある。

馬場の状態は、良（乾いてゐる馬場）稍重（雨上りで濕つてゐる時、或は雨が降り出して濕つてきた時）重（相當ぬかるんでゐる時）不良（雨が降つてゐる時、或は雨の上つた後水溜りのあるやうな時）と四つの状況に分けられてゐる。然し雨が降つてゐても東京競馬場の芝生馬場のやうに相當水切れがよく、大して重くならない馬場があり、京都のやうに水溜りが出来て極度にぬかるむところもある。但し京都は砂が多いので、福島などのやうにねばることはない。

馬場の稍重の時も、レースが進むにつれて重くなるときがあり、夏など太陽が出てゐて段々輕くなつて（乾いて）ゆくとときもある。こゝろいふ状態の判断は非常に難かしく、又各馬の能力に非常に影響があるから、雨馬場に強い馬、良馬場に強い馬をはつきり知つてをくことである。馬に強い血統の馬はペリオン系、ガロン系、ロイジュール系、アスフォード系、トウルヌソル系、ダイオライト系、レイモンド系、月友系等で、シアンモア、スエーツマン、セフト系はあまり期待がかけられない。然しこれらの血統の馬でも、雨を苦しめない馬があることを忘れてはならない。一般的に、少し概念的ではあるが、概して弱いといふことを知つてをくことである。

石毛騎手が乗つてゐた馬で、コマイサミだつたかチバコマであつたか、雨がポツリと降れば走

る馬があつた。この馬は雨が顔にあたれば走つたので、馬場が悪くなくつてもいゝ馬であつた。これなどは特別な例であるが、よく雨の馬場でなければ殆んど勝てない馬があつた。しかし又雨の馬場でも良馬場でも強い馬があつた。アスコット、ハクコウなどがさうであつた。サラブレツト種には雨を苦しめる馬が多いが、アラブにも雨では絶対に走らないのがある。新馬の場合にはこの不利が非常にあるので餘程注意しなければならない。

よく雨が降ると荒れる（大穴が出る）と云つて少し年期を入れたファンが喜ぶが、これは多くのファンが雨に弱い馬でもかまはず、人氣を集注させてしまふので、その中に雨に強い馬があれれば、それを選んで買ふと、その馬が勝つて好配當をつけるからである。前日は晴れてゐて、前日夜から、或は朝方から降り出してくると、新聞で發表する豫想にはつきりと狂ひが出る、つまり良馬馬の状態を考へて豫想を立てる。ところが雨が降るとがらりと様子が違つてくる。普通のファンはそんなことに頓着なく、新聞の本命を買ふのである。

又良馬場の時でも砂埃の立つやうなときにはいけないとか、風があまり吹いていけないとか、馬によつてもいろいろ状態による條件がある。然しダービーでトクマサが勝つたやうなこともあるから（特別の齒鐵、即ちスパイク鐵をつけてトクマサは勝つた）そんなこともよく見ることで

ある。前のレースで雨の時負けたからと云つてその馬が必ずしも雨に弱いとばかりは云へない。百米を六秒位の速度で走る馬を御すといふことの技術は餘程巧みでなければならぬ。手綱を掴んでゐれば、馬がただ走つてくれるやうに思はれ、さうも見えるけれど、そうして調教師である先生は弟子に、『馬場を廻つてくればいいよ』と云つてレースに出すが、中々そうはゆかない。調教でもさうだが、競走となると、スタートからゴールまで、前に敵がゐるときがあり、後ろにも、横にも敵馬がゐて、思ふやうにいいコースがとれない。それを手綱一つで（或ひは鞭や拍車を入れるが）有利なコースをとり、強敵の横につけ、或は後ろにつき、或はハナを切り、時には百米を七秒位で走り、時には六秒半で走り、最後には又六秒位でラストヘビーをかけなければならぬのであるから、頭腦的にも冴えがなければならぬし、レース策戦といふものにも優れてゐなければならぬ。競馬をスポーツとして見ることを主張するのはかくの如き點を言ふので、一定のルールに従ひ、馬の持つてゐる能力を十全に發揮させる、しかも競走はフェアプレイでなければならぬ。であるから騎手はまさにスポーツマンであり、競馬はまさにスポーツである。このやうな點から馬を御すことに巧みな頭腦的な騎手と、さうでない騎手とでは格段の差が出てくる。如何に名馬でも拙劣な騎手が乗つたのでは勝てない。先生（調教師）から「七分五厘で

ハナに立て」「始めはタメて半哩から追ひあげ、三分三厘で敵馬のそばにつき、直線にかかつたら追ひつける」といふ注文を出されて、そのやうに乗れれば一人前であるが、敵馬がゐることであるし、うまく内枠をとればよいが他の馬に挟まれたり、内枠の馬から外にもち出されたりして、仲々三分三厘で敵馬のそばにつくといふやうに巧くゆかないのである。スタートすると思ひがけなく先頭に立つてしまつて、ええそれならば逃げ切つてやれと、いい加減のスピードを出して逃げてゆくが、半哩になつても後の馬がびつたりついてゐてゆかない、それならばと三分三厘位から必死に逃げにかゝると、直線にきた頃、後続馬がどやどやと一齊に追ひあげ、あれよといふまにどん尻になつてゐたといふやうな乗り方をする騎手もある。

尾形景造（いまは藤吉と云つてゐるが）がアスコットやハクコウやアカインダケなどに乗つてゐた頃、或はその以前所謂騎手としての全盛時代、いつも追ひこんで勝つてゐた。その馬のペースを計つて、直線にかゝるや一氣に手綱を伸ばして追ひこんで、丁度ゴールで間に合ふといふレースをしてゐた。この尾形騎手の乗り方は然し時によると效を奏さず、僅かに及ばないことがあつた。十一年春の東京で七十キロのアカインダケに乗つて特ハンに出たときなど逆にイリヨクに追ひこまれて四分の三馬身敗れたが、八年秋の中山特ハンではハクコウに乗つてハクセツに頭だ

け及ばなかつた。同じ年の春根岸の特ハンでやはりハクコウに乗りクラツクミンテンに四分の三馬身及ばず敗れた。然しこの尾形といふ人は後から追ひこむといふ乗り方をしてゐたのに、雨降りのぬかるみの馬場でも、後から來ながら顔を汚さない騎手だつた。雨降りでは後からゆけば前の馬の飛ばす泥で人馬共に泥だらけになるのに、顔を汚さないといふのは餘程巧く乗るに違ひない。しかもその追ひこみは物凄く、絞りだすといふか、手綱一つで馬に最大のスピードを出して勝つてゐた。このやうな騎手が乗れば安心して見てゐられた。然しともすると鼻や頭の差で敗れるが。騎手では二本柳勇（これは惜しくも二三年前死んだ）仲住達など巧かつた。若手では伊藤正、阿部正、小西、中村廣など鮮やかな乗り方をしてゐた。強引なのは岩下、大久保未等、石毛君なども強引で又巧みであつた。騎手の優劣は競走に非常に關係があるので、餘程段違ひの力があればともあれ、伯仲してゐるときは巧みな騎手を選ぶべきである。

十七、負擔重量の問題

競馬では負擔重量といふものがある。よくカン／＼が重いといふが、最高七十七キロ、普通初

出走（新呼のとき）の定量は春は牡が五十五キロ、牝が二キロ減の五十三キロ、秋は牡が五十七キロ、牝が五十五キロであつた。この負擔重量は騎手の體重と勝負服（ユニホームで、競走に出る服）と靴、帽子、鞭、鞍などの重量で、五十五キロなら全部計つて五十五キロなければいけないのである。

たしか一キロ位の増加は認めるが、減つてゐてはいけないのである。この負擔重量、呼馬は三千圓の賞金で一キロ宛増加してゆくことになつてゐる。つまり賞金を六千圓とれば五十五キロの馬はその次の競馬場のレースでは五十七キロになる。だから春の新呼で中山を走り二勝して優勝をとつて八千圓賞金を得たとすると、次の根岸では五十七キロとなつて古馬となり、ここで一勝して五千圓得れば、前のと合せて一萬三千圓となるから四キロの重量を加増され、東京競馬に出るときには負擔重量は五十九キロとなる。

これが新呼（四歳馬）の優秀馬の成績であるが一舉に四歳馬で四キロ重くなると、なかなかたへてスピードに影響してくるのである。普通一キロ重ければ約六馬身の差がつくと云はれてゐる。つまり同じスピードのある馬として、Aは五十六キロ、Bは五十七キロであると、同じやうに走つて六馬身の差がつくといふのである。それが良馬場ならよいが雨不良馬場ではこの一キロ

は相當こたへるのである。騎手の體重は大抵五十一キロか二キロ程度で、重くて五十五キロである。であるからもし五十五キロの體重の騎手が新呼の初めての馬に乗るとすれば、長靴や鞍の目方があるから汗とりと云つて蒸風呂、或は普通の風呂に二三時間も入つて汗を出して目方を減らして乗ることになるのである。こんなわけで、負擔重量は相當重要な關係をもつことになる。六十キロまでなら左程こたへなくても、秋になつて六十キロを越すと、四歳馬では勝機を逸することもある。

更に賞金を稼いで、五歳の春となつて六十五キロ、六キロとなつてくると、一キロ増しただけで勝ち味がなくなる時がある。殊に春のダービー馬などが秋の特ハンに出るときなど、重いハンデをつけるときがあるから勝ち味がなくなるといふこともある。特ハンは競馬だけに見られる負擔重量のハンデキャツプレースで、強い馬に重いハンデキャツプをつけ、成績不良の馬は反對に軽くするといふのであつて、力量をハンデによつて平均させ、同じやうな力で競走させるのを目的としたレースであるから、研究すればする程難かしい、しかも興味のあるものである。

例えば定量（牡馬であつて、賞金をかなり得てきた馬が普通負擔すべき重量）が六十五キロの馬があるとする。これが好調で非常に強味があるとハンデキャツパーに見られると、六十八キロ

とか七十キロのハンデをつけられ、反對に常に勝つてきた七十キロの六歳馬があるとする、この馬は七十キロとなつてからあまり成績を現はさない。このやうな馬がハンデを六十五キロ位にされたとする、そして力量が平均され同じやうなレースが出来るといふのであるから、特ハンで四、五、六歳馬の強豪が出て、頭鼻頸といふやうな白熱戦となつて勝負がきまつたとすれば、ハンデキャツパーが我意を得るわけで、鼻の差ではなく鼻を高くしていいのである。

このやうに負擔重量が適してゐるか（特ハンのみでなく）どうか、勝ちつづけたために一気に増量されて他の軽い馬に乗ぜられる時もあり、その點を注意しなければならぬ。カン／＼に泣くとよく云ふが、六十二三キロまではよく勝つてきたが、それ以上となつて六十五キロになつてからさつぱり勝てないといふ馬もあり、七十キロでもすいすいとハナに立つて勝つ馬もある。重量の比較研究、重量馬の雨馬場の有利不利、特ハンの研究等面白い材料がある。競馬はだから研究すれば盡きない興味があり、トミクジと違ふ科學的な興味のあるものだといふのである。

十八、牝馬・牡馬の何れが強いか

競走馬は牝馬が強いか、牡馬が強いか、これも大いに研究の餘地がある。英國のエプソムダービーは殆んど牝馬が勝つてゐないといはれてゐる。これには種々理由があるらしいが、日本ダービーでも十九年春まで十三回といふ回を重ねて第六回目のヒサトモと、第十二回目のクリフジが牝馬で勝つてゐるに過ぎない。あとは全部牡馬で、十三回のうち牡十一牝二といふ勝馬である。

然しヒサトモは二分三〇秒三のレコード、クリフジに至つては二分三一秒四といふ優秀な新記録を作つて勝つて、牡馬のタイムを遙かにしのいでゐる、最も第一次のワカタカから第五次のトクマサまでは重馬場で、タイムは悪く、ヒサトモの時始めて晴れの良馬場であつた。そして次の年の第七次スゲヌマはヒサトモのレコードを五分一縮めて二分三三秒二のレコードで勝つた。馬場はやはり良であつた。その後第八次は小雨重、第九次晴良馬場でイエリユウが二分三四秒一、第十次のセントライトの時も重、ミナミホマレの時は晴れ良で二分三三秒のレコード、これを牝馬のクリフジが一秒五分の一縮めたのである。

このやうにダービーでは牡馬が重馬場で勝つてゐるが、果して牝馬が弱いのか、勿論牝牝の出走数も違ふが、これは研究の餘地がある。殊に春のレースは牝馬は體の状態によつて全然不利なきもある。いはゆるフケが來たときで、(春のめざめの時は能力が出ない)このフケが來ると

まるで走れなくなる馬がある。四歳馬でもさうだし、五歳六歳となつてはこの影響がかなりある。長距離では牝牝何れが強いか、中距離、短距離、この研究も面白い、中には牝馬のハナ切り馬が走つてゐるとあとからゆく牝馬が全然ぬけないといふこともある。牝を出しぬいては悪いと思ふのであらう。遠慮勝ちな牝馬である。又英雄的なものになると牝馬と並んだらとても速いといふのもゐる。出走馬の牝牡をよく調べ、牝馬でこの距離がよいか悪いか、そつといふ比較研究をすることも大いに必要である。レースによつては牝馬ではどうも力が足りないといふことがある。

春の新馬の負擔重量が牡は五十五、牝は五十三、つまり二キロのハンデがついてゐる位であるから牝の方が弱いと見られてゐるわけである。然し同じ四歳馬で二キロの差があつては牝馬有利な場合もないとはいへない。何故なら牝馬とはいへ男まさりもゐるからである。ヒサトモ、クリフジなどまさにさうで、ヒサトモは殊に二キロの有利が賞金にも關係した。牡馬は最初から五十キロであるから、三千圓で一キロ増加するとして六萬六千圓で極重に達するが牝馬は七萬二千圓(つまり六千圓だけ餘計に稼げる)で極重となるわけであり、ヒサトモの場合これが大いに關係して賞金では十萬圓近くを得て、競馬がまつて今日までの最高の賞金を得てゐる。

こんな男まさりの牝馬は二キロの差が大いにものを云つたわけである。このやうに牝馬は初め

から弱いとしてハンデがついてゐるが、馬格がよく、牡馬とも見えるやうな牝馬なら、新馬のときは二キロ差だけで牝馬を選んでもいいわけである。但し血統もよし、調教もよし、騎手もよしといふ場合である。

然し牝馬は調教が進むと食ひが細る（用語を見て下さい）缺點がある、食ひが細れば腹が巻き上る（細くなる）腹が細くては（反対にあまり太くても困るが）走れない。殊に春は調教が強くなるほど食ひが細り十分調教も出来なくなり、力がつかないといふこともある。牝馬二キロ減などもこんなところにも理由はあるだらう。

先づ牝馬は體がよく、フケなく、食ひが十分であれば牡馬よりすつと強味があると見てよい。但し二千二百位までのレースである。もつともヒサトモやクレオパトラトマスは長距離にも強かつた。これなどは牝馬中の名馬であつたが。

十九、馬券を買ふ條件

競走馬の優劣を計る尺度として、即ち馬券を買ふのに馬を選ぶべき條件として、勝タイムによる

その馬の能力、血統、健康状態、調教の良否（コンディションの如何）枠順、距離、馬場の状態、騎手の適否、重量の関係、牝牡の研究等について説明したが、そしてこれらの諸條件を究めた上で、始めて馬券を買ふところに競馬の眞の面白味があるのであるが、これと共に人爲的なことも又考へなければならぬ。

それは不正レースの喝破ではなく、その馬の能力から見て、どのレースを狙ふかといふことである。これは組合せ（出走馬の顔振れ）によつてこのレースなら勝つると狙つて出るのである。水泳などにもあるが五百米に出て、千米に出る選手もあり、千米に全力を注ぐために五百米では一位を得なくても、コンディションを整へるために泳ぐといふことがある、或はリレーに全力を注いでチームの得點を得るといふこともある、そのやうに、初日の特ハンにハンデは重いが出た次の競馬の特ハンに出る資格を得るために先づ走り、定量で走つて勝つといふこともある。

特ハンは定量よりも二キロも三キロも重いことがあり、定重なら勝味があるので先づ特ハンでは馬場を廻つてくる程度に走つてその次の日の平場で勝つといふ手もある。或は初日の顔ぶれはよすぎるので、先づ相手の力を試すつもりで出走し（特別のときよくやるが）次のレースで大いに頑張つて勝つといふ手、その出走と勝機を掴むといふ時をよく見決めることである。

初日二着、次も二着次も二着そうして二着権利で優勝レースに出る。(以前は初日から七日目までの一着馬ばかり出る優勝レースがあつたが、最近は一着馬も出られる優勝レース或はこれに代る特別レースがあつた。今年春競馬も出走馬が少いから二着権利の出られる特別或は優勝レースがあらうが)二着ばかりの馬ではあるし、一着をとつた馬はその馬を破つてゐるわけであるから、従つてその一着をとつた馬に人氣が集るから、そこで二着馬大いに奮闘して優勝するといふこともあつた。

つまり二着をとつて優勝するといふのが狙ひであつたのである。善良な馬主はなんでも勝つてくれと負けるレースには出さなまいふのもあるが、馬主によつてはこのやうな策戦を用ひるものもある。又調教師によつては、この位の優秀馬は初日に勝つて、優勝に備へる(新馬の場合)といふ堂々と見識をもつてやるが、中にはそんなことはかまはずにやるのがある。

つまり五萬圓も六萬圓もした所謂一流馬だから初日の千八百のレースにはおかしうて出せない。長い方(二千米レース)で勝つて、四歳馬の特別レースがあればそれで勝つてといふやうに、馬の無駄使ひをせず一家の識見をもつてゐる眞面目なスポーツマンシップをもつた調教師がある。こういう調教師の一流馬が、狙つて出すレースはそのレースだけで力一杯やるからそこを見

て買ふのである。

古馬であれば、特ハンを狙つてゐるのか、長距離の特別レースを狙つてゐるのか、或は初めは調教がはり(仕上つてゐない馬で調教がもう少しといふ時)に出して次のレースを狙ふといふこともある。つまりチャンスはどこに求めてゐるか、果して最初出たときにほんとの勝負をするか、これは不正ではなく策戦としてやる場合があるからそれを引抜いて買ふのである。チャンスは組合せにあり、馬場の状態にあり(雨に強い馬は雨を待つて出る)距離の適不適にあり、いろんな条件があるので、その最上の条件のときにこゝ一番の勝負をするのである。それをこつちも狙ふのである。

②二十、馬券必勝の三原則

羽黒山と双葉山の取組みを見たとき、何ちらが勝つかといふ興味をもつ。そしてそれを人にきくと甲は羽黒が勝つと云ひ、乙は双葉が勝つといふ。連戦連勝時代の双葉は強かつた。だから負けようとは思へない。然し油の乗つてきた羽黒もぐつと強味が増してきた。羽黒が勝てないとは

断定し難いところがある。と云つたやうに二人だけの相撲でさへも判断しにくいものがある。まして五頭十頭と組合はされた競馬で、そのうちの一头を選び出して馬券を買ふとあれば、あれでもないこれでもないと迷ふのは當然である。

調教はよし、血統はよし、騎手はよし、いろ／＼の条件から見ても断じてこの馬と決めてかゝつても、スタートを切つてゴールに入つてみなければわからないのが競馬である。負けたことがない双葉も慕内何枚目かの小男に敗れるときもある。そのやうに断然強いと思つた馬も意外にスタートで出遅れたり、包まれたり、先の馬を追ひすぎて末の脚を失つたり、いろいろのことで名もない馬に負けることがあり、そこに競馬の面白さもある。

五頭の出走馬を見たとき、日頃調教を見てゐて脚いろの冴えてきたDといふ馬が入つてゐるので、それとはなしにDの騎手に聞いてみた。「このレースはどれが勝てるの？」と、するとAが勝てるレースだと云つた。「君のは？」ときいてみると、「私のなんかAにはかなひません」と云つた。そこで今度はAに乗る騎手にきいてみた。「大低勝てると思ふがBが敵です」といふのでBの騎手にきいてみた、「Aが勝てるでせう、然し私のもなかなか強いからひよつとすると勝てるかも知れないと云つた、そうしてとうとう五人の騎手にきいてみた、結局A、Bのレースで

Aに勝味があるといふことに意見が一致した。

ところが翌日、レースをみると、最初にきいたDといふ馬が勝つてしまつた、競馬といふものはさういふものである、であるから勝馬を撰定するといふことは難かしいものである、そこで前の晩出馬表を見て、過去の成績やいろんな条件を調べて、二重丸をつけたり馬名の傍に赤鉛筆で線を引いたりして、明日は断然これを買はうとその馬が勝つて好配當をつけて喜んだのを夢にまで見たのに、電車の中でこのレースはこの馬が狙つてゐるんだよ、この馬主が明日は勝つから買へと云つて教へてくれたんだと連れの男に話してゐるのを小耳にはさみ、改めてポケットから出馬表を出してそつと見るとその馬には印もつけてない。

そこで忘れるといけないとそこに三角をつけておいて、競馬場にゆくと、さかんにその馬のことをきく、よしそれではこれが穴馬かと思切つて買ふ、ところがその馬はどん尻で、自分が印をつけておいた馬が勝つ。やつぱりこれが勝つたのか、今度は迷はず、印の通りに買へと三重丸に赤線を引いておいたのを買ふとどうしたことかそれが負けてしまふ、といふことがある。迷ひは更にそこから繰り出されて、信念も鑑定もなくなつてしまふ。競馬を見ることは馬券を買ふことでもあるとして、馬券を買ふには先づ冷静であれ、信念をもて、迷ふな。これが三原則である。

二十一、ダテヤマト事件

昭和六年の春競馬であつたと思ふが、根岸の二日目の第七レースで四勝以上の馬が出る障碍競争があつた。距離は二千八百米、向ふ正面がスタートだつた。出走馬は當時關西で連戦連勝してゐたコマツカゼと、それにダテヤマト、セイカンの三頭、騎手はダテヤマト(72)竹野、コマカゼ(70)金子、セイカン(70)仲住達であつた。このレースはコマツカゼに絶対人氣が集まり、馬券はコマツカゼ一〇一、ダテヤマト九五二、セイカン九三二であつた。

スタートを切るとどうしたのかコマツカゼが立ちどまつて動かない。そのまにダテヤマトが先頭に立ち、かなり離れてセイカンがつゞき、コマツカゼはこの二頭がかなり走つてからやつと走り出したのであつた。場内はぎつしりつまつた超満員、第七レースともなればファンは相當動揺する頃である、人氣のコマツカゼが出をくれたので、早くもこの馬券を買つてゐたファンが騒ぎ出し、ダテヤマトを買つてゐたファンが快哉を叫ぶといふやうな昂奮が漲つてきた。ダテヤマトが必死に逃げるのを相當離れてセイカンが追つてゐた。それに半哩をすぎる頃、先頭のダテヤマト

の逃げ脚が落ちてきて、セイカンが徐々につめてきた。ダテヤマトのファンは鳴りを静め、セイカンを買つたファンが今度は聲援しはじめた。三分三厘にかゝるやダテヤマトの脚は止まるかと思ふばかりに落ち、反對にセイカンが脚いろ鮮やかにこれをぬいて最後の追ひこみにかゝり、兩馬必死にゴールに殺到した。カイセンにつゞいてコマツカゼもさすがに力走してこれに迫つたが、遂に及ばなかつた。

セイカンのタイムは三分二〇秒二、これに一馬身でダテヤマト更にコマツカゼは一馬身四分の三までつめた。怒號が場内に湧き立つた。「セイカんだ、セイカんだ」と怒鳴りながらスタンドを飛び降りて拂戻場に馳けてゆくファン、配當は五十何圓だつたか、配當をとつてスタンドに戻る。「八百長だ、八百長だ」といふ聲が方々に起つた。そうしてこのレースが、八百長だといふことが段々ハッキリしてきた。ひどい出をくれをしてセイカンに二馬身四分の三までつめたコマツカゼの實効に人氣が集まつたのは當然で、これはコマツカゼを買つたファンの眼が正しかつたのである。ところがコマツカゼはスタートに立ちどまつた。ダテヤマトが懸命に逃げた。あとはセイカンがこれをぬかなければ、ダテヤマトが勝つのである。ところが仲住君はダテヤマトをぬいて勝つた。ダテヤマトを買つた玄人筋の勝負は美事に壞れた。

コマツカゼさへ出をくれてセイカンがぬかなければ、逃足の早いダテヤマトが當然勝るといふことになつてゐた様である。然し生一本の仲住達君はそんなことにかまはず、眞剣にレースをして勝つてしまつたのである。この問題は表面化し、コマツバラはその後出場停止をうけ、處分された。かなり重い罰をうけた。これが有名な根岸のダテヤマト事件である。昔の競馬にはこのやうなことが、大なり小なりあつたやうである。その後日本競馬會が審判を厳にし裁決などを設けて、不正レースを取締つたので、このやうな目立つた事件はなかつたが、美馬勝の乗つた速歩馬ハツセなども中山でファンに騒がれたことがあつた。ここまで見破るのにはファンも相當達者にならなければならぬ。

二十二、大穴發見の興味

ダテヤマト事件のやうなことがなくても、競馬には穴が付きもののやうであり、ファンはその穴の出ることに最大の興味をもつてゐるかのやうである。

それでは競馬の穴はどうして出るのか、これを見つけたことに又別な興味があり、大いに研究する餘地がある。

いつたい穴馬といふのがあるのか、といふと穴馬などといふものはないと云つた方がいゝ。ただファンの心理で穴が出ることもあり、實力のあるのを知らないで穴にしたりする方が多く、ファンの見落しのために穴が出ると云ふ方が適切である。つまり一頭か二頭の馬に人氣が集注してその馬が勝てなかつた時、好配當が人氣のない勝つた馬につくといふのが穴といふもので、別に初めから穴馬的な存在はないのである。そのレースで勝つべき馬を見のがしてしまふ。その結果その馬に好配當がつくのである。これからの競馬で配當が無制限になれば、このやうな馬の馬券を買つてうまくゆけば、一舉に何萬圓かの配當をうけることになるので、これからの競馬は馬券の上でも面白いものがあらう。そうしてそういふ人氣を集注しない力のある馬を研究によつて探しだすといふことに興味もある。

では人氣を集注しない力のある馬といふのはどういふのか、それは調教などで人の眼につかなかつた馬であり、組合せによつて概念的に強いと思はれてゐる馬が出る場合、それをしのぐ條件をもつた馬である。それからもう一つは雨に弱い馬を知らずに不良馬場であるに拘らず、ファンの人氣が集注してしまふ時、ハンデが重いために勝てないといふ時、レースの變化で人氣馬が他

の馬にマークされて苦戦をして敗れる時、いろいろな条件で強いと思はれてゐる人気馬が負ける場合穴になるのである。

そこでこれまで書いてきたやうに、血統とか、調教とか、健康とか、騎手の巧拙、馬場の状態、粹順、距離の關係などを出来るだけ詳しく調べる必要が起つてくるのである。新聞雑誌の豫想でよく本命とか對抗馬とか穴馬とか書くが、これは便宜上の順位で、まづこれまでの成績や血統やいろんな条件から割りだして本命にあげるのではあるが、對抗馬といへども二着になる馬のことではなく、この第一位にあげた馬を破る力をもつた馬であり、穴馬といふのは本命、對抗馬を破り得る力があるといふ馬である。

では何故穴馬とするのか、それはどう計算しても本命の馬が強いから一位にあげるのであるがもしその馬にレース上の誤算とか、他の馬にマークされたとか、順調なレースが出来なかつた時には、對抗馬が勝つか、誰が見てもこれがその本命馬に次いで強いと見てゐるが、その二頭を破る馬はこれが一番有望だ。然し前にも云つたやうに、順調にゆけば本命の馬が勝てる、そうして人気はこの馬に集注する。だからこれらの馬が負ければ、穴になるといふので穴馬とするのである。レースに波瀾があればといふのが穴馬を豫想に出す理由でもあり、誰が見てもこれが勝てる

と思ふ馬がゐて、これをもし破る馬がありとすればこれだといふので穴馬とする場合もある。次に穴馬の二三の實例をあげて説明して見やう。

二十三、穴は何故出来る

競馬の穴はファンが作るものではあるが、それでは穴はどうして作られてしまふかといふと、一言にして云へば、出走馬に對するファンの認識不足と鑑定眼の鈍さから作られるのである。そして群集心理にあまりに左右されすぎる結果である。その實例をあげてこれを説明して見やう。

十二年春の横濱のア抽（アラブ抽籤馬）優勝でタツクモがキイナリユウ、イーグル、スモールキング等を破つて百四十二圓の配當をつけたレースなどは、ファンが穴を作つた好例である。出走馬は阪神の新抽で優勝してきたタツクモを始め、キイナリユウ、イーグル、スモールキング、タグ、タストーン、ミヅホの七頭立であつた。人気はキイナリユウが斷然たる第一人氣で一九〇七票、スモールキング二番人氣で六三一票、タツクモ三人氣で四〇六票、イーグル四人氣で三四九票（何れも單式）であつた。

ここで各馬の人気がよつて起つた原因を探ると、キイナンリユウは阪神の特ハンで六十一キロのハンデを貰ひ六十五キロのイーグルを四分の三馬身破り、二千二百米を二分二五秒一で勝ち、三日目アラブの阪神記念二千七百米を三分〇一秒のレコードで勝つて、そのまま東京にきて六日目の千八百米を六十四キロで一分五六秒二といふレコードで勝ち、優勝二千四百米にはスモールキングを五馬身破つて二分四八秒一(馬場不良)で勝つた。重量は六十二キロ、次いで横濱にうつり、三日目二千六百米に出て二分五三秒四のレコードでタストンを破つて勝つた。重量は六十四キロ。スモールキングは東京の初日二千米に出て二分一二秒で一勝(重量五十九キロ、タイムはこれも優秀である)そして優勝にはキイナンリユウの二着、横濱ではアラブハンデ二千二百米を二分二五秒のレコード(この横濱の馬場は坂があり、稍圓形急カーブで時計がかかる)キイナンリユウの阪神の時計に五分の三おそいが、馬場の条件から見て匹敵する時計である。重量は五十六キロ、これが人氣の原因。

イーグルは阪神八日目の特別二千二百米を二分三〇秒で勝つてきた(重量六十八キロ、馬場不良)、しかし二日目に二千二百米で二分二四秒三(重量六十四、馬場良)のタイムで一勝してゐる。横濱ではアラブハンデに出て六十六キロでスモールキングに四馬身二着、スモールキングの

要數より約三倍の一人氣であつた。翌二日目二千四百米に六十五キロ(馬場稍重)で一勝した。タイムは二分四三秒であつた。これが四人氣の因。

タツクモは阪神の新抽優勝馬、二日目に一勝したタイムは千八百米二分一秒三(キイナンリユウが東京で勝つたレコードから見れば時計が五つ以上違ふ)のレコードであつた。(新馬としては優秀なタイム)横濱の初日二千二百米を二分三〇秒一(馬場良、重量五十七キロ)で一勝した。これらの成績から見ればキイナンリユウが斷然たる一人氣、スモールキングの二人氣は先づ當然、新抽優勝馬とは云へタツクモが古馬のキイナンリユウ、スモールの敵でないと思ふのは當然、然しレースはタツクモが勝つた。

ファンも多くは阪神でタツクモが初日百米以上も出をくれて(騎手鶴岡)然も一着のシユクフクに四分の三馬身につめた力を勿論知らなかつた。この時のタイムは二千米を二分一六秒四(かなりよいタイムであつた)そしてタツクモが根岸で一勝して優勝に備へての中間的の調教で呼馬のマークイスと併せて脚いろに遜色がなかつたことを知らなかつた。マークイスはオールカマーでゼネラルの二分二〇秒二のレコード(二千二百米)に一馬身四分の三の三着であつた。この馬と比較して劣らなかつたタツクモは、新馬ながら拔群の力を持つてゐたので、キイナンリユウを

破つたのは當然であつた。キイナンリュウの重量は六十四、タツクモは五四キロであつた。

タツクモの穴などは調教をよく見てゐたものには當然安心してとれるものであつた。當勝キイナンリュウ、新進のスマールキング、強豪イーグルがゐたのも非常な好餌であつたと云へる。これなどはフアンの人氣が最も合理的に集注される好條件のレースで、非常に穴になりやすく、又その穴をとり易いレースであつたと云へる。

誰が見ても出走馬を一目見て、これが本命か（一位の馬で勝てる馬）と概念的に決めてしまふ馬がゐるものである。そういふレースで、その馬にはとても他の馬は及ばない時は無理にその對抗馬或は人氣から見て穴になるだらうといふ馬を探す必要はない。然し、この馬が勝てるだらうと一應見當はつけたものの、Bも強敵だ、Dも強敵だといふやうなレースでは、それらを破る馬が他にもゐるはしないかと一應考へなければならぬ。そこに穴馬を探す興味があり理由がある。

キイナンリュウは千八百米を一分五六秒二で勝つた。タツクモは同じ距離を二分一秒三で勝つた。しかもキイナンリュウは二千六百米でも二分五三秒四といふレコードで勝つてゐる。優勝の時出たと同じ重量の六十四キロである。タツクモは初日二千二百米を二分三〇秒一で勝つたときは五十七キロ、優勝の時は三キロ減の五十四キロ、しかも中間非常に調子よく、最上のコンディションに達してきた。キイナンリュウは阪神の特ハンに勝つて直ちに東上したとは云へ、東京、横濱と轉戦して幾分か最上のコンディションから遠ざかつてきた。

更に阪神の特別で勝つたイーグルは六十八キロ（馬場不良）ではあるが二千二百米を二分三〇秒、タツクモは同じコンディションで同じ距離を二分三四秒一で優勝してゐる。イーグルと時計四つの差である。そして優勝した時のタツクモの重量は五十五キロ、タツクモが横濱の初日二千二百米を二分三〇秒一（イーグルの特別に勝つたと殆んど同じタイム、嚴密に云へば五分の一秒だけ多いが）重量は五十七キロ、優勝のときより二キロ増、イーグルの馬場不良の條件と、タツクモの二キロ増を考へれば、條件はほぼ同じと云へる。然らばタツクモの二分三〇秒一はイーグルの二分三〇秒と同じ力と見られないことはない。しかも横濱の優勝時は一勝した時より逆に三キロ減の五十四キロで有利である。時計にして二つ位の差がつくと見られれば、二分二十八秒臺でこられるといふ推定がつく。キイナンリュウの二千二百米二分二五秒一（阪神の馬場である。タツクモは根岸の馬場である）は六十一キロといふ特ハンであり、根岸の優勝の重量は六十四キロで、タツクモが三キロ減したのと反對に二分二五秒一の時計の時より見れば三キロ増である。三キロ増で時計二つ違へば、二分二十七秒一、タツクモの推定タイム二分二十八秒も、やゝキイ

ナンリユウに匹敵してゐるわけであり、それに轉戦の疲労と、好調子の上り坂とをハンデに考へることも出来る。

こういふ考察が、出走馬の比較研究に必要であり、穴馬を探す重要な鍵になる。どんなレースでも、過去の成績を一應基準として調べながら、重量の増減、馬場の状態などをよく調べるのである。

キイナンリユウは阪神の特ハンは騎手が小川深、東京も横濱も依頼された中村一、タツクモは阪神では騎乗を依頼した鶴岡で一勝。優勝した時は石毛、しかもタツクモは初めから石毛と石毛の先生の鈴木信が調教してゐた。血統はキイナンリユウがサラ、ペリオン、母は内ギド、モイノ一、タツクモはシリヤ、アラ、フアヘッド、母は内洋サンダー、キイナンリユウの父はペリオンで不良馬場に強い血統であり、サラ系で優秀であるが、タツクモの母サンダーは内洋で、サンダーの父は内サラ、コイワキでありこの母の血統が優秀である。

この二頭の血統的優劣は即断し難いが、後にタツクモが呼馬の強豪を破つたレースを見て、キイナンリユウが及ばなかつたのももつともだと思はれた。然しキイナンリユウは二十勝、三着一回、タツクモは十五勝二着一回、タツクモの着外は阪神の御賞典レースに呼馬と競走して敗れた

時一回、目黒記念でアツマダケに三着といふ拔群の成績であつた。これらの成績から推してタツクモの力量はアラブでは格段の相違があつたと云へる。ただこの力を早く発見するか否かが穴を見出す秘訣である。

二十四、人氣に左右されるな

競馬場のやうな案熱狂的なファンが集まるところでは、人間の心は動揺し勝ちである。と同時に一つの流れに合したがる傾向がある。群衆の心理といふものに支配されがちである。そこに人氣の偏重があり、人氣の集る馬は格段の差がつく。そのために人氣馬が敗れると案外に配當がよくなる。もし無制限配當競馬になつたら、なほさら偏重した人氣馬には手を出さぬことであり、同時にタツクモのやうな馬を探すべきである。

人氣の偏重は新聞雑誌の豫想から生れ、それに厩舎情報なるものから生れる。新聞雑誌がどれもこれも一位に（即ち本命）にあげた馬は、必然的に人氣が集まる。これは新馬の場合（新馬は初日、二日目のレースでは過去の成績がないために、ファンは豫想を唯一の手がかりとするため

に)特に甚だしい。特ハン等比較的研究し易いものは人氣が分れがちであるが、特別レースなどがほゞ決定づけられたやうなレースでは人氣が偏重する。さうして人氣の偏重する時は、レコードで勝つた馬、前のレースで優秀なタイムの二着馬が出た時、優勝馬や、特ハンの勝馬などが出た時に多い。

新呼や新抽のレースで、二日目三日目などの二著馬が出る四日目のレースなどは人氣がひどく偏重する。こういう時差し馬(これまで出走した馬ばかりの出るレースに新たにこのレースを狙つて初めて出てくる馬)が出て一向に注意しない場合がある。こういう時に得て穴が出がちである。新しく出てきた馬は未知数であり、その他は三日間のうちの何れかのレースに出て凡そ能力がわかつてゐるので、初日の長い方(二千米)に出て二着となつた馬、二日目の千八(千八百米)に出て二着となつた馬に當然人氣が集注されるのである。こういうときによく他の三着以下の馬或はその後調子のよくなつてきた馬、差し馬などを研究すると面白い。

競馬場位情報やデマの亂れ飛ぶところはない。それが取るに足らぬことでも、實に迅速にファンの間に喧傳されてしまふ。それは又實にスピーディーである。「このレースはこの馬がやるさうだ」(やるといふのは勝つといふ意味で、本氣になつてレースをして勝るといふのである)

といふ話が、馬主から、待合の女將などに初め洩らされ、それからその友人や馬友や、いろいろの人へ傳はり、遂に場内にひろがるものである。或は厩舎の馬丁や騎手などから同様に「勝てる」といふ確報?をきいた者から、それからそれへと傳はつてゆく。こういうのは穴馬に多いが、強い馬になると、それが人氣を偏重させる裏付けとなり好材料となる場合が多い。

「これなら大丈夫だ。何枚買つてもきつとくるよ」(くるよといふのは勝つといふ意味)と云はれると、やつぱり自分の考へた通りだ、新聞にも本命にあげてゐる、それではこれが確實だといふので人氣が集まつてくる。競馬場ほど確實だといふ言葉のあいまいなものはない。確實だと思つても敗けるし、レースが終つてみなければ確實だとは云へないところがある。そうであるのに確實だと云はなければ人が信用しないし、又確實だといふことをすぐ信じたがるのが競馬ファンである。そういうデマや大した根據のない情報に煩はされるのが一番不利である。

然し調教をよく見た者、研究者の深い者の鑑定は、なまじ浅い考へや研究しか出来ないもの(つまり半可通の者)より餘程確實性があるわけであるから大いに参考にした方がよい。五頭の出走馬に乗る五人の騎手にきいても、やはり勝つ馬がわからないほど競馬は難かしいものであるから、單なる人氣に左右されて損をするのはつまらないことである。

二十五、騎手の優劣と觀察

騎手の優劣によつて、レースが白熱するし、段違ひの一方的なレースとなることもある。また勝てる馬も負けてしまふし、勝味のない馬も勝てることもあることは前に書いたが、騎手の癖を見ぬいて、その馬券を買つて穴をとつたなどといふ挿話もある。よく岩下（密政）君が乗つて勝つときには、馬場に入つて審判臺の前までくる間に、顎ひげをぬいてゐるといふことを知つてゐて、岩下君の乗る馬を注意して買つてゐたといふ人があつた。これなどは面白いところを發見したものだ。

小西君が始めてダービーをとつたときは、その緊張で顔が蒼白になつてゐた。セントライトに乗つて、新しいあの紫と黄と赤の鮮やかな加藤雄策氏の勝負服を着て、ぬけるやうに白いゼツケンをつけて手綱を握つてゐたが、あの斷然たる強味をもつたセントライトで九分の勝味があつたのに、緊張して顔色が蒼かつた。その位であるから、普通のレースでも、祕かに勝てると思ふやうな時には緊張して顔色も變ることがあらう。それなのに、岩下君は馬の上で、曳馬場から本馬

場に出てゆく間に平然と、或はうそぶいて、顎ひげをぬいてゐる。そう落ついてゐるときにはきつと勝つとめぼしをつけるのである。

阿部正君もどつちかといふと馬の上でいやに澄したやうに、しかも心のうちでは今日は勝てると得意さをほめかしてゐる時には勝つた。反對に石毛君などは今日は勝つといふときには鞍から尻をもちあげて、ぐつと手綱を締めて注意しながら、ダクでスタートのそばまで行つたり、キヤンターで行くにしても、あまり無理をしないで行つたり、かなり氣をつけて乗つて行つた。大體誰でも勝てるやうな時には本馬場に入つてから非常に慎重に馬に頼むぞといふやうな大切をとつてゐるやうにするものである。ダクにしてもキヤンターにしても決して無茶にはやらないものだ。さういふ時には勝つものである。

だから曳馬場で馬丁から濡れた雑布をとつて鞍を濡らせたり、手綱を濡らせたりしてゐるのを見て今日は全力をあげるぞと見ぬくときもある。御賞典とか、ダービーとかの特別な大レースではどの馬もやるから判断がつかないが、普通のレースや特ハンなどのめぼしい馬は、そんなところにも自信や勝氣を見せることがある。然しそんなこともあまり神経質に頼つてはいけない。一人の調教師がやるのを見て、それで判断できる時はよいが、同じレース（特別なレース時など）

で三人も四人もの調教師が同じやうに腹帯をしめたり、或は騎手が誰も彼も手綱を濡らせたりすれば、どれを買つてよいかわからなくなるからである。

曳馬場から本馬場に出る間、よく騎手が、あぶみで馬の腹を軽く押ししたり、顎で前をしゃくつたり、一寸鞭を後へやつたりすることがある。この騎手の相圖をどこかの蔭で待つてゐるファンが見て穴場へとんでゆくことがある。曳馬場で馬が廻つてゐる間、そうして騎手が乗つて一番から順に歩き初めたとき、その間の氣配を見てこれだと教へるのであるが、顎をしゃくつた時は前の馬、あぶみで蹴つたときは自分の馬、鞭を一寸後にのばしたときは後の馬だといふ合圖である。これは豫め前を教へた馬はどれ、鞭を後へやつたときは後のどの馬と打合せがしてあつて、自分の馬を中心にあとさきの馬の三頭のうちの氣配のよい勝味のあるのを教へる合圖である。さうして教へつても必ず勝つてるとは云へない。

ずつと昔の競馬で、或る騎手が自分の馬が勝つといふレースに出る時、ファンにその馬券を買つて貰つて、それを持つて馬に乗りスタートを切つて、力戦つとめたが三分三厘を過ぎたとき大勢決して遂に敗けてしまつたので、癪に障つて、その馬券を馬の上から撒き捨てたといふ話がある。ファンに俺の馬を買へ、大丈夫だからと云つて買はせる。次手に俺の分も買つてくれ、と云

つて頼む、ファンは教へてくれた騎手のために馬券を四五枚買つて、それを曳馬場で騎手が騎乗を待つてゐる間に巧妙な方法で渡す、こうして確かに買つてやつたといふことを實證すると共に、だから勝つてくれと力をつけ確信をもたせるのである。

馬券を渡しておけばきつと一生懸命にやつて勝つてくれるだらう。勝てば穴だし、お前も儲かるのだぞ、と言外に慾と道づれの確信をもたせ激勵をするのである。ところが、あては外れて負けてしまつた。騎手先生くやしませに馬券をまいたといふのである。これはもう引退したが、かなりの老年になるまで乗つてゐたS騎手の話である。S騎手にはまた鼻吹をうたひながら勝つたといふ挿話もある。重量四十何キロかで、五十一二キロでも乗れる。小柄であぶみを短くして乗るために、ラチ(木柵)すれすれまで馬を内枠にびつたりくつつけて走らせることが出来るといふ騎手であつた。内枠にびつたりくつつけて走れば、インコースは、絶対に他の馬にとられない。

馬の足がラチにぶつかると思ふほど内にびつたりくつつければ、外の馬は、その内の馬よりは何米か多く走らなければならぬし、それだけ努力もするし、時計もかゝるわけである。その外の馬に比べれば、内枠の馬は千八百なら、びつたり千八百米走ればいゝので勝味のある馬なら

樂に勝てるわけである。こんな騎手は他にはゐなかつた。又A騎手は鞭を使ふのが巧みで、ゴール直前で鞭を入れたら、馬はそれで最大のスピードを出して勝つといふのである。競り合つて頭を揃へてゐる時、鞭を入れて、あぶみを入れて、絞り出すやうに馬を走らせ鼻だけ勝つたといふやうなレースをしたこともある。こういう騎手が鞭を持つて乗るか拍車をつけてゐるかといふことなども鑑定の目ぼしになるわけで、鞭を持つたら今日は勝てるぞと判断するのである。

中には鞭を入れると馬がとまつてしまふかと思ふほど鞭の拙い騎手もあり、絶対に鞭を使はない騎手もゐる。大久保龜君などは手綱さばきがきれいで、手綱をしごきながら、手が後ろにひかれたとき同時に鞭を入れるといふこまかい乗り方をしてゐた。大抵のものは鞭を入れる時には左手で手綱をもつた右手で鞭を入れる、大きく右手を後ろに伸ばして馬の尻を打つ、そうすれば手綱が遊んでしまふ。手綱をしぼるだけで馬は走るのだが、それが浮いては馬は走れない、それを手綱でしごきながら同時に鞭を入れるのであるから馬はぐんぐん伸びてゆく、そういう乗り方をした。實に鮮やかなものである。そういう鮮やかな乗り方をした騎手は、仲住達、石毛、二本柳勇、大久保龜、若いところでは阿部正、中村廣、二本柳俊などである。武田文君なども相當巧い方であつた。こういう騎手の乗り方の研究、癖など知つてゐれば何かの役に立つものである。

二、競馬禁止後二年間

昭和十八年十二月の宮崎競馬を辛うじて終了した競馬は、十九年春から全く禁止され、東京競馬場、京都競馬場の二ヶ所で能力検定競馬を行つてゐたが（馬券を發賣せず、各振興會員の所有馬の競馬で賞金はあつた）これも中止のやむなきに至つて、振興會員の所有馬は日本競馬會が買上げ、四歳馬、五歳馬を東北、關東、北海道、九州の四ヶ所に移して能力検定を行つてゐた。

この四ヶ所の日本競馬會支所に繋養されてゐたサラブレッドは後に四歳馬のみとなつたが、東北、關東、北海道支所に配置された調教師、騎手は次の通りで、この禁止二ヶ年半の動勢をうかがひ知ることが出来る。

日本競馬會東北支所（岩手縣岩手郡瀧澤村東北種馬育成所集子分厩）

調教師、尾形藤吉、大久保房松、茂木爲二郎、上村大次郎、高木良三、大久保石松、小林三

雄三

騎手、田中康三、松山吉三郎、中川義見、吉田（尾形厩舎）大橋明、鈴木新平、梅垣清（大

久保房厩舎）鴨田次男、目時重方（茂木厩舎）小西喜藏、蛭名武五郎、上村昭（上村厩舎）

古賀嘉藏、石澤秀二、高木直（高木厩舎）八木澤勝美、井上由男、大久保吉（大久保石厩

舎）小林稔、宇都宮徳義（小林三厩舎）

東北支所は岩手、青森等東北地域にて生産されたサラブレッド四歳馬四十四頭を一哩馬場に於て調教してゐた

日本競馬會關東支所（栃木縣河内郡委川村元の日本競馬會宇都宮牧場、元アイザック牧場）

調教師、田中和一郎、鈴木信太郎、田村仁三郎

騎手、野平裕司、遠藤誠一（田中厩舎）宮澤今朝太郎（田村厩舎）荒木靜雄、野坂明、西山

正郎、小日山逸雄、今津福松（鈴木厩舎）

關東支所は栃木、千葉等關東地域の生産馬二十四頭を調教してゐた。

日本競馬會北海道支所（北海道釧路町）

調教師、武平三、小川佐助、久保田彦之、増本

騎手、本田昌雄、橋本輝雄、石川善平

北海道産馬四十頭（外に未收容二十頭あり）を調教してゐた。

一方東京方面では府中に輓曳整備所が設置され専ら輸送方面の事業に従つてゐた。この所長は元スターターであつた木村武二氏、出張所長は調教師藤本富良君である。この府中の輓曳整備

所その他に、近郊に各支部が設置され、調教師騎手が配置された。

府中支所には藤本富良のほか柴田恒次郎、佐藤久彌等の調教師がをり、騎手では内藤潔、佐藤嘉秋、吉野勇、米谷政一、大南、岩瀬等の若手が働いてゐた。

代々木山谷の出張所は柴田寛治、大久保末吉、萩窪出張所は野平省三、上野出張所は東原玉造、古野南調教師に騎手の矢野幸夫、足立出張所には所長として岩佐宗五郎、松原出張所（元専修大學跡）には所長として調教師鈴木富一がをり、騎手の岩下密政が配屬され、江戸川浮田出張所に函館孫作、世田ヶ谷用賀町の馬事公苑には稲葉幸夫、川崎敬治郎がゐた。

阿部正太郎は競馬會から離れ、中村廣は兄の中村一雄と共に郷里長野に歸つて果樹園を經營し

二本柳俊夫は横濱の運送店の事務員となつたが、後進駐軍の乗馬の世話をしてゐる赤石孔と共に根岸競馬場に入つた。こゝに参加したのは小林勘次郎等二三人の若手騎手がゐた。

全く競馬會から引退した調教師は秋山辰治、乃川忠之丞、杉浦照明、佐藤順、廣井直三等で仲住達彌は應召して未だ復員せず（昭和二十一年四月現在）出征して復員しない騎手は松尾、井川勇、坂内、保田、渡邊正等である。關西の伊藤勝吉、木村寛、澁川景紀、諏訪佐市、元石吉太郎等大厩舎を經營してゐた調教師は何れも健在である。

その後昭和二十一年六月、春競馬が復活開催されるに及んで日本競馬會が認定した調教師は十二名であり、順次各出張所に配置された調教師騎手が復活することとなつた。

最初に復活した調教師は左の二十二名である。

尾形藤吉、田中和一郎、鈴木信太郎、大久保房松、田村仁三郎、高木良三、茂木爲二郎、久保田彦之、上村大次郎、川崎敬治郎、稻葉幸男、藤本富良（以上關東）
大久保石松、小林三雄三、武平三、小川佐助、伊藤勝吉、澁川景紀、美馬信次、新堂助次郎、坂本増本（以上、關西）

各支所で調教されてゐた馬は、能力検定をしてゐたのであるが、その他榮養状態、結膜、呼吸

脈搏、心臟状態等の生理審査をも行つてゐた。

昭和十九年春の能力検定の結果は次の通りである。

一六〇〇米（サラ）
四歳 一分四〇秒一
五歳 一分四八秒二
一八〇〇米
四歳 一分五五秒
五歳 一分五五秒二
二〇〇〇米
四歳 二分〇九秒一
五歳 二分〇八秒
二四〇〇米
四歳 二分三四秒二
五歳 二分三八秒

三二〇〇米

五歳 三分三五秒一

昭和二十年度春の検定成績は

一六〇〇米 シマステーツ (牝) 騎手小林稔 一分四四秒二

二四〇〇米 ヒトステーツ (牝) 騎手田中康 二分四〇秒四

アラブは

一六〇〇米 ニシクニ (牝) 騎手松山 一分五〇秒

二〇〇〇米 イネマサ (牡) 騎手大橋、ニシクニ (松山) 二分二二秒三

二十年度に検定されたサラ四歳馬の一着馬をあげると次の通りである。

トヨナダ (牝) 父月友、母スターダスト

ヒトステーツ (牝) 父ステーツマン、母第二デウオーニア

トキノコシ (牝) 父プリメロ、母マリーベター

シマステーツ (牝) 父ステーツマン、母アークロール

トキノギ (牝) 父プリメロ、母アステリモア

サトカゼ (牝) 父プリメロ、母第五フローリスト

トビサクラ (牝) 父プリメロ、母フライアスメード

ミネイケ (牝) 父ダイオライト、母鶴池

ミヨステーツ (牝) 父ステーツマン、母デヴオーニア

ウシシロ (牝) 父セフト、母白蓮

等で、競馬が停止された十九年春から、二十年の二ケ年間の検定状況はこれによつてほほろか
がひ知ることが出来る。十九年春に行はれた東京競馬場における能力検定競馬における第十三回
東京優駿競走はカイソウ (父月友、母第二デバウ) が断然他馬を引離して樂勝した。その後の競
走馬はサラブレッド、アラブ四歳馬を各支所において調教育成し、命脈を保つてきた。そして昭
和二十一年度のサラブレッド、アラブ四歳馬は元振興會員に抽籤配布され、二十一年度の春競馬
を行ふことになつたのである。抽籤は四月二十六日(サラ)四月三十日(アラブ)の兩日行はれた。

三、名馬物語

一、現在の種牡馬

かつて我國の競馬界に活躍した名馬は、その後どうしてゐるか、競馬ファンに幾シーズンか期待をかけられ、絶叫と聲援をおくられた名馬は今なほ健全であるか。

昭和十九年春から昭和二十一年五月まで空白になつた競馬、敗戦後の春を迎へて、競馬はどんな方向をとつて、どのやうな組織で開催されるか。六月から開催されると云ふ春競馬を前にして競馬を忘れ得ないファンは、競馬の開催を待ち焦れてゐると共に、かつて活躍した名馬はどこにどうしてゐるだらうか、蕃殖馬はどのやうな馬がゐるであらうか、それからそれへと、果しない

回想と共に知りたい消息の數々をもつてゐるだらう。

サラブレッドの生産は戦争中も戦争前と同様に繼續されてゐたが、産駒は競馬停止前のやうに六萬圓七萬圓といふやうな高値で購置されたものはなく、最高三萬圓で下總御料牧場、小岩井農場、若草牧場、東北牧場、その他千葉、東北、北海道産馬を日本競馬會が一手に購入し、これを各支所に配置した。そして競走馬の生産はこれによつて命脈を保つてきたのである。これは日本競馬會が、調教師、騎手の生活を擁護したと共に大きな功績であつた。現在その蕃殖、生産に大きな役割を果してゐる種牡馬は如何なる馬がゐるか、どの牧場にゐるか、その主なる種牡馬と所屬牧場を記してみやう。

若草牧場Ⅱクレタケ、トシシロ。

小岩井農場Ⅱセントライト、プリメロ、シアンモア。

日高種馬牧場Ⅱセフト、月友、クモハタ、トキノチカラ。

東北牧場Ⅱカプトヤマ。

奥羽種馬牧場Ⅱレイモンド。

大平牧場IIダツシング、ミナミホマレ、波藤（リヨウゴク）、（後波藤は他に移つた）
社臺牧場IIステーツマン、ハクリユウ。

トウルヌソルは病氣のため種付不能となる。

ダイオライトは下總御料牧場解散のため、千葉縣の下總畜産組合に拂ひ下げられた。

二、どんな種馬がよいか

これら種牡馬の産駒で、十九年、二十年の能力検定において優秀な成績を示してゐるのは、ステーツマン系、プリメロ系、ダイオライト系、セフト系、月友系等で、この血統馬は今後も相當の成績を示すものと思はれる。未知數ではあるが、セントライト、クモハタが種牡馬となつたが、どれほど優秀な産駒が送り出されるか、多大の期待がかけられる。これらの種牡馬のうちには我國の競馬界に活躍した名馬がゐるし、今後その名馬の血統をひいた産駒が競走馬として活躍する日もさう遠くはないであらう。

然し世に言ふ名馬とは如何なる條件を備へてゐるか、血統的に優秀であるといふことは第一條

件ではあるが、それはその血統をひいた多くの産駒が、實際の競走に出て連勝するといふ結果において判断される場合が多く、初めてトウルヌソルが下總牧場に輸入され、シアンモアが小岩井農場に輸入されて、トウルヌソル系、シアンモア系の産駒が出走した時はチャペルブラムプトン系の全盛時代であつて、この二頭の系統はファンには全く未知數とされてゐたが、チャペルブラムプトン老ひ、トウルヌソル系、シアンモア系の産駒が好成績を現はすに至つて、トウルヌソル、シアンモアの産駒は優秀であると思はれるに至つたのである。

現在のダイオライト、ステーツマン、セフト、月友の漸く全盛になつてきたのも同様である。然し種牡馬の競走成績によつて判断され、種牡馬との配合の良否を血統的に見ることが第一條件ではあるが、これと共に名馬と云はれる馬は、先づ我國では、東京優駿競走（明ヶ四歳馬が春季に於ける二千四百米の競走）の勝馬であること、帝室御賞典、或は各種の特別競走（例へば目黒記念二哩、中山記念四千米、農林省賞典大障碍等）或は特別ハンデ競走、優勝競走等の勝馬であることである。これらの競走成績が名馬としての資格を血統と共に裏書きするのである。

種牡馬となつたナスノ、ハクセツ、ハクリユウ、ハクコウ、カプトヤマ等は何れも競走成績に於て優秀であつた強豪である。そしてこれらの血統をうけついで産駒は又何れも非常な好成績を

示してゐる。最近種牡馬となつたクモハタ、セントライト、クレタケ、マルタケ、トキノチカラ
ダツシング、カミワカ、ミナミホマレ等もその競走成績及び血統に於いて名馬たる資格を充分に
具へてゐる馬である。

三、ダービーの勝馬とタイム

四歳の春、競馬界にデビューし、全国の四歳馬が覇を競ふ日本ダービーたる東京優駿競走こそ
は、先づその名馬たる資格を具へる大競走である。

この競走は、昭和六年春目黒競馬場に於いて始めて行はれ、三回目からは現在の府中にある東
京競馬場に於いて毎年春の特別レースとして行はれ、昭和十九年春まで三回を重ねること十三回
に及んだものである。

明ヶ二歳に於いて生産者が第一回の出場登録をなし、明ヶ三歳にも同様第二回登録し、四歳と
なつて馬主が第三回目の登録をするといふ段階を経て、最後に出走登録をするのである。

日本ダービーの勝馬を擧げるとは、日本の名馬をあげることにもなるので、第一回からの勝

馬を列記してみよう。

第一回 ワカタカ(牡) 函館、二分四五秒二(十九頭立、雨不良、昭和七年) 日高種馬牧場種牡
馬。

第二回 カプトヤマ(牡) 大久保房、二分四一秒レコード(十九頭立、晴重、昭和八年) 東北
牧場種牡馬。

第三回 フレーモア(牡) 大久保龜、二分四五秒(十頭立、晴重、昭和九年) 静岡伊藤牧場種
牡馬(種牡馬となりてブラオンジャックといへり)

第四回 ガヴァナー(牡) 井川爲、二分四二秒レコード(十一頭立、小雨重、昭和十年、斃
死)

第五回 トクマサ(牡) 伊藤正、二分四二秒一(十三頭立、晴重、昭和十一年) 朝鮮蘭谷牧場
種牡馬。

第六回 ヒサトモ(牝) 中島時、二分三三秒三レコード(十七頭立、晴良、昭和十二年) 浦河
宮崎牧場蕃殖馬。

第七回 スゲヌマ(牡) 中村廣、二分三三秒二レコード(十四頭立、晴良、昭和十三年) 青森

種馬所種牡馬。

第八回 クモハタ(牡)阿部正、二分三六秒一(二十頭立、小雨重、昭和十四年)日高種馬牧場種牡馬。

第九回 イエリユウ(牡)末吉清、二分三四秒一(二十四頭立、晴良、昭和十五年、斃死)

第十回 セントライト(牡)小西、二分四〇秒一(十六頭立、晴重、昭和十六年)小岩井農場種牡馬。

第十一回 ミナミホマレ(牡)佐藤邦、二分三三秒レコード(十七頭立、晴良、昭和十七年)大平牧場種牡馬。

第十二回 クリフジ(牝)前田長、二分三一秒四レコード(二十五頭立、晴良、昭和十八年)

日高種馬牧場蕃殖馬。

第十三回 カイソウ(牡)橋本輝、二分三九秒一(十八頭立、晴重、昭和十九年)京都にて輓馬となる。

これらの優駿競走の勝馬に匹敵する名馬もゐる。それはダービーには敗れたが、その後の特別レースに於いてダービー馬を敗り大レースの勝馬となり優勝して好成績を示した血統馬である。

ハツピーマイト、トキノチカラ、ヘンウン、パプステツド、アヅマダケ、ダツシング、ブーム、クモキク、ガイカ、アカインダケ等が現在種牡馬となつてゐるが、何れも大競走の勝馬であり、或は帝室御賞典、農林賞典に勝つた馬であり、名馬の血統をうけついでた馬である。以上これらの名馬を過去の競走成績、血統をあげて回想し、競馬華やかなりし頃の思ひ出の資料としやう。

四、誘導馬タツクモ

岩手山秋はふもとの三方の

野に満つる蟲を何と聽くらむ

と石川啄木の歌つた岩手山の雪が溶けて、春の光が小岩井農場の若草の上に輝くと、二歳馬、三歳馬の運動がだんだん活潑になる。その二歳馬の追ひ運動に誘導馬として、颯爽と先頭を切つて驅けてゆく栗毛の逞ましい馬がゐる。それは、アラブ競走で空前にして又絶後であらうといふ華やかな成績を残した逸駿タツクモ號の雄姿である。

タツクモ號は(父シリヤ・アラ・ファヘツド、母は内洋サンダー)阪神新抽として昭和十二年

春阪神競馬の第一日に出走し、スタートに出遅れて約百五十米も後から出て二千米を力走し、シユクフクを追つて遂に及ばず、四分の三馬身の差で二著となつたほか、十三年春には呼馬に挑戦して目黒記念二哩一分(三千四百米)に出走し、強豪アヅマダケの三分四〇秒二に九馬身四分の一で三著となつたのが惨敗の記録である。この時の二著はフェアモアで、タツクモのあとには、頸の差でツキヤスが迫つたが及ばず、イワキカブト、ハセパーク、ピユアソールなどの呼馬の強豪を堂々と破つてファンを驚嘆せしめた。

十二年の春阪神では二日目に千八百米を二分一秒三といふコードで勝つたが、以後連戦連勝し十三年秋東京競馬で優勝して引退するまで二年間四シーズンに十九勝した。

タツクモをしてその名をファンに強く刻みつけたのは横濱の優勝レースであつた。阪神の優勝をとつて直ちに引あげてきたタツクモは、横濱競馬に出走し、初日古馬に伍して二千二百米を二分三〇秒一(騎手石毛彦次郎)で樂勝した。この時は阪神新抽の優勝馬ではあるし、他に強敵もゐず、その駿足がファンに傳はつてゐたので人氣となり、その期待に背かず快勝したのであるが優勝レースには關西の強豪キイナンリュウがゐたので人氣はキイナンリュウに集注し、(キイナンリュウは關西では連勝してゐてこれを破る馬はゐないと云はれ、勝つたとき全速を出したこと

がないと云はれてゐた)馬券は單千九百七票、複二千四百六十二票といふ絶對人氣であつた。

このキイナンリュウを破つたのである。しかもキイナンリュウが全速力を出して力走するのを押へて、一馬身四分の三も離したのである。

この優勝に備へるための調教は調教師鈴木信太郎氏によつて慎重に行はれた。筆者はこの調教を見て驚嘆した一人である。根岸の優勝も迫つた二日前の午後、根岸の調教馬場で調教する二頭の馬があつた。インコースをとつてゐるのがタツクモ(騎乗鈴木信)その外を走つてゐるのが呼馬のマークイス(騎乗石毛)である。初めは軽いダクとキャンターで一周したが、第四コーナーあたりから早めのキャンターに移り、審判臺前を通るときはかなりの早さが加はつてゐた。外を走るマークイスの脚いろはさすがに冴えて悠々たるものがあつたが、それよりも驚いたのはそのマークイスに併走してゐるタツクモの悠々たる遜色のない脚いろである。マークイスの脚いろを細心の注意をはらつてみながら鈴木信の手綱は押へたまゝである。これは容易ならぬ馬であると驚異の眼を見はつたのである。

その時の調教にはストップ・ウオッチに現はれるほどの早いタイムは出さなかつたが、マークイスのかなりな力走に悠々と併走するタツクモは呼馬と競走しても遜色のない脚色を見せたので

ある。そして遂に不敗の強豪キイナンリュウを破り、單勝百四十二圓、複勝四十六圓といふ好配當をつけたのであつた。雨の不良馬場にも強く、滑るやうな重馬場にも強かつた。

アラブにはまた相當強い馬がゐた。キイナンリュウを始めとして、菊池寛氏が

かりそめにひきたる駒は龍種にてトキノハナとは咲きにけるかな

と歌つて祝福したトキノハナ號や、タストーン、スモールドウター、イサム、ドラボー、ゴリュウカップ、カンロ、サンゴ、レイテウ、ラモナ、ミヤチダケ、アイデアル、リアル等フアンの血を湧かした名馬も多い。然しタツクモ程めざましい活躍をした馬、呼馬を破つた馬は殆どない。

シアンモア系、プリメロ系等將來名馬として活躍すべき二歳仔をひきつれて、タツクモはあの廣いクローバーの原を、先輩顔をして駆け廻つてゐる。小岩井農場の誘導馬タツクモ、名馬の餘生としては恵まれた日々を送つてゐると云つていいであらう。

二、クモハタと惜しむべき加藤氏の死

クモハタ號を名馬の中に數へることは誰も異存はあるまい。クモハタもトウルヌル系の幾頭かの名馬のうちの一頭である。母は米サ星旗で、クレオパトラトマスの異父弟、リブルスの全弟である。厩舎は東京競馬場所屬の田中和一郎厩舎、初出走から引退まで四シーズン十七回を全部阿部正騎手が乗つてゐた。馬主加藤雄策氏は、

「四シーズンの競走馬生活中馬主としての僕は一度もモクハタの競走を楽しんだことがない。勿論勝敗に對する心配を意味するものではない。満足或は満足に近いコンディションでクモハタが出場した事が一度もなかつたのだ。僕の所有馬となる半年以上前、三歳馬になつた許りの頃、下總牧場にクモハタを始めて見た時僕はほんとうに目を瞠つた。『これこそ不世出の名馬だらう』と宮内省の役人連中に洩らした位だ。

三歳駒を可なり多く見學した經驗のある僕が、あれだけの馬は嘗て見たことがないと、周圍の馬好きに言ふたことは再三ではない。『僕も馬主としての思ひ出にあの馬だけは何とかして手に入れ度いものだ』と心密かに秋の驛市を期待したものだ。僕が三歳駒を購入した經驗の中で、クモハタが僕の手へ落ちた位嬉しかつた事はない。

そのクモハタが、恐らく不世出の名馬である筈のクモハタが、競走馬として不出世に終つて仕

舞つた事は馬主として實に淋しい限りだ。併しこの面倒なクモハタを曲りなりにも競走馬として育ててくれた調教師、騎手、馬丁諸君には實に涙と共に感謝して居る次第だ。これから先のクモハタが種牡馬としてどんな産駒をおくるかは未知数だが、クモハタの仔の何頭か何十頭かを僕が購入する運命にあることを期待してゐる」と書いた。

加藤氏が告白してゐるやうに、クモハタは出走毎にその健康を氣遣はれてゐた。それは肩に疾患があつて十分に調教が出来なかつたからである。昭和十四年春東京の新呼として初日に出走したがシチリダケに敗れて二着となり、三日目に勝つて日本ダービーに備へた。然し調教に少し早く追ふと肩を押へ氣味に歩くといふ不安があつた。ダービーの前日も調子が悪く、當日もその出走さへ氣遣はれてゐたが、松葉博士の施した注射が効果があつたのか、出走すると本來の快速を出して、二千四百米を二分三六秒一といふタイムで勝ち、單勝配當二百圓の大穴を出した。クモハタが勝つたとき馬丁君は檢量室の前でクモハタの頭を抱いて嬉し泣きに泣いてゐた。

昭和十五年の春の阪神競馬の帝室御賞典競走に出走したがトキノチカラに敗れて三着、秋の東京の御賞典にも出走したが、ロツキーマアに敗れて二着、遂に御賞典の勝馬とならなかつたが、十四年の秋には東京で特ハン、優勝をとり、十五年春には東京の五歳馬特別、古呼優勝と連勝し

た。

クモハタは東京優駿競走に快勝し、引退するまでに九勝、二著五回、三著三回、著外四回といふ成績を示し、賞金七萬四千四百十四圓を得て昭和十六年春、日高種馬牧場に種牡馬となり、現在その産駒を出しつゝあり、今年（昭和二十一年）の四歳馬にもクモハタの仔が二頭出てゐる。一頭はハツクモ（母優照）、もう一頭は日本富士（母第六ホイスリングバイン）である。クモハタの仔を何頭か手に入れることに希望をもつてゐた加藤雄策氏は昨年戦災のため、赤坂で猛火と煙に包まれて死んでしまつた。競馬界にとつて實に惜しむべき馬主を失つてしまつた。

東京競馬場はホームグラウンドであり、ラツキーマアな左廻馬場であつて、東京馬場ではよく成績をあげたが、十五年秋には再び五歳馬特別と御賞典に出て何れも二著、遂ひにこの二度の出走を最後として引退したのである。

六、幸運のトキノチカラ

クモハタと同時に種牡馬となつたトキノチカラ號もトウルヌソルの仔である。母は米サラ星谷で、クモハタと同じに日高の種馬牧場に繋養された。

競走成績は一著十一回、二著八回、三著四回、著外六回で、計二十九回出走してゐる。昭和十四年春京都の新呼として初出走し、初日に勝つて優勝し、直ちに阪神競馬に出て二著二回、六日目のハンデに勝つて、古呼優勝には斷然たる勝ちぶりを示して、新呼優勝、古呼優勝と幸運なスタートを切つた。

トキノチカラの強豪振りを示したのは昭和十五年春で、阪神競馬の三日目の阪神記念三千四百米に三分三九秒一といふ新記録で快勝し、續いて六日目の帝室御賞典競走に三分二五秒二(二哩)の新記録で、強豪ロツキーモアー、クモハタ(何れも同厩舎)及び關西の雄マルタケを破つて榮冠を得た。

この時のレースは實に素晴らしい大レースで、關西の雄マルタケがスタートダツシュよく先頭に立つたのを、トキノチカラ、ロツキーモアー、クモハタと追ひ、二周目向ふ正面の直線コースのやゝ上り坂にかゝつたとき、先頭のマルタケをトキノチカラ一氣に追はれてぬき先頭に立ち、これを今度はマルタケ、ロツキー、クモハタと追ひ、直線にかゝるやロツキー、クモハタ力走して遂にマルタケを押へてしまつた。トキノチカラは先頭に立つたまま脚いろも鮮やかに最後の力走を試みて、逃げ切つてしまつたのである。しかもこのトキノチカラは阪神記念二哩二分といふ

長距離を走つてレコードで勝つてゐるのである。この大レースまでに僅かに二三日の休養をしただけで、再び二哩といふ長距離をレコードで快勝したのである。トキノチカラがこの時絶好のコンディションにあつたことは言ふまでもないが、驚くべき實力のある馬であつた。しかもこの馬は後肢に難點があり、東京優駿競走にも生産者は登録しなかつたのである。その難點も大して災ひせず、好成績を収めたのは血統がものを言つたのか、實に幸運な競走生活を送つて、その成績と血統を買はれて種牡馬となつたのである。

馬主は菊池寛氏、調教師は田中和一郎、騎手は岩下、小西の兩君が乗つてゐたが、十一勝のうち小西七勝、岩下四勝で、阪神記念、御賞典とともに岩下君が乗つて勝つた。御賞典の時はロツキーモアーに小西、クモハタに阿部正が乗り同厩舎の兄弟騎手が覇を争つたのである。トキノチカラは調教師田中和一郎氏が見出して菊池氏にすすめた比較的安い馬であつた。

トキノチカラの仔も今年の四歳馬の中にゐる。下河邊牧場産(北海道浦河に牧場があるが、最近千葉縣印旛郡遠山村のベルエア牧場を買ひこにも牧場を經營してゐる)の、アスエ(大力)(母第二タイラツクキン)は有望視されてゐる。トキノチカラが雨の不良馬場にも重馬場にも良馬場にも強かつたから、その産駒も不良馬場を苦にしないと思はれる。

昭和十五年春、阪神で御賞典をとつて、直ちに東京競馬に移り、五歳馬特別に出走したが、競走の途中、約二、三キロ程走つて故障を生じ、レースを中止し、そのまま競走場裡から去り、脚部に難点があるにも拘らず幸運にも種牡馬となつたのである。

七、ファインモア號

「ファインモア號は自分が馬に親しんで十年間始めて持つ事の出来た一世の名馬である。昭和十二年春、幾多のホープを抱きつつ中山に出走せしめたが不幸二著し、後脚部を患ひ優駿競走にも惨敗し、その秋に至つて始めて實力を發揮したので、勝利度数は八勝に過ぎないが、大レースにおいてよく二著し、十三年秋東京の五歳特別、十四年春中山記念においては美事に勝利を得た殊に五歳特別においては一世の駿足を謳はれたヒサトモ、フェアモアの二頭を破つて満場を湧かしたものである。但し自分の永久に忘れ得ぬ一戦は、十四年秋東京における帝室御賞典競走でテツモン號とゴール直前火花の散る競り合ひの結果、鼻だけ負けたとはいへ、タイムは日本最高記録（註、三千二百米三分二秒四）であつた。正にこの馬の脚力を保證する一戦で、且つその際の此の馬のベストコンディションを裏書きするものであつた。十五年に至つて今一度帝室御賞典

をと思つたがその優秀なる馬格と能力により國有種牡馬に選定せられたに依つて潔よく引退せしめたが、自分が此の馬を持ち得た事は實に一生の誇りと感ずる次第である」

とファインモアの所有者である大川義雄氏は自著『名駿競走記録』に書いてゐる。

ファインモア號はシアンモア系で、母は内サラ、アストラル。カプトヤマ、ガヴァナーの全弟である。昭和十二年春中山の二日目に初出走し、千八百米を一分五六秒一といふ優秀なタイムを出して勝つたアチマスに頭の差で二著となり、そのまま秋まで待機して秋に二勝し、十三年春秋に四勝し、十四年春に二勝し、秋御賞典に出走して二著となり、六歳で種馬となつたのである。現在は千葉縣遠山村の下河邊牧場に繋養されてゐるが、今年の四歳馬にその産駒を出してゐる。それは頼ノ浦（母、波友）牝、綾浪（母アヤリース）牝の二頭である。カプトヤマの産駒がかなり優秀な成績をあげてゐるから、その全兄弟であるファインモアの産駒も必ず好成绩を現はすものと期待される。

八、血統馬ダツシング

昭和十三年春中山の新呼として初日に出走し、ダービーの有望な候補馬として評判であつた夕

エヤマ、スゲヌマを破つて快勝し（この年の優駿競走はスゲヌマが制覇した）優勝競走には二著馬を大差に離して樂勝したダツシング。その後故障となつて十四年秋中山で漸く一勝し、遂に三勝にして競走場裡を去つて種牡馬となつたダツシング。この馬も忘れ得ぬ名馬の一頭である。ダツシングは實に美しい蘆毛の馬で、馬格も堂々としてゐるし、その快速は計り知れないものがあった。

中山の初日タエヤマを頸の差で敗つたとは云へ、この時のタエヤマは根限りの力走をし、スゲヌマも全力を盡して迫つた。ダツシングがタエヤマ、スゲヌマをかはした時、そのスピードは驚くべきものであつたとは、タエヤマの騎手赤石、スゲヌマの騎手中村廣君が口を揃へて驚嘆してゐたし、ダツシングに乗つてゐた小西騎手も、どこへ持つてゆかれるかと思ふほど物凄いスピードを出す馬だと云つてゐた。

もし脚部に故障が無ければ（ダツシングの脚部を治療する爲に田中厩舎ではラヂウムまで買つて治療の努力を惜しまなかつた）東京優駿は樂勝したであらうし、驚異的なレコードを作つたのではないかと思はれる。

十三年夏から十四年の秋まで約一年半、小岩井の牧場に放牧したり、その間小西君が調教に小

岩井まで行つたりして、非常に苦心をしたが、遂に中山に出走して、二回敗れ、三回目に漸く勝つて引退した。

血統は父がシアンモア、母はムシユロンであつて、ベンチャミンの弟である。現在は大平牧場に種牡馬として繋養されてゐる。この馬は始め坂本清五郎氏の持馬で、引退してからは坂本牧場で種付してゐたが、同牧場をやめたとき大平牧場に移つたのである。この優秀馬の産駒こそ、母系の配合よろしきを得れば必ず優秀な成績を現はすであらう。

九、母系と優秀な産駒

種牡馬ガロンからナスノ（母は常夏）、ナスタカ（母は初花）、ナスカゼ（母常夏）、アラタマ（母第二エナモールド）、ケンコン（母第四フラストレート）、サンシヤイン（母第八アストニシメント）などの名馬が出たやうに、チャペルブルンプトン（父として、ハクシユン（母エリツプス）、キタノホシ（母第四パレード）、ケンシク（母第二ミラノー）、ケンシユン（母種家）ワカクサ（母種秀）、その他オールマイン、ヤママサ、ケンキン、ハクヨシ、ヤマヤス、アスコツト等の名馬が出た。そしてトウルヌソルを父とする産駒からも實に多くの名馬が出た。これは

トウルヌソルに配するに名種牝馬を得た結果であつて、父系の優秀性と共に母系の優秀性が配されなければ名馬は生れないといふことを實證するものである。

いまトウルヌソル系の名馬をあげて見やう。

ワカタカ（母は種信）、アサヤス（母種康）、アサハギ（母種道）、ロツクライト（母種光）
ワカミチ（母種道）、ハツピーランド（母種總）、スパーション（母華時）、キンチャン（母種正）、スモールジャツク（母華時）、アトランタ（母レツドウイング）、ツキマサ（母種正）、サンダーランド（母星若）、トクマサ（母種正）、リブルス（母星旗）、ピユアソール（母ピユアゴールド）、ヒサニシキ（母博錦）、ツキヤス（母種康）、リヨウゴク（母賢藤）、ヒサトモ（母星友）、アヅマダケ（母星濱）、クモハタ（母星旗）、クモキク（母賢菊）、トキノチカラ（母星谷）等である。このほかトウルヌソル系の産駒で相當の成績を示した馬も勿論かなり多い

これらの名馬と共に忘れ難いのはハツピーマイルトである。

ハツピーマイルト（父トウルヌソル、母賢藤）はリヨウゴクの全弟で、母の賢藤の父はチャペルブラムプトン、母は種光である。競走馬の父系と共に母系を研究し、その母系を研究することは血統を調べる唯一の鍵である。

賢藤の母の種光からはロツクライトが出てゐるし、父系のチャペルは優秀な種牝馬として多くの名馬を出してゐることは前述の通りである。名馬クモハタを出した星旗からは、クレオパトラトマス、リブナスといふ名馬が出てゐるし、種正からはキンチャン、ツキマサ、トクマサ等といふ名馬が出てゐる。この父系母系を研究して、その産駒の血統的優劣をその初出走の前に知る事が、競走馬の優劣を決定する一つの方法であることをこの機會に披瀝して置く。

さてハツピーマイルトは昭和十二年の春、中山競馬に出走し、三日目一勝して、その優勝レースにはヒサトモの二分二秒四（距離二千二百米）といふレコードに一馬身の差で二著となつた。従つて優駿競走には第一の人氣が出た。ヒサトモは牝馬であるし、ダービーには一回から五回まで何れも牡馬が勝つてゐたので、中山でヒサトモに敗れたとは云へ、牡馬の強味を二千四百米といふ、四歳馬にとつて初めての長距離で發揮するであらうと期待されたのである。然しダービーには不幸にして第一コーナーを曲る前、頭絡（手綱で頭の方にかけてある部分）が外れて遂に全力をあげて快走することが出来ず惨敗した。この頭絡が外れたのは他の馬にスタート直後ぶつつけられてその物凄く反動で外れたので、手綱が浮いてしまつたのに騎手秋山辰はよくこの馬を御して惨敗はしたがゴールに入つてきた。

この第六次ダービーは初めて牝馬ヒサトモが逃げ切つて快勝したのである。然しハッピーマイトは十二年の秋には東京競馬で初日二千三百米を二分二六秒三で一勝し、三日目農林賞典三千二百米を三分二七秒一で快勝し、六日目御賞典競走二千六百米を二分四八秒一で、フェアモア、ヒサトモを破つて榮冠を得、一競馬で四歳馬が三連勝した(しかも二つの大競走に勝つといふ)記録を作つた。十四年秋六歳で中山競馬に出走し七日目に二千二百米を二分二一秒二でヒサモトのレコードを破り、次の日の優勝に二千六百米を美事に逃げ切つて快勝し、競馬界を退いて栃木種馬所に種牡馬として餘生を送ることになつた。

十、何れ劣らぬアラブの五頭

アラブ系抽籤馬でタツクモが名馬中の名馬であつたことは既に書いたが、その他フアンの記憶にある馬としては、アイデアル、キンギン、クインホース、チーグレース、ミヤチダケ、レイテウ、メイジン、ラモナ、アマツカゼ、ダブリン、ミツカゼ、サンゴ、タマキヨウト、カンロ、ゴリユウカツプ、ドラポー、トキノハナ、アキヅキ、キイナンリュウ、スモールドウター、ソザンドウ、モナンフアンなどであるが、このうちでもアイデアル、カンロ、トキノハナ、ゴリユウカ

ツプ、キイナンリュウは出走當時恰も敵なしの感があつたほど勝ちつゞけてゐた。時にはハンデキヤツプの関係や、馬場の状態に於いて、トキノハナがタストーンに敗れ、ゴリユウカツプがカンロを破つたこともあつたが、アイデアル以下五頭の馬は何れを優るとも云ひ難い強味があつた。

カンロは萬青といふ名で既に大平牧場にあつて多くの産駒を出してゐたが、現在は八戸馬匹組合で種馬として毎年種付してゐる。今年(昭和二十一年)既に十七歳である。

トキノハナは昭和九年秋の中山の新抽で、二日目に一勝し、八日目優勝して、新抽としての最高のスタートをした。翌十年の秋には中山の特ハンで二千米を二分十二秒三のレコードを出したソザンドウに鼻の微差で敗れ、優勝戦にはゴリユウカツプ、テルトモ、カンロに敗れて四著となり、横濱の日本レースではアラブハンデ二千米に出て、七十二キロを負ひ、ゴリユウカツプの二分十二秒二といふ非常に良いタイムに頸の勝負をし、優勝では二千四百米を二分五五秒一(馬場重)でカンロを三馬身離して優勝した。

その秋東京では、特ハン二千米で七十五キロのカンロにトキノハナ七十四キロで五馬身敗れてゐる。タイムは二分十二秒一であつた。

ゴリユウカツプはアラブの血量六・二五でその強味は斷然たるものがあつた。トキノハナの父

は内ゾア良屯、母は内洋ブレペリーで牝、十九勝した。ゴリュウカツブは父白サラ、フェーブル母アア雑アラフジ牝、二十三勝。カンロはサラ、オールグリーン、母白アア、ペガシん牝、十九勝。キイナンリユウは父サラ、ペリオン、母は内ギト、モイノー牝で二十勝してゐる。

キイナンリユウは猛聲といふ血統名で九州宮崎郡清武村で種牡馬となつたが昭和二十年廢馬となつた。トキノハナは千明牧場にゐたが最近五戸にゐて蕃殖馬となつてゐるし、ゴリュウカツブは日高の個人牧場で蕃殖馬となつてゐる。

これらのアラブの名馬の出たあとは、やや傑出した馬が出なかつたが、昭和十七、八年に出たバラヒカリ、バラアキラ、バラミドロの三頭は目覺しく活躍した。何れも大川義雄氏の持馬で、府中の藤本富良厩舎の管理馬であつた。モナンファン、ケイホースなど素晴らしい快速馬を調教した藤本富良君の調教によつてその本領を發揮したもので、藤本厩舎の三バラと云へば有名で、この三バラのうちの何れか一頭が出れば、とうてい勝味がないといはれたのである。

バラヒカリは十七年秋の横濱の新抽で父はバラツケー、母はアア榮坤、バラアキラは十七年秋の中山新抽、父はバラツケー、母は寶玉である。十五勝したマルカブの全妹で、スモールキング（父はエルバルク）、ミスターコウベの異父妹である。バラミドロは十八年春の中山新抽で、父

は同じバラツケー、母はアラ系線である。

バラアキラは十八年の春は五勝、秋に阪神で特ハン二千米を二分十二秒二で勝ち、六日目二千三百米を二分三十三秒二のレコードで勝ち、京都で二勝し、中山に移つて二千二百米を二分二十四秒四のレコードで勝つて五勝してゐる。

バラヒカリは十八年に障碍に入つたが、初障碍で東京で優勝し、中山で二勝し、四勝するといふ好成绩で満量となつて引退した。

バラミドロは中山で四日目に一勝して、優勝するといふスタートをして、東京で一勝し、障碍に入つてからも勝ちつづけた。この三頭は何れも牝馬で、それぞれ北海道日高、浦河の生産者の牧場にかへり、蕃殖馬となつてゐる。ヒカリとアキラは今年八歳、ミドロは七歳である。

十一、無名のカイソウ

昭和十九年春季から行はれた能力検定競走は競馬ファンから絶縁された競馬であつた。その十九年春の東京競馬場で行つた能力検定競走にも日本ダービーたる東京優駿競走があり、十九頭の優駿が覇を競つた。この競走に出走した馬のうちで血統的に優秀であり、その傑出した能力を認

められてゐたのは小岩井産のクリアヅマであつた。クリアヅマは栗林友二氏所有、田中和一郎厩舎管理、調教には小西騎手があたつてゐた。プリメロに第四ウエツディングサーフで、ブランドソールの全弟である。購置価格は五萬五千圓、普通の競馬なら當然フアンの人氣が集まる馬であつた。それが關西から東上してきた無名の駿足馬カイソウに問題なく敗れてしまつた。この第十回東京優駿の勝馬カイソウは父が月友、母は輕半第二ベボウ（第二ベボウは競走馬ロンプで、昭和四年春小倉の新呼として出走し十九勝、帝室御賞典の勝馬である）牡で、北海道錦多峰牧場産、有松鐵造氏が九千二百圓で購入した所謂安馬である。

カイソウは京都の檢定競走で二日目三級レースでヤマトマスラオの二著、三日目同じ三級競走千六百米で一勝し、呼四歳二千米レースに二分九秒で勝ち、四歳特別二千米で六十五キロを負ひ二分八秒三で勝つて、東京競馬場に来て、六日目に呼駈四歳二千四百でクリアヅマを大差で敗つて優駿競走に出たのである。この日は雨あがりの重馬場でクリアヅマには不利であり、カイソウには恵まれた馬場であつた。タイムは二分三十九秒一であつたが、少しも危氣がなく、堂々と勝ち、二着シゲハヤは五馬身の差、三着クリアヅマは三馬身の差であつた。

そして十九年秋、京都の檢定競走では特ハンをとり、重負擔競走に出た。この重負擔競走は各

馬六十五キロを負つて出るので、距離は二千米、出走馬は十頭であつた。このときクリアヅマは見事に雪辱してカイソウに勝ち、カイソウは六着であつた。次いで、種牡馬選定競走二千四百米（出場馬十三頭）に出たがカイソウは惨敗して十二着、遂に種牡馬となることが出来なかつた。

この時の競走では田村仁三郎厩舎のマツメイ（父シアンモア、母ヒエイ、新堀牧場産）が二分三五秒のレコードで勝つた。このマツメイは青森種馬所に、クリアヅマは栃木種馬所に種牡馬として繋養されてゐるが、カイソウはその後京都に設置された輓曳所に入つて馬車をひいてゐたさうである。日本ダービーの勝馬が馬車をひいてゐたといふことはおそらくこの馬が最初であり、最後であらう。馬の所有者、生産者が、心あれば、もつと幸福な餘生を送らせることが出来たのではないかと思ふ。

十二、三冠馬セントライト號

四歳の春出走してニシーズンに七回出走、一着六回、二着一回といふ驚異的な成績を示し、種牡馬となつた馬がある。このやうなことは競走馬として稀有のことで、まだ活躍して賞金を得る實力を十分にもちながら、そのあまりに優秀な力を勞費させず勇退させたのは、所有者の眞の愛

馬心によるものである。この名馬こそダイオライトの名聲をも高からしめたセントライト號である。

幾多の名馬を自ら二歳頃から選擇して所有するといふ熱心さをもち、しかもその鑑識の優れた點で斷然多くの馬主に羨望されてゐた加藤雄策氏の持馬の一頭であつた。セントライトは父ダイオライト、母フリツパンシーの産駒で、タイホウ（父はシアンモア）の異父弟である。昭和十六年の春横濱で新呼として出走し、初日千七百米のレースに一分五十三秒でオオトモ、フジホマレ、ロツクフオードを破り、八日目横濱農林賞典四歳呼馬千八百五十米に出て、一分五十九秒一で、ミナミモア、オオトモ、カミワカ、ロツクフオードといふ新鋭馬を破り、ダイオライト系の實力を示して驚嘆せしめた。次いで中山に出走して初日四歳呼馬二千米で先づ一勝し、八日目二千二百米に勝つて幸運の二連勝を續け、その勢ひをかつて直ちに東京競馬に移り、初日の特ハンに堂々古馬に挑戦したが惜しくもシヂリダケに敗れて二着となり、三日目の呼馬二千三百米に出て二分二十七秒でエステイツ、イエハマを破つて快勝し、いよいよ待望の日本ダービーに出走したのである。この大競走には例年のやうに全國から優秀な馬が集まつてくるし、生産者としてもダービーの勝馬を出すといふことは一代の名譽であり、生産者、馬主、調教師、騎手が一體となつて

勝ちを祈るレースである。

セントライトが榮冠をめざした第十次日本ダービーにも強豪が出場した。即ちステーツ、ブランドソール、テツパンザイ、カヅトシ、カミワカ等である。馬場は稍重く、セントライトには絶好のコンディションであつた。タイムは二分四〇秒一であつたが、二著に入つたステーツを八馬身も離れた堂々たる勝ち振りであつた。小西騎手の得意まさに絶頂の快勝であり、馬主加藤雄策氏も快心の笑をもらしたものである。

更にその秋京都競馬に轉じて京都四歳馬農林賞典三千米に快勝し、ダービー、横農、京都四歳農賞と四歳呼馬の出る大レースに連勝し、競走馬として最高の榮譽三冠馬となつたのである。四歳馬の三冠馬といふ空前の霸業成り、しかも四歳にして種馬に上るといふレコードを作つてセントライトはその生れ故郷の小岩井農場に歸へり、ダイオライトの血をその産駒にうけつがしてゐるのである。

今年の中四歳馬の中に六頭のセントライトの仔がゐる。そのうち五頭は小岩井産馬であるが、一頭は菅井牧場産である。

小岩井産は、東星（母はスターカップ）、東奥（母は第二オーグメント）、東葦（母は第三ア

ストラル)、東家(母オーイエー)、東華(母第四フロリスト)で何れも牡馬である。このうち東華はアストラル系だけに傑出した馬で、その活躍を期待されてゐる。

このセントライトと同じやうに僅かのシーズンを出走しただけで引退した血統馬がゐる。それはクレオパトラの血を引いたトシシロである。トシシロもダイオライト系で加藤雄策氏の持馬であり、セントライト等と同様に田中和一郎厩舎で管理し、新呼馬に独自の調教をしてその實力を示してゐる田中和一郎氏の調教に仕上げられた馬である。昭和十八年春東京で新呼として出走し初日千八百米に出てクリフジに敗れ、三日目千六百米を百〇一秒四といふ優秀なタイムで一勝し東京優駿競走に出走したが、快速馬クリフジに敗れた。このダービーは第十二回目で、牝馬クリフジ(現在日高種馬牧場で蕃殖馬となつてゐる)が二分三一秒四といふレコードで快勝した。牝馬でダービーに勝つたのはヒサトモに次いで二度目である。しかもヒサトモのタイムは二分三秒三であつたが、これよりも約二分つめてゐる好タイムであつた。二著はキングゼヤで六馬身離れ、三著はフジハヤで二著との差は頭、四著はタイウンで鼻の差、あとは四分の三馬身といふ二著以下の大接戦であつた。トシシロは六著に一馬身半の七著であつた。

セントライトと違つて競走成績はあまり芳しくなかつたが、ダイオライト系であり、血統馬ク

レオパトラの仔であるといふことが種馬として残された原因で、現在若草牧場に繋養されてゐる。年は七歳、今後大いに優秀な産駒を出すものと期待されてゐる。

十三、長距離に強いクレタケ

短距離に強い馬でも長距離にかなりな力を出す馬がゐるが、長距離になると最後の一息といふところで脚力を失ふ馬がをり、反對に短距離では他の快速馬に逃げ切られてしまふことがあるが長距離となれば意外に頑張つて快勝する馬がゐる。クレタケやカミワカがさうであつた。クレタケは短距離にも強かつたが、長距離にも強く、カミワカは新呼時代にはなかなか勝てなかつたが障碍に入つて二哩以上のレースで意外な強味を發揮した。

クレタケは父トウルヌソル、母は第三オーグメントの産駒で牡、昭和十七年春東京の新呼であつた。二日目には千八百米を一分五秒四で勝つたが、この時は十四頭立で實に鮮やかに勝つた。そして六日目の日本ダービーに備へたが、ミナミホマレの二分三三秒のレコード(二千四百米)に頸、一馬身半、半馬身それに四分の三馬身といふ白熱戦で五著になつた。この時の二著はアルバイト、三著はハヤタケ、四著シマハヤであつた。續いて八日目の四歳呼馬レース二千三百米で

ランドライト、シマハヤ、ハヤチネ、ステーツイブキ等の新鋭群を破つて快勝した。タイムは二分十五秒四であつた。古馬となつて阪神の御賞典レースに出たがランドライトに榮冠を得られ、一馬身、四分の三馬身、それに更らに四分の三馬身でクレタケは四著であつた。距離三千二百米。これは十八年春の競馬であつた。續いて中山に移り、中山記念二哩一分に出たが三分四五秒三でロツクフオード、ファンタスト、キングステーツ、ステーツイブキなどを破つた。このレースは長距離ではあつたが、レースは熱戦を演じ、四著まで殆んど一團となつてゴールに殺到した大レースであつた。秋の東京競馬では初日特ハンに勝ち、目黒記念（三千九百米）に出たが四著横濱では農賞四、五歳呼馬二千六百米に出てキングステーツに敗れて五著であつた。遂ひに御賞典レースには恵まれなかつたが中堅として活躍した。現在は若草牧場に繋養されてゐるが、國有種牡馬で栃木種馬所の管理馬である。

今年の四歳馬に三頭の産駒を出してゐる。一頭は若草牧場産の捷縁（牡、母はワカミドリ）、それに麻生個人牧場のカイウン（牡、母はカイテン）、もう一頭は大東牧場産の大陸（牡、母はテイフィン）である。如何なる成績をこれらの産駒が示すか注目されてゐる。クレタケは府中の尾形藤吉厩舎で調教管理された馬である。

カミワカは田村仁三郎厩舎に屬し、豊島美王麿氏の愛馬であつた。父はダイオライト、母は米サラ星若で牡、エレギヤラトマス（父は佛サラ、サーギヤラハツド三世）、サンダーランド（父はトウルヌソル）等の弟で血統的に優秀な馬である。その駈歩時代は血統的真價を發揮し得ず、どうしてこう走らないのか不思議に思はれてゐた。ところが障碍に入ると驚くほど走り障碍馬の強豪カケノマツなどを破つて堂々と勝ちつゞけた。十八年春東京では初日三千二百米、四日目四千五十米（大障碍）と二勝し、中山では農林賞典大障碍四千二百四十米に七十キロといふ重量で五分五秒一といふタイムを出して強豪クモウミ、カケノマツ等を破つて障碍馬として最高の榮譽を得た。この時の騎手は岩下密政君、實に鮮やかなジャンプであつた。現在は北海道新冠牧場に種馬となつて餘生を送つてゐるが、血統的に優秀な産駒を出すと思はれ、カミワカの仔は忘れ難いものとならう。よき配合を得た産駒を早く見たいものである。

障碍馬としては、ブラツクポニー、ウミカゼ、ツクバ、キングホーク、ヤマミチ、マドンナ、サンダークラップ、シンボリ、アスベル、キンテン、レンドサンド、ジャツクフロラー、ヒリユウ、ダービー、ハナフブキ、ヒノモト、フソウ、ヒロミヤチダケ、キンテキ、エルクハート、チカラ、トクタカ、コクオー、リードアン等記憶に新しくフアンの血を湧かした有名な馬が多くゐる。

十四、名馬ハクコウ、アカイシダケ

名騎手名調教師尾形藤吉氏（元は景造と云つてゐた）が調教し、騎乗した馬は数多いが、競馬ファンに記憶に残つてゐる馬で、尾形騎手が乗つた馬では、ハクシヨウ（十七勝）、クインホーク（九勝）、ワカクサ（十四勝）、ヤママサ（八勝）、ハクヨシ（十六勝）、サンシャイン（十三勝）、ヤマヤス（十七勝）、アスコット（十七勝）、セイウン（オオツカヤマ八勝）、ワカミチ（九勝）、フレモア（七勝）、デンコウ（十二勝）、テモア（七勝）、ハクコウ（十二勝）アカイシダケ（十一勝）などが主なるものである。騎手としての尾形氏は昭和十一年の日本レース（横濱競馬）に出てアカイシダケに乗つて出たのが最後である。昭和五年春三月廿六日中山記念四千米の大レースにハクシヨウ號に騎乗し、強豪ナスノと覇を争ひ、遂に四千米の長距離を逃げ切つて快勝し、満場のファンを熱狂せしめた。當時新聞は社會記事として之を報道した位である。どのレースにも殆んど追ひこんで勝つてゐた尾形騎手は、このレースでは初めから先に立つて遂に逃げ切つたのである。強豪ナスノは終始これを追つたが僅かに三馬身及ばずして敗れ、尾

形騎手の頭腦的作戰は美事效を奏したといふ大レースであつた。

この名騎手尾形をスタートで振り落し、尾形騎手落馬の挿話を作つたのは名種牡馬となつたハクコウであつた。ダツシダの蘆毛も素晴しかつたが、ハクコウの蘆毛も實に美しかつた。

然しこの快速馬もスタートにつくと必ず後に下り横へゆき、ハクコウが出るとスタートに時間がかかりファンを焦々させた。然し、一度走るや追ひこみにかゝつての快速は物凄いなものであつた。昭和七年秋、目黒の新呼として初出走し千八百米を一分五六秒で勝ち、八日目に優勝し、新呼として好調なスタートを切つた。直ちに中山に移つて中山ステークス二千四百米に出て、第一回東京優駿競走の勝馬ワカタカを破つて快勝し、八年の春には中山で一勝し、日本レースでは初日特ハンに二著となり、二日目の御賞典に出て二千米を二分七秒一で勝ち、八日目に優勝し、東京では初日二千米に勝ち、四日目五歳特別に勝ち、六日目農林賞典二哩を三分三三秒で勝つて三連勝し秋には日本レースで三日目に一勝して優勝をとり、中山に移つて七日目の五歳馬特別二哩を三分二六秒といふレコードで快勝して引退した。七年秋から八年秋まで丁度一年三シーズンに十二勝し、二着二回といふ好成绩をあげたのである。ハクコウの父はベールブルシェード、母はスリリング（持込馬）である、千葉縣新堀牧場産で、現在同牧場に種牡馬として餘生を送り、既に

優秀な産駒を出してゐる。その種付料は一回二百圓である。

アカインダケは父シアンモア、母フロリストで、ハクリユウ（父ラシデヤ）の異父弟、ハクセツ、スターカツプの全弟である。昭和十年春東京の新呼として出走し、先づ一勝して日本ダービー（第四回）に出たが、快速馬ガヴァナーに六馬身敗れて二著、然し新呼として優勝し、その秋日本、中山で優勝して四勝し、東京では三日目黒記念三千四百米を四分一秒三で勝ち、六日目の農林賞典三千二百米に出て三分三六秒二でこの長距離に連勝してこの秋六勝し、十一年春には初日に一勝し、中山特別四千米に出て四分四九秒二で勝ち、日本レースで一勝（七十一キロ）東京の初日特ハンにはイリヨクに四分の三馬身敗れて二著となつたが、四歳五歳の二年四シーズに十一勝し、しかも新呼で優勝、古呼優勝二回、帝室御賞典の榮冠を得、中山特別、農林賞典目黒記念と大競走に勝つといふ素晴らしい成績を残した。現在は鹿兒島種馬所で種牡馬となつてゐる。種付料は十圓、思ひ出深い名馬である。

十四、連戦連勝の大記録

新呼時代に大した成績をあげなかつたのに障碍入りをして意外に成績をあげる馬がよくある。

前述したカミワカがさうであつたが、ハナフブキ、コクオーなどもさうである。

コクオーは牝馬（父アスフォード、母第一サンダーの三）中山の新呼として昭和十二年秋出走したが、七日目の千八百米で一勝したに過ぎなかつた。しかも十三年の春には障碍入りをして東京に出走したが着外でそのまま休養し、十三年秋福島に行き、初日呼障三千米に出てセイショウの三分の二九秒一のレコードに四馬身で二著、三日目二千七百米十二頭立のレースで一勝したのが障碍入りをして勝ち初めで、横濱に轉するや初日特ハン二千八百米でキンリユウ、カネイツミを破り、八日目優勝三千六百米は三頭立となり、コクオーは樂勝した。東京の呼障特ハン三千三百二十米では三分五七秒一といふレコードでヒロミツ、トナメント、トクタカを破り、四日目特別大障碍四千五十米を五分〇八秒でトクタカを破り、連戦連勝の一路を進みはじめた。阪神に遠征しては五日目二千七百米で樂勝し、優勝三千六百米も軽く勝ち、京都に轉するや初日三千米に三分二六秒で勝ち、優勝三千七百米を四分二五秒で勝つて福島で一勝して以來九戦九勝の驚異的な成績を示した。

翌十四年春は中山の呼障特ハン三千百米に出たが負擔重量六十九ロキでミスターシービーの三分四四秒一のレコードに半馬身敗れて二著となつたが、五日目の農林賞典大障碍四千百米では五

分三秒四で快勝し、フアンを熱狂驚嘆せしめ、直ちに京都に移つて四日目呼障特別四千三十米に出たが、トクタカの五分一秒二に二著となり、六日目ハンデ三千七百米には七十四キロで四分三秒のタイムをもつて勝つた。更に東京に戻つて初日特ハンに出たが、轉戦の疲れが出たか、三千三百二十米にリードアンの三分五九秒二に及ばず二著となつた。飛越に於いては比類なき巧みさを示したコクオーがジャンプを誤つて障の騎手松永光雄君をして落馬させた。それは東京四日目の特別大障四千五十米であつた。この時はトクタカが五分四秒二のレコードで勝つたがコクオーただ一回の失策であり、しかも障入りをしてはじめてのゴールインをしなかつたレースであつた。福島以來二着以下に下らなかつたコクオーの不覺の一レースであつた。その七日に二頭立て樂勝、十四年秋には京都の特別四千三十米に四分四七秒のレコードで勝ち、東京に出走して五日目の四千五十米を五分五秒二でシャインモア、トーナメントを大差で退け、十四年には五勝、二着三回、落馬一回といふ成績をあげ、障入りをして二十回出走して十四勝、二着三回、着外一回、落馬一回といふ大成績をあげ、極量七十七キロに達して優退した。コクオーは種牝馬としてサンダーリングと呼び、現在五戸三浦牧場に餘生を送つてゐる。二十年六月三日コクオーの産駒が生れ、今年二歳である。

ハナフブキも平場時代には僅かにニシーズン二勝したに過ぎなかつたが、十年秋障入りをするや中山、日本、東京と三場所三優勝し、六戦六勝向ふところ敵なしの好成績を示したが惜しくも故障のまゝ休養し、それ以後遂に競馬界を退いてしまつた。現在はどうしてゐるかその消息を知るものがない。いま思つても惜しい馬で、秋中山に初めて障障に入つて出走するときは小西騎手も素晴しくジャンプの巧みな馬でどんなものにも負けないと云つてゐたが、その小西騎手の自慢したやうに危氣ないレースをしてフアンを喜ばせた。關西、關東馬をなでぎりをしたコクオーのやうに連戦連勝の大記録を作るべき馬であつた。

十六、惜敗をつづけたタエヤマ

名馬でありながら不運なレースをして競走成績としてあまり香ばしくなかつた馬があり、又故障のために不振であつた馬も少くない。前述したダツシング、トシシロなどさうであり、パプステツドなども故障のために誠に不振であつた。茲に回想するタエヤマもさうである。タエヤマは下總牧場産、父はトウルヌソル、母は山妙昭和十三年春中山に新呼としておろされた馬である。

中山競馬の初日ダツシングに頭の差で及ばず二着となり、三日目にスゲヌマを敗つて二千二分十秒二で勝ち、横濱に轉じて二日目に二千米で一勝、優勝にはピユアソールに敗れて二着、東京の初日二千四百米に勝つて、日本ダービーに出走したタエヤマのコンディションは上々であつたがスゲヌマの好調に僅かに及ばず二分三三秒二のスゲヌマに頭の差で二着となつてしまつた。銀鼠色の服色も鮮やかに騎手赤石の快腕をもつてして遂に若冠中村廣騎乗のスゲヌマに敗れ去つたとき流石の赤石騎手も顔面蒼白となり無念の齒がみをした。

更に八日目呼馬の優勝レース二千六百米に出たが、ダービーの疲れがあつたが六十八キロのヒサトモに敗れ二着のフェアモアに鼻の差で三着となつて春のシーズンを送つた。その年の秋の横濱では初日特ハン二千二百米を二分二秒二でフェアモア、ナスノフオードの強豪を敗つて幸運のスタートを切つたが六日目の農林省賞典にはヒサトモに頸の差でスゲヌマそれに一馬身四分の三でタエヤマ三着であつた。第六次ダービーの勝馬ヒサトモ、第七次ダービーの勝馬スゲヌマに敗れ去つたのである。

そして八日目の優勝戦を迎へたがナスノフオードに大差で二着となつてしまつた。東京では三日目二千三百米でテツモン、ナスノフオードに敗れて三着、中山では四歳特別に出て二千六百米

をヘンウンの二分五〇秒二にオブテイミスト鼻の二着、タエヤマはそれに頭の差で三着であつた直ちに京都に轉戦し初日好調に勝つて京都農賞典に出たが、テツモン、コンバターに敗れて三着これらの成績が示すやうに惜敗を重ねて、鮮やかな勝ちぶりを示したことは僅かであるといふ不運なレース記録を残して種牡馬となつた。

タエヤマは現在栃木種馬所の種馬となつてゐるが、春の種付期には千葉縣に出張してゐる。今年の四歳馬にタエヤマの仔がゐるが、何れも若草牧場産の牝馬である。その一頭は錦旗（母は第五パンフィットで競走名キンモア）、一頭は山櫻（母はサクラメント）である（山櫻は實際は社畜牧場産であるが、若草牧場で買つたのである）母系は何れも優秀であるからタエヤマの良質をうけつげばこれらの産駒は相當走るであらう。

競走成績は輝やかしく、帝室御賞典まで獲得して種牡馬となつたロツキーモアは昭和十七年の秋東京競馬場で種牡馬をファンに供覧するために青森種馬所から輸送されてきたが途中輸送肺炎を起し、遂に東京に着いて不幸にも斃死してしまつた。今年のアラブ四歳馬の中にロツキーモアの産駒が二頭ゐるが、何れも優秀である點から見て、ロツキーモアの優秀な血統をなほ多くの産駒に残したかと思ふ。ロツキーモアは二十四回出走して一着十四回、二着五回、三着

一回、着外は四シーズンで僅かに四回であつた。一着を得た主な競走は帝室御賞典、中山四歳呼馬特別、農林省賞典、特ハン三回、優勝二回である。もつてロツキの活躍ぶりを知ることが出来る。血統はシアンモアにアストラル。カプトヤマ、カプアナー、フラインモアの全兄弟である。

十七、最高馬イサオーバル

日本に於ける競走馬の最高馬は小岩井産馬イサオーバル（父シアンモア、母フリツパンシー）である。タイホウの兄弟セントライトの異父弟である。昭和十七年秋三歳のせりに七萬五千圓で石原氏が購入し、中山の須藤厩舎に預託した、もう一頭は同じ年同じ小岩井から出たイマヒカリ（父ダイオライト、母第四ウエツディングサーフ）でブランドソールの弟、購置価格は七萬百圓、馬主は今泉氏、福島及川厩舎に一任された。この二頭が七萬圓といふ最高値である。その次はヒロザクラの六萬五千圓、トシシロの六萬六百圓共に下總牧場産馬である、しかもこのイサオーバル、イマヒカリの二頭は、高馬ではあつたが競走成績はあまり香しくなかつた。

イサオーバルは横濱の初日千六百米に出走しフジハヤの一分四十一秒二に一馬身半七二著、三

日目はミヨノセンリの二著、四日目はダイエルクに二著で三回出走して、三回とも二著であつた。東京に移つても初日二千三百米に出てキングステーツに四分の三馬身で二著、五日目の二千三百米のグラットドレスに一馬身の二著、東京優駿に出て二十五頭立てクリフジの一分三十一秒二のレコードに第一人氣のイサオーバルは十四著であつた。このイサオーバルは何しろ七萬圓といふ高馬ではあり、血統的にもタイホウの弟ではあり、連勝連戦三冠馬となつたセントライトの弟であるため非常に評判になり、つねに人氣があつたが、二著ばかりを五回つゞけて、いよいよ優駿には快勝を示すものと期待されたが、惨敗のうきめを見てファンを失望せしめた。

その年秋横濱の特ハンで期待されたがハツピーマインに惨敗して七著、八日目四歳呼馬千九百五千米に出てツガルの二分五秒三に鼻半馬身の三著、東京初日の特ハンの十一頭ではクレタケに敗れて三著、四日目二千六百米で漸く勝つたのである、タイムは二秒五十二秒一、十回出走して十回目にやつと勝つた、次の八日目のレースにはツガルに敗れて二著、中山の特ハンにもツガルに敗れて五著、四日目二千六百米にはイマヒカリに三著、六日目中山四歳特別には著外、十九年春東京に出たが五著で遂に九千三百五十圓の賞金を得たのみで退き、タイホウ、セントライトに似ず名馬の血統を汚した感があつた。これは如何なる原因があるか大いに研究の餘地があると云はな

ければならない。

同じやうに七萬圓といふ高馬で評判になつたイマヒカリも大した成績ではなかつた。これは厩舎の關係もあつたらうが、殆んど新呼は中央の大競馬場の新呼の初日優勝を狙つて出走するのに福島で初出走をした、福島では初日三著、三日目千八百米で一分五十五秒二のレコードで勝ち、優勝には四著と惨敗し、秋を待つて新潟に出走したが二著となり、直ちに横濱に轉じて二日目二千四百米に出てイマリユウに四馬身の二著、六日目の十五頭のレースで漸く一勝したが、京都に遠征して四日目四歳呼馬二千米で出てイチシウスイに敗れて二著、五日目に一勝し八日目の京都農林賞典四歳呼馬三千米でクリフジの三分十九秒三に大差で三著、中山に戻つて四日目二千六百米を二分四十六秒四で勝ち、中山四歳特別で二著、八日目ハンデで三著、四歳の春秋には僅かに五勝、十九年春東京の能力檢定競走で三勝二著二回、京都の帝室御賞典競走に出たが二著となり、これを最後として遂に退き、これも何處かの乗馬として餘生を送つてゐるのかその後の消息は不明、イサオーバル、イマヒカリ共に種馬にならなかつたのは血統馬しかも高馬として不幸な終局を上げたものである。

十八、名馬の賞金獲得高

イサオーバルが七萬五千圓の高馬でありながら僅かに九千三百五十圓の賞金を得たに過ぎず、七萬百圓のイマヒカリは四萬五百圓を獲得して引退したが、競走馬はこんなに稼げないものか、ここで一寸名馬の獲得賞金調べをして見やう、これまで書いた馬も入つてゐるし、これから書く馬も種牡馬となつたものを主として他人の懐勘定をして見やう。賞金獲得高はダービーの勝馬ヒサトモで、これは牝馬であるが十萬圓を越えた、これが日本における賞金獲得高の第一位である。ロツモアは購買價格三萬四千圓、十四勝して賞金八萬三千五百八十九圓、種馬として二萬八千圓で賣れたので合計十一萬千五百八十九圓、これなども最高の方である、スゲヌマは千明牧場で自家生産馬として出走し、賞金は八萬五千五十四圓を得た。

ハクシヨウは四千圓の馬であつたが、十七勝して六萬四千五百八十六圓を得、これなどは今から思へば安い馬ではあるが、十七勝といふ大記録を残し非常に多額の賞金を得た代表馬である。

セイウンは馬代金一萬五百圓、八勝の賞金三萬四千九百四十五圓五〇錢、ヘンウンは一萬三千

圓の馬で十一勝賞金は六萬三千七百二圓、種馬として二萬圓で買上げられ、リョウゴクは一萬四千二百五十圓十一勝四萬五千八十三圓の賞金、ワカタカは一萬五千三十圓で十二勝七萬三千六百九十八圓種馬として九千圓で買上げられ、ケンシユンは一萬五千圓、當時としては高馬であつた、十三勝して五萬四百二十圓を得、八千圓で種馬となつた、トクマサは一萬五千四百五十圓の馬、これは比較的安い馬であつたが九勝して六萬三千六百二圓七十五錢といふ賞金を得てゐる、ハクリユウは八千圓の安馬であるが十三勝して五萬四千五百六十圓を得た。

- トキノチカラ (十一勝) 一八・五〇〇圓 賞金六三・六六五圓
- デンコウ (十二勝) 二〇・〇〇〇圓 賞金六三・八〇八圓
- カプトヤマ (十二勝) 二〇・一五〇圓 賞金七四・四六五圓
- ガイカ (九勝) 二一・五〇〇圓 賞金五一・五〇五圓
- ハクセツ (十三勝) 二三・二〇〇圓 賞金七一・六六一圓
- タイホウ (十一勝) 二三・六〇〇圓 賞金五一・七六五圓
- メブステツド (二勝) 二五・〇〇〇圓 賞金 四・五〇〇圓
- ハツピーマイト (九勝) 二七・六〇〇圓 賞金四二・一〇八圓

クモキク (九勝) 二八・四〇〇圓 賞金四五・九七二圓

アヅマダク (八勝) 三〇・〇〇〇圓 賞金四五・七三一圓

アカインダケ (十一勝) 三一・〇〇〇圓 賞金六四・七四二圓

ゼネラル (十勝) 三二・〇〇〇圓 賞金四六・三二二圓

ファインモア (八勝) 三二・〇〇〇圓 賞金四六・八七六圓

ダツシグ (三勝) 三六・一〇〇圓 賞金一四・六五〇圓

クモハタ (九勝) 三七・六〇〇圓 賞金七四・四一四圓

このクモハタは種馬としてはかなり高値の三萬二千圓で買上げられてゐるから十萬六千圓餘になつてゐるわけであり、ハツピーマイト、ファインモアは共に二萬五千圓、クモキクは二萬圓、トキノチカラは一萬八千圓、アカインダケは八千圓で買上げられてゐる。何れもそれぞれこれらの馬は餘生を幸福に送つてゐるわけで、ただロッキーマアだけが早世してゐる。この競走馬と獲得賞金、購買價格そして進上金飼養料などについての計算がどのやうになるかは何れ項を改めて書くが、ここには高馬だから賞金が得られる安馬だから稼げないといふことがないといふことだけを書いておく。クモハタのやうにダービーもとり相當活躍し然も高値で種馬となつたのなどは

恵まれた方である。名馬の獲得賞金購買価格の思ひ出をここに記して、名馬は何處への筆をもう
一二項進めてみやう。

十九、トクマサ快勝の因

日本ダービーで二百圓の配當をつけたのは第五回のトクマサが初めであつた、このレースは十
三頭であつたが、パステツドをはじめマルヌマ、ハツピーライト、ピアスアロートマスなど人氣
の伯仲した馬がゐた、それが中山で新呼として出走し三回目に漸く千八百米のレースで勝つたに
過ぎないトクマサに破れたのである。トクマサの人氣は殆んどなく單票僅かに百六票であつた、
これはトクマサが中山で一勝し優勝レースには二二〇〇米二分三秒二のマルヌマに二馬身半で
ハツピーライト二着、トクマサは頭の差で三着であり、それ以後肩を悪くして東京ではダービー
までに一回も出走しなかつたことに原因がある。

いよいよダービー馬の調教が最後の段階に入つてもトクマサはさして早い調教タイムも出さ
ず慎重に調教されてゐた。筆者はダービーの出走登録を見たとき尾形調教師にトクマサには誰が

騎乗するかをきいてみた。すると尾形調教師は「もしよかつたら自分が乗る」と云つた、ところが
出場前に騎手が発表されてみると伊藤正騎手が乗ることになつてゐるので、これは調子が悪いか
ら弟子に乘せるのだと合點してしまつた、あとでどうして伊藤正騎手を乘せることにしたのかと
きいてみると尾形自身乗るつもりで體重の減量を努力したが五十五キロに減量できず（勝負服を
着て鞍を持つて目方を計つて五十五キロにならなければならぬのである。僅かの増量は許され
るが二キロも三キロも増すことは許されない）それで軽い伊藤正を乗せたといふのである。しか
もこのレースにトクマサが快勝したのは調教師の頭腦的な方法がとられた。この日、雨上りの
重馬場は芝生ながら相當滑るやうなコンディションであつた、それを尾形調教師は朝から心配し
てゐたのであつた、何故ならトクマサは滑るやうな馬場はあまり得意ではなかつたからである。

ところがこのダービーの行はれる前第八競馬に雨の不良馬場や重馬場に得意なフソウが堂々と
勝つた。そのフソウがカンカン場（入著馬を檢量するところ）に入つてきたのをちつと見てゐた
尾形調教師は急いで特別製の齒鐵を馬丁に云ひつけて競馬場の近くにある自宅に取りにやつた。
レースは迫つて十一競馬である、それまでにトクマサのつけてゐた普通のレース鐵と特別の齒鐵
と打ちかへなければならぬのだ。それが漸く間に合つて齒鐵をうちかへて出場したのである。

第八競馬に重馬場得意のフソウが勝つた、フソウは齒鐵をつけてゐた、フソウでさへ齒鐵をつける位であるから餘程滑るに違ひないと思つたのである。そうしてトクマサは遂に快勝したのである、重馬場に強いピアスアロートマスの必死に逃げるのをゴール直前に押へ、僅かに頸の差だけ勝つたのである、三着は二着に一馬身四分の三で實に白熱したレースであつた、この快勝のあとをうけて横濱に移り、二日目御賞典レースに出て二千米を二分七秒四でハツピーライト、マルヌマを破つて榮冠を得た。四歳馬でダービーに勝ち御賞典に勝つて中山の不振を一舉に取り返してしまつた。その勢をかつて優勝に出たがイリヨクに破れて四着になつた。

秋には中山で出走したが二日目エルクハートに破れ、四日目の四五歳特別にはマルヌマに破れて三着になり、五日目も三着であつた、然し翌十二年春には中山で特ハン優勝と連勝し、横濱で一勝し、東京の目黒記念には三千四百米を三分四〇秒のレコードで勝ち、秋には中山記念に勝ち、優勝にはサンダーランドに四分の三馬身破れた。トクマサはトウルヌソルに種正の産駒で二十七回出走し九勝二着五回三着八回着外五回であつた、いまは朝鮮蘭谷牧場に種牡馬として餘生を送つてゐる。

廿、快速馬ハクリユウ

ハクリユウは昭和六年春當時日本レースと云はれた横濱競馬に新呼として出走した、初日は二千米をクラツクアストの二分九秒三のレコードに三着、二日目は千八百米を一分五六秒二のヤマミチのレコードに一馬身半の二着、三日目にはヤマタエに破れて二着、五日目の千八百米でやつと勝つた。しかも二頭立であつた、その秋には日本レースで一勝（横濱特別二マイルを三分三二秒一で快勝）、中山で六日目に勝ち、東京に行つて初日特ハンにオールマイン、ワカクサを破つて勝ち、二日目御賞典に勝ち、四日目聯合二マイルには三分三六秒でヤマタカ、ハクヨシ、ヤマタエを破つて一競馬場で三勝し、京都に遠征して五日目に勝ち、八日目優勝にはハツピーチャペルの二分五一秒三のレコード（二千六百米）に三馬身で破れた。

越えて七年春には中山特ハン二千米を二分七秒四のレコードでハクヨシを頭だけ破つて勝ち、中山特別四千米には四分二三秒四のレコードで逃げ切り、名馬ケンコン、ケンキン、オールマイン、ヤマタカ、サンシヤイン等を破つて堂々と勝つた。

更らに東京に移り初日特ハンにはハクヨシに鼻で破れたが、三日目黒記念二哩一分（三千四百米）には三分四四秒のレコードでハクヨシを破つて雪辱し、六日目ハンデ千八百米にアサヤスの一分五五秒一のレコードに半馬身で破れた。ハクリユウの重量は既にこの時七十五キロであった。日本レースでは特ハン二千米でハクヨシの二分六秒二のレコードに再び破れ、二日目にアサヤクラに勝ち、その夏開かれた中山記念競馬で初日千八百米を一分五六秒二のレコードで勝つた。然しこの時には三日目のハンデに出て千八百米を一分五五秒二のヤマヤスのレコードに一馬身四分の一で二著、四日目二千米に出て二分六秒二のレコードのヤマヤサに四分三馬身破れて二著となつた。これがハクリユウ最後のレースであつた。

四歳の春出走して五歳の春まで三シーズンに三十一回出走して十三勝し、二著十回、三著四回著外僅かに四回であつた。しかもレコードで勝つこと四回、そのうち目黒記念三千四百米、中山記念四千米のレコードはハクリユウの快速馬であることを證明してゐる。ハクリユウは父内サラランデヤ、母内サラ、フローリストの仔でハクセツ、アカインダケの異父兄である。

ハクリユウは現在北海道社畜場の種牡馬として幾多の産駒を送り出してゐる、しかもハクリユウの産駒は相當の成績を現はしてゐる。その代表馬はマルタケである。ハクリユウはつねに逃

欠

欠

トキノチカラにレコードタイムで榮冠を得られ、ロツキ一、クモハタに二、三著を奪はれて慘敗したのである。この雪辱戦としての横濱競馬の農林賞典四五歳呼馬二千八百米にも再びロツキ一モア一の三分三秒四のレコードに一馬身半で、クモハタ、それに頸で三著となつた。

ロツキ一、クモハタにはつねに苦戦してゐたが、東京競馬特ハンにも七十一キロのロツキ一モア一に一馬身二分の一破れ二著となつた。しかしクモハタは不調で四着、三日目の五歳特別にはクモハタを破つて快勝した。更に六日目御賞典レース二哩に出たが再びロツキ一モア一、クモハタに破れて三著となり、そのまま休養し、翌年十六年春阪神競馬の御賞典をめざしてこのレースのみに出走し遂に御賞典の榮譽を獲得して競走場裡を去つたのである。マルタケの出走回数、シーズンは五シーズンに亘つてゐたが二十回で、一著十四回、二著二回、三著二回、四著一回、著外僅かに一回であつた。しかもこの著外は同馬にとつては是が非でも勝ちたかつたダービーだけに誠に遺憾であつたらう。しかしまたマルタケの成績としては特ハン二回、優勝三回、農林二回、それに御賞典を得るといふ先づ呼馬として相當のものであつた。ただこれまで優秀な馬があまり走らなかつた小倉、札幌を走つてゐることである。

小倉を新呼としてスタートし、札幌は調教管理にあたつてゐた清水茂厩舎の所屬馬場である關

係からであつたらうが、他の優駿馬が、京都、阪神、東京、横濱、中山をめざし、しかも特ハン優勝特別レースを狙つて強豪と覇を競つてゐるのにマルタケは強豪と取組んだのは京都の農賞と阪神の御賞典と横濱の四五歳特別、東京のニレース位のものである。

廿三、草競馬に出たカンロ

アラブ系の名馬カンロは新潟の新抽として昭和九年の秋に五歳で出走した。カンロの父はサラオールグリン、母は内アア、ベカシンで内國産アングロアラブである。不良馬場にも重馬場にも強く、昭和十一年春七歳までに十九勝といふ勝利度数を重ねた。しかも二著になること僅かに四回、三著一回、著外になつたことは一回もなかつたといふ驚くべき競走をした。なほ優勝八回、殆んど一勝して優勝し一競馬場で二回以上走つたことは一回もなく、レコードタイムで勝つこと九回に及んでゐる。先づ昭和九年秋新潟の初日第一レースで二千米を五頭立で走つて勝つたが、この時の配當は單十七票で十九圓といふ勝つて元が切れたといふ記録を作つた。二著馬を大差に引き離してゐるが、カンロが勝つたときは殆んど二著馬を五馬身、七馬身、大差といふ非常な離

し方で優勝してゐるのが目につく。新潟では六日二千米を二分十三秒一のレコードで優勝し、福島に移つて二日目に勝つて二千米を二分二十七秒四のレコードで優勝し、京都に轉戦し三日目二千四百米を二分四十秒一のレコードで、ナニワホマレを十馬身離して勝ち、優勝には二千四百米を二分三十八秒のレコードでゴリュウカツプを四馬身半破つて連勝の成績をあげ、阪神に轉ずるや二日目千八百米のレースで一分五十七秒二といふレコードで勝つて優勝レースに進んだ。八日目優勝の二千二百米にはゴリュウカツプの二分二十四秒二といふレコードに一馬身四分の一敗れてゴリュウカツプに雪辱され、常勝カンロ遂に一敗の憂き目を見た。これまで七戦七勝の記録を作つたのであるが、遂に敗れてこの秋を送つたのである。

翌十年の春、阪神競馬に初まり二日目に優勝して、優勝二千二百米で二分二十四秒一のレコードを作つてゴリュウカツプを破り、京都に移つて二日目に勝ち、優勝した。その秋中山に遠征して初日に二千二百米を二分二十六秒一のレコードでテルトモ、ゴリュウカツプを破つた。しかも重量は六十八キロであつた。カンロは再び連戦連勝し、春から五戦五勝してカンロ敗れずと云はれてゐたが、八日目の優勝に再びゴリュウカツプに敗れて遂に三著となつた。次いで日本レースに移り三日目は先づ勝つて優勝レースに出るやトキノハナに三馬身敗れて二著となつた。その後東

京競馬特ハン二千米ではカンロ七十五キロで七十四キロのトキノハナを五馬身破つて堂々と勝ち八日目優勝し、京都に轉じて初日特ハン二千米を二分九秒三のレコードでゴリユウカツプを七馬身破つた。この時のカンロのハンデは七十六キロであつた。八日目に優勝して十年春秋に十勝、二著一回、三著一回の成績をもつて終つた。翌十一年春には京都記念競馬にはカンロは極量七十七キロで出て初日アキヅキに一馬身四分の一敗れて二著、五日目特別レース（優勝レースに代るもの）に快勝し、阪神の二日目七十七キロで二千米を二分二十六秒三のタイムで二著のキョミヤを大差に離して樂勝し、カンロまだ老いずの感をもたしめたが、八日目の特別ハンデ二千米に出でテルトモの二分三十七秒四に頭だけ敗れて二著となり、これを最後として勇退した。然し公認競馬は勇退したが、その後羽田あたりの草競馬などに出走してゐた。

カンロ程の名馬が草競馬に出でゐるのは見るに忍びないと大川義雄氏が自分の經營してゐる大平牧場の種牡馬として買上げた。更に現在では萬青と稱し八戸馬匹組合で種馬となつてゐる。

二十四、女王クレオパトラトマス

栗毛流星の端麗な姿をもつた女王クレオパトラは、十九回出走して十六勝、着外三回といふ華やかな成績を残してゐる。昭和十年春阪神に新呼として出走し初日四歳牝馬で先づ一勝し、五日目特別二千米を二分二秒四のレコードで快勝して幸先きのよいスタートを切つた。直ちに東上して東京競馬二日目の御賞典レースに出走して古馬を退けて榮冠を得、六日のダービーに出たが、これは不運にも快速馬ガヴァナーに破れて着外、然し古呼優勝をとつて日本レースに移り、四日目の四歳特別にスモールジャツク、ナスタマを破つて勝ち、優勝にはトーチ、チャレンジヤを破つて四歳馬ながら堂々たる勝ち振りを示した。

秋には阪神の特ハンでスモールジャツクに破れ七頭立の七着であつたが、三日目平場で勝つて故障のため休養した。次の春阪神の六日目に一勝し、京都に轉じて農林賞典牝馬特別二哩に勝ち、直ちに東上して日本レースに出で五日目の横特二哩に六十五キロでアカインダケ、アトランタを退けて勝ち、京都、横濱の二哩特別を連勝した。十一年一月の日本レース記念競馬では二日目の農林賞典二哩に出たが、ハツピーユートピアに名を成さしめ、ニホンカナメに頭の差で三着となりクレオパトラ三度目の敗退であつた。然し四日目の牝馬特別には堂々と勝ち、秋季には京都競馬で二日目に勝ち、阪神の特ハンに二千米を二分二〇秒のレコードでヒダカヤマ、エレギ

ヤラトマス、ダイナモ等を破つて勝ち、阪神記念二哩一分に六十七キロの重量で快勝した。
 更に東上して東京競馬に出るや初日特ハンをとつて、五日の五歳馬特別に出走、七十二キロで二分三八秒一のタイムをもつてモアーザン、キングザザを破つて勝ち、御賞典、五歳特別、阪神記念、横特、農賞、特ハンニ、新呼特別、四歳特別、四五歳牝馬、優勝二回といふ牝馬ながら好成績を収め極量に達して蕃殖馬となつた。クレオパトラトマスは米サラ、キヤムプファイアー、米サラ星旗の仔で、リブルス、クモハタの姉である。現在は北海道日高種馬牧場にて産駒を送つてゐる。この産駒の代表馬としてトシシロがある。

名馬は何處にゐる？ その昔或は最近フアンの記憶に甦つてくる名馬は多い。然しその多くは種牡馬となり、或は牧場に歸つて蕃殖馬となつてゐるが、イサオーバルのやうに行先きのわからないのもあり、カイソウの如くダービー馬であり乍ら馬車をひいてゐる馬もあり、いろいろの生涯を送つてゐる。人間生活と同様華かなもの、哀れなもの、有為轉變である。菊地寛氏は「無事は名馬」と云つたが、無事であることは名馬の条件の一つであり、無事であればこそ思ふ存分競走をして全能力をあげ、大レースに勝つのである。

×

新競馬讀本



昭和二十二年四月一日印刷
 昭和二十二年四月五日發行

定價三十圓

著者 日刊スポーツ社

東京都中央区銀座七ノ四

發行者 兩角政人

東京都千代田區内幸町二ノ二〇

印刷所 時事印刷所

東京都中央区銀座七ノ四

發行所 日刊スポーツ社

電話銀座七四九六番

788.5

N73

終